

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書VI

鳥取県東伯郡東伯町

中尾第1遺跡

2004

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書VI

鳥取県東伯郡東伯町

中尾第1遺跡

2004

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められていますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業にかかる一般国道9号（東伯中山道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

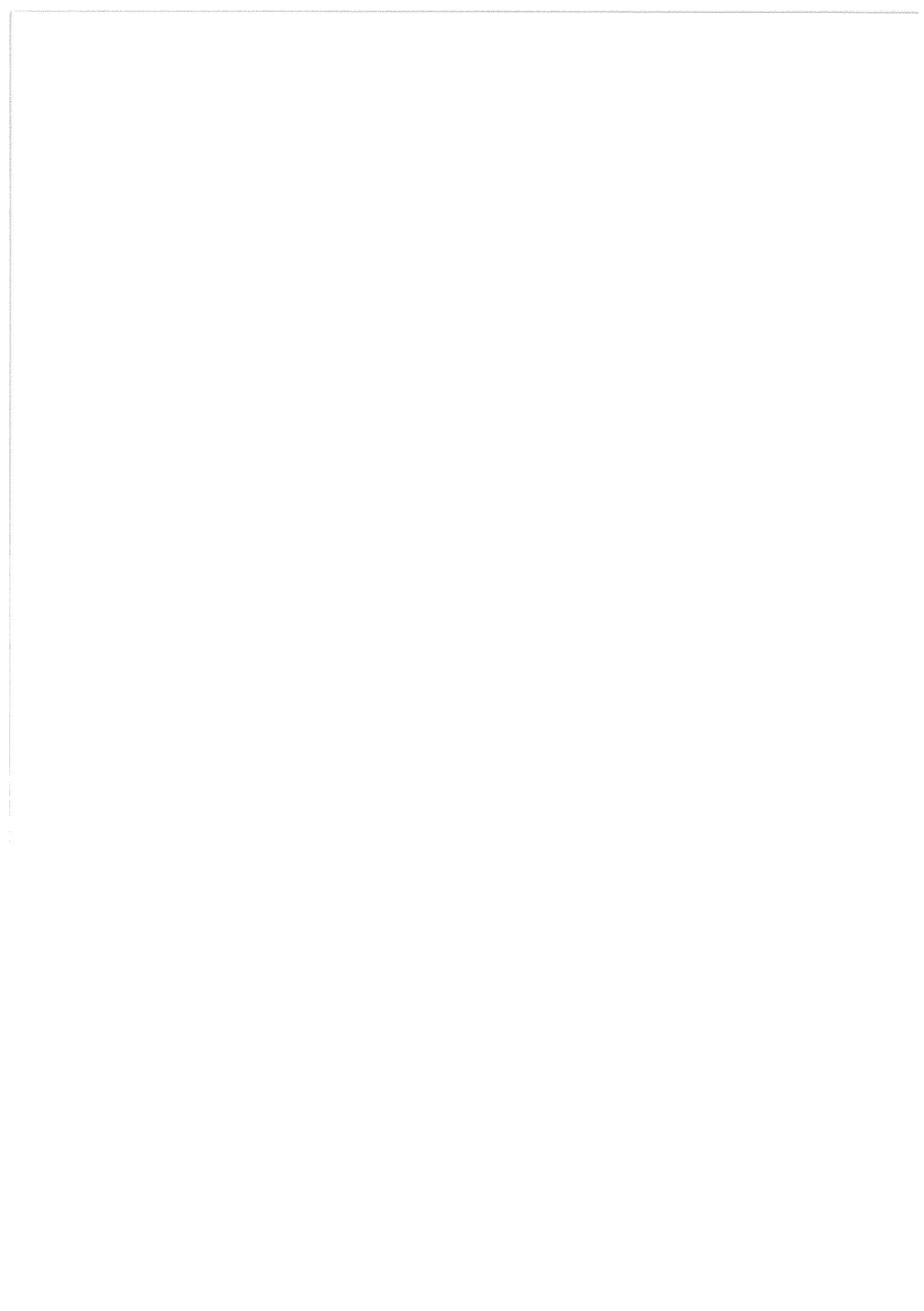
そのうち、中尾第1遺跡では縄文時代の落し穴のほか、弥生時代前期の土坑墓群、弥生時代や古墳時代、中世の集落など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができ、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まる 것을期待しております。

本書をまとめることにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理 事 長 有田 博充



序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡泊村から米子市（鳥取一島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡東伯町から西伯郡中山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、銳意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成15年度は、「中尾第1遺跡」、「三林遺跡」、「笠見第3遺跡」、「久蔵峰北遺跡」、「蝮谷遺跡」、「岩本遺跡」、「八橋第8・9遺跡」、「別所中峯遺跡」、「松谷中峰遺跡」、「井戸地頭遺跡」の10遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「中尾第1遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成16年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所長 矢田 光夫

例　　言

1. 本報告書は、一般国道9号（東伯中山道路）の改築工事に伴い、国土交通省の依託を受け、鳥取県教育文化財団が平成15年度に発掘調査を実施した中尾第1遺跡の発掘調査報告書である。
2. 当該遺跡は東伯郡東伯町大字中尾に所在する。
3. 当該遺跡の調査は、埋蔵文化財センター東伯調査事務所が担当して実施した。
4. 調査にあたっては国土交通省倉吉河川国道事務所をはじめ、東伯町役場、東伯町教育委員会の関係各位から多大なる御協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
5. 航空写真撮影、基準点測量と方眼測量をそれぞれ業者に依託した。
6. 本報告書の作成および執筆は玉木秀幸・長尾かおり・福井流星の3名が分担して行い、全体の編集は玉木が行った。文責はそれぞれ文末に記した。
7. 本報告書で掲載した遺構・遺物写真は航空写真を除き調査員が撮影した。
8. 本報告書に關係する一部の遺物について鑑定・分析を下記の諸氏ならびに機関に依頼し、有益な教示を得るとともにその一部について報告文をいただいた。記してお礼申し上げる次第である。
石材鑑定　赤木三郎（鳥取大学名誉教授）
土器の胎土分析　白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）
年代測定　（株）加速器分析研究所
9. 出土遺物ならびに図面・写真等は鳥取県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

1. 本報告書の示す標高は海拔高である。方位は公共座標北を示す。X:、Y:の数値は世界測定系に準拠した公共座標第V系の座標値である。
2. 図面の縮尺のおもなものについては以下のように統一している。
遺構　　竪穴住居 1/80　掘立柱建物 1/80　土坑・土坑墓 1/40
遺物　　土器 1/4　土製品 1/4　木製品 1/4　石器 2/3・1/2・1/4　金属器 1/2
3. 全体図では遺構名を以下のように略称を用いている。
竪穴住居：住　掘立柱建物：建　段状遺構：段　貯蔵穴：貯　土坑：土　落し穴：落
土坑墓：墓　火葬墓：火　区画溝：区　溝：溝　柱穴：柱　集石：集
4. 掲載遺物番号は土器、土製品、石製品、木製品、金属器にわけて通し番号をつけ、土器以外については下記略号を番号の前に付している。なお、写真図版のなかで本文不掲載の遺物は括弧付けをしている。
土製品C (Cray)　石製品S (Stone)　木製品W (Wood)　金属製品M (Metal)
5. 掲載した遺構上のスクリーントーンは、以下の範囲を示す。

基盤層（地山）		貼床・炭・硬化面	
---------	--	----------	--
6. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000「伯耆浦安」、東伯町地形図1/5,000「新農業構造改善事業（東伯地区No.1）」を複製・加筆して使用した。

目 次

序

序文

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査の経緯	(玉木) 1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
1. 調査の方法	2
2. 調査の経過	2
第3節 調査体制	4
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	(小谷・玉木) 5
第2節 歴史的環境	(淺田・岩井・原・福井) 6
第3章 遺跡の立地と層序	(玉木) 8
第4章 A1区の調査	(玉木) 11
第1節 調査の概要	11
第2節 遺構と遺物	13
1. 壇穴住居	13
2. 貯蔵穴	15
3. 土坑	20
4. 落し穴	23
5. 墓	28
6. 柱穴	29
7. 遺構に伴わない遺物	30
第5章 A2区の調査	(長尾) 31
第1節 調査の概要	32
第2節 遺構と遺物	32
1. 掘立柱建物	32
2. 土坑	35
3. 区画溝	36
4. 溝	37
5. 柱穴	39
6. 遺構に伴わない遺物	40
第6章 B区の調査	(玉木) 41
第1節 調査の概要	41
第2節 遺構と遺物	42
1. 掘立柱建物	42
2. 段状遺構	43
3. 土坑	44
4. 墓	46

5. 溝	47
6. 遺構に伴わない遺物	50
第7章 C1区の調査	(福井) 51
第1節 調査の概要	52
第2節 遺構と遺物	52
1. 掘立柱建物	52
2. 土坑	53
3. 落し穴	55
4. 溝	60
5. 遺構に伴わない遺物	62
第8章 C2区の調査	(玉木) 66
第1節 調査の概要	66
第2節 遺構と遺物	67
1. 壴穴住居	67
2. 掘立柱建物	71
3. 土坑	71
4. 落し穴	74
5. 土坑墓	75
6. 溝	81
7. 柱穴	83
8. 集石	84
9. 遺構に伴わない遺物	84
第9章 自然科学的分析	86
第1節 中尾第1遺跡出土土器の胎土分析	(白石 純) 86
第2節 中尾第1遺跡出土炭化材の年代測定	(株)加速器分析研究所・玉木) 90
第10章 まとめ	91
第1節 調査の成果	(玉木) 91
第2節 縄文時代の遺構・遺物	(福井) 93
第3節 石鍬	(長尾) 95
遺物観察表	
報告書抄録	
図版	

挿図目次

第1図 東伯町内路線図	1	第13図 壴穴住居1出土遺物	15
第2図 調査区位置図	2	第14図 貯蔵穴1・出土遺物①	16
第3図 遺跡位置図	5	第15図 貯蔵穴1出土遺物②	17
第4図 周辺遺跡分布図	7	第16図 貯蔵穴2	17
第5図 遺跡位置図	8	第17図 貯蔵穴2出土遺物	18
第6図 A・B・C区土層断面位置図	9	第18図 貯蔵穴3・出土遺物	19
第7図 A1・A2区土層断面図	9	第19図 貯蔵穴4・出土遺物	19
第8図 B1・B2区土層断面図	10	第20図 土坑1・出土遺物	20
第9図 C1・C2区土層断面図	10	第21図 土坑2・出土遺物	20
第10図 A1区遺構配置図	12	第22図 土坑3・出土遺物	20
第11図 壴穴住居1①	13	第23図 土坑4・出土遺物	21
第12図 壴穴住居1②	14	第24図 土坑5・出土遺物	21

第25図	土坑6・出土遺物	21	第84図	火葬墓2・出土遺物	46
第26図	土坑7・出土遺物	22	第85図	溝19・出土遺物	47
第27図	土坑8	23	第86図	溝20~25	48
第28図	落し穴1	23	第87図	溝26・27・出土遺物	49
第29図	落し穴2	23	第88図	溝28・29	50
第30図	落し穴3	23	第89図	遺構に伴わない遺物	50
第31図	落し穴4	24	第90図	C1区遺構配置図	51
第32図	落し穴5	24	第91図	掘立柱建物5	52
第33図	落し穴6	24	第92図	土坑23	53
第34図	落し穴7	25	第93図	土坑24・出土遺物	53
第35図	落し穴8	25	第94図	土坑25	53
第36図	落し穴9	25	第95図	土坑26・出土遺物	54
第37図	落し穴10	25	第96図	土坑27	54
第38図	落し穴11	26	第97図	土坑28	54
第39図	落し穴12	26	第98図	土坑29	54
第40図	落し穴13	26	第99図	落し穴22	55
第41図	落し穴14	26	第100図	落し穴23	55
第42図	落し穴15	27	第101図	落し穴24	55
第43図	落し穴16	27	第102図	落し穴25	55
第44図	落し穴17	27	第103図	落し穴26	56
第45図	落し穴18	27	第104図	落し穴27	56
第46図	落し穴19	28	第105図	落し穴28・出土遺物	56
第47図	落し穴20	28	第106図	落し穴29	57
第48図	落し穴21	28	第107図	落し穴30	57
第49図	火葬墓1・出土遺物	29	第108図	落し穴31・出土遺物	57
第50図	柱穴1・出土遺物	29	第109図	落し穴32	57
第51図	遺構に伴わない遺物	30	第110図	落し穴33	58
第52図	A2区遺構配置図	31	第111図	落し穴34・出土遺物	58
第53図	掘立柱建物1	33	第112図	落し穴35	58
第54図	掘立柱建物1・出土遺物	34	第113図	落し穴36	59
第55図	掘立柱建物2	35	第114図	落し穴37	59
第56図	掘立柱建物3	35	第115図	落し穴38	59
第57図	土坑9	36	第116図	落し穴39	59
第58図	土坑10	36	第117図	溝30・31	60
第59図	区画溝1~3	37	第118図	溝30遺物出土状況	
第60図	溝1	38		溝30・31出土遺物	61
第61図	溝2	38	第119図	遺構に伴わない遺物①	63
第62図	溝3・4	38	第120図	遺構に伴わない遺物②	64
第63図	溝5~18	39	第121図	遺構に伴わない遺物③	65
第64図	柱穴2・出土遺物	39	第122図	C2区遺構配置図	66
第65図	柱穴3・出土遺物	39	第123図	竪穴住居2	67
第66図	柱穴4・出土遺物	40	第124図	竪穴住居2出土遺物①	68
第67図	遺構に伴わない遺物	40	第125図	竪穴住居2出土遺物②	69
第68図	B1区遺構配置図	41	第126図	土器溜り・出土遺物	70
第69図	B2区調査範囲図	42	第127図	掘立柱建物6	71
第70図	掘立柱建物4	43	第128図	土坑30	71
第71図	段状遺構1	43	第129図	土坑31	71
第72図	土坑11	44	第130図	土坑32	71
第73図	土坑12	44	第131図	土坑33出土遺物	72
第74図	土坑13	44	第132図	土坑34	72
第75図	土坑14	44	第133図	土坑35	72
第76図	土坑15	44	第134図	土坑35出土遺物	73
第77図	土坑16	45	第135図	土坑36	74
第78図	土坑17	45	第136図	土坑37	74
第79図	土坑18	45	第137図	落し穴40	74
第80図	土坑19	45	第138図	落し穴41	74
第81図	土坑20	45	第139図	落し穴42	74
第82図	土坑21	45	第140図	落し穴43	75
第83図	土坑22	46	第141図	土坑墓1	75

第142図	土坑墓2	76
第143図	土坑墓3・出土遺物	76
第144図	土坑墓4	77
第145図	土坑墓5	77
第146図	土坑墓5出土遺物	78
第147図	土坑墓6	78
第148図	土坑墓7	79
第149図	土坑墓8	79
第150図	土坑墓9	80
第151図	土坑墓10	80
第152図	土坑墓11	81
第153図	溝32	81
第154図	溝32出土遺物	82
第155図	溝33~35	82
第156図	柱穴5	83
第157図	柱穴6・出土遺物	83
第158図	柱穴7・出土遺物	83
第159図	柱穴8・出土遺物	84
第160図	集石1	84
第161図	遺構に伴わない遺物	85
第162図	中尾第1遺跡出土須恵器の産地推定	88
第163図	中尾第1遺跡出土須恵器の産地推定	88
第164図	中尾第1遺跡出土須恵器の産地推定	88
第165図	中尾第1遺跡出土の鍋・釜類の分類	89
第166図	中尾第1遺跡出土の鍋・釜類の分類	89
第167図	落し穴配置図	93
第168図	石鍬部位名称	95
第169図	折損石鍬における折れの方向と傾向	95

挿表目次

表1	中尾第1遺跡出土土器の胎土分析	87
表2	放射性炭素年代測定結果	90
表3	折損石鍬における折れの方向と面数	95

図版目次

PL. 1	1. 調査区全景（北から） 2. C2区土坑墓群全景（北東から）	
PL. 2	1. A1区全景（上空から） 2. 壓穴住居1（西から） 3. 壓穴住居1壺出土状況（南東から） 4. 貯蔵穴1（南から） 5. 土坑7（南東から） 6. 落し穴10（北東から） 7. 落し穴13（北西から） 8. 火葬墓1（東から）	
PL. 3	1. A2区全景（上空から） 2. A2区全景（北東から） 3. 区画溝3・掘立柱建物群（北から） 4. 掘立柱建物2（北から） 5. 掘立柱建物3（南から） 6. 区画溝1（北西から） 7. 区画溝2（西から） 8. 土坑10（南から）	
PL. 4	1. B1区調査区全景（北東から） 2. B1区遺構集中部（南東から） 3. 掘立柱建物4（北から） 4. 段状遺構1（北東から） 5. 土坑15（東から） 6. 土坑20（東から） 7. 火葬墓2（南から） 8. 溝19（南東から）	
PL. 5	1. C1・C2区全景（上空から） 2. C1区北側全景（南西から） 3. C1区南側全景（北東から） 4. 落し穴29（北から） 5. 落し穴34（北から） 6. 落し穴39（北から） 7. 溝30遺物出土状況（北東から）	
PL. 6	8. 溝30・31（西から） 1. C2区全景（南から） 2. 壓穴住居2（北から） 3. 掘立柱建物6（東から） 4. 土坑35（東から） 5. 土坑墓1（西から） 6. 土坑墓2（西から） 7. 土坑墓3（北から） 8. 土坑墓4（西から）	
PL. 7	1. 土坑墓5検出状況（西から） 2. 土坑墓5（東から） 3. 土坑墓6（東から） 4. 土坑墓7（北西から） 5. 土坑墓8（南東から） 6. 土坑墓9（南西から） 7. 土坑墓10（南西から） 8. 土坑墓11（東から）	
PL. 8	1. 壓穴住居1出土遺物 2. 貯蔵穴1出土遺物 3. 貯蔵穴2~4出土遺物 4. 土坑7出土遺物 5. 火葬墓1出土遺物 6. A2区出土遺物 7. 溝27出土遺物	
PL. 9	1. 溝30出土遺物 2. 壓穴住居2出土遺物 3. 土坑35出土遺物 4. 土坑墓5出土遺物 5. C区出土遺物（縄文～弥生）	
PL.10	1. C区出土遺物（古墳～古代） 2. C区出土遺物（中世～近世） 3. A・C区出土石器 4. C区出土石器	

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、一般国道9号東伯中山道路の改築に伴い、東伯町の工事予定地内に存在する中尾第1遺跡の記録保存を目的としたものである。

山陰地方では、国道9号の交通混雑の緩和や将来の国土幹線道路の整備として、山陰自動車道の整備が進められている。東伯町の所在する鳥取県中部地域では東伯中山道路の他、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画・施行されている。

東伯中山道路の計画地内である東伯町中尾およびその周辺では、中尾1号墳、斎尾廃寺跡、楓下豪族居館跡などが所在しており、当計画地においても遺跡の存在が予想された。このため道路の建設に先立ち、遺跡の確認およびその広がりを確認するための試掘調査を行うこととなった。調査は東伯町教育委員会が平成14年度に行った。

試掘調査の結果を受け、国土交通省中国地方建設局倉吉河川国道事務所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第53条の3に基づく発掘通知を行った上で、鳥取県教育委員会教育長の指示により財団法人鳥取県教育文化財団に事前調査を依託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、埋蔵文化財センターが調査を担当することとなった。中尾第1遺跡の発掘調査は平成15年度の事業として行うこととなり、調査面積は28,696m²を測る。

(玉木)



第1図 東伯町内路線図

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査区の設定は、調査地が3箇所に別れていることから、南側から北側へ順にA区・B区・C区とした。さらに、各区は道路によって2分割されていることから、A1区・A2区・B1区・B2区・C1区・C2区と細分した（第2図）。以下、本文中にある調査区名の記述はこれに基づくものである。

表土剥ぎは、調査範囲が現在水田として利用されていたことから、順次表土および水田層を重機によって行い、その後、人力によって遺構の検出を行った。

表土剥ぎ終了後、公共座標第V系に基づき10m間隔に基準杭を設定し、これらの杭の東西軸に算用数字を、南北軸にアルファベットを付し「A1杭」のように呼称した。なお、これらの規準杭の名称はA区・B区・C区でそれぞれ別個につけた。また、東西南北軸交点の北東側杭の名称をグリッド名として遺構の実測、遺物の取り上げ等に用いた。

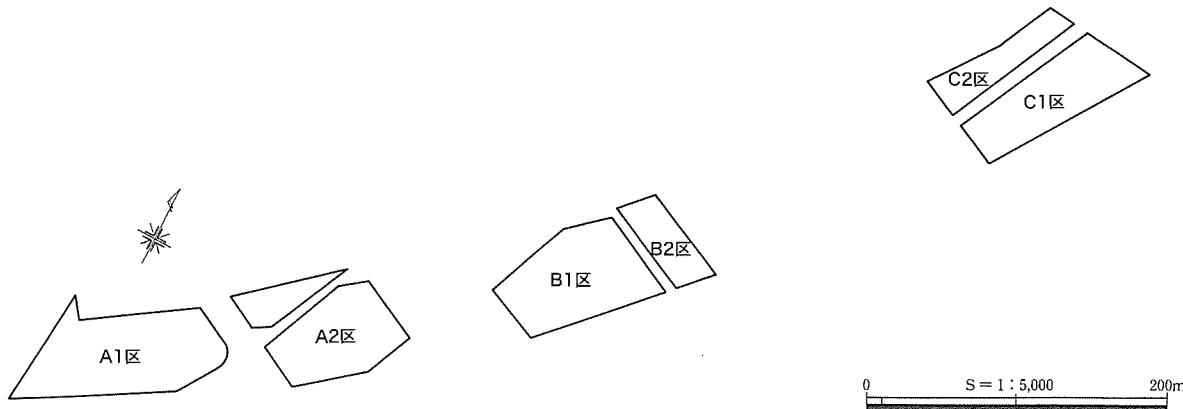
検出した遺構・遺物の実測には平板および光波トランシット等を用いた。写真撮影には35mm版と6×7版を使用した。

2. 調査の経過

中尾第1遺跡の発掘調査は平成15年4月22日にA1区から着手した。A1・A2区の表土剥ぎは調査開始前に終了していたが、他の調査区では未終了であった。このため、表土剥ぎに調査員1名が立ち会うこととなり、実際の調査は調査員3名で行うこととなった。なお、5月7日にはA2区の調査を調査員1名で開始した。

A2区では、調査区の1/3ほどが圃場整備による大幅な削平を受けており、さらにB1区の表土剥ぎの状況から、B1区においても圃場整備による大幅な削平を受けていることが判明した。このため、5月8日に鳥取県教育委員会事務局文化課と協議を行い、表土剥ぎ未着手であったB2・C1・C2区においてトレチ調査を行い、遺跡・遺構の広がりを改めて確認することになった。このトレチ調査は5月12日～22日にかけて行い、A1区担当調査員1名と企画調整班班長が対応した。

トレチ調査の結果、B2区では遺構を確認することができず、遺物も土器の小片が数点出土したのみであった。C1区は古墳時代中期の溝1条、時期不明の溝1条、遺物包含層を確認した。また、C2区では古墳時代中期の溝を確認した。この結果を受け、再度、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議を行ったところ、B2区に関しては全面調査を行うことはせず、トレチ調査のみで終了すること



第2図 調査区位置図

となつた。なお、C1・C2区に関しては、予定通り調査を行うこととなつた。

5月14日にはB1区の表土剥ぎが終了し、5月22日には調査員1名で調査を開始した。しかし、6月1日から調査員2名が東伯調査事務所管内の笠見第3遺跡、久藏峰北遺跡へ移動したため、B1区の調査を中断し、A1・A2区の調査に専念した。6月11日から24日までC1・C2区の表土剥ぎが行われ、調査員1名がこれに対応した。また、8月1日には調査員1名が岩本遺跡へ移動したため、調査員1名で調査することとなつた。

A1・A2区の調査は8月6日に依託業者による航空写真を行い、22日には調査後地形測量が終了し、A区の調査を終了した。また、7月14日からは中断していたB1区の調査を再開し、9月26日をもって調査が終了した。なお、9月1日から岩本遺跡の調査の見通しが立つたため、調査員1名が加わり、C1区の調査に着手した。さらに、9月18日には岩本遺跡の調査が終了したため、新たに調査員1名が加わり、B1区1名、C1区2名の3人体制での調査となつた。

9月26日からはC2区の調査を調査員1名で着手した。C1・C2区の廃土は調査区内に仮置きし、鳥取県教育文化財団が場外搬出を行つた。なお、調査も終盤の10月29日、C2区の廃土置場の廃土を除去し精査を行つたところ、縄文時代晩期の土坑のほか、弥生時代前期の土坑墓群や古墳時代中期の竪穴住居を検出した。さらに、11月に入り雨天が続いたため、かなり厳しい日程での調査となつた。11月15日には現地説明会を行い、18日には依託業者による航空写真撮影を行つた。その後、地形測量等の記録作業を行い、11月25日には中尾第1遺跡の現地での作業を終了した。

発掘調査報告書とともに遺物の整理作業は東伯調査事務所で行つた。遺物の整理作業や報告書の作成は現地調査と併行して進めた。12月末までに遺構のトレース、2月上旬には遺物の実測・トレース作業がほぼ終了し、平成15年度末には報告書作成が終了した。
(玉木)

調査日誌抄

平成15年

4月7日 A2区 重機による表土剥ぎ開始	7月9日 A1区 竪穴住居1より完形の壺が出土
4月22日 A1区 調査開始	7月14日 B1区 調査再開、火葬墓2を検出
5月2日 B1区 重機による表土剥ぎ開始	8月6日 A1・A2区 調査後空撮
5月7日 A2区 調査開始	8月22日 A1・A2区 調査終了
5月8日 鳥取県教育委員会文化課との現地協議	9月1日 C1区 調査開始
5月12日 B2区 トレンチ調査	9月26日 C2区 調査開始
5月15日 C1・C2区 トレンチ調査、 鳥取県教育委員会文化課との現地協議	10月1日 B1区 調査終了
5月22日 B1区 調査開始	10月2日 C1区 落し穴、土坑、溝を検出
6月11日 C2区 重機による表土剥ぎ開始	10月29日 C2区 土坑墓群、竪穴住居を検出
6月18日 C1区 重機による表土剥ぎ開始	11月15日 現地説明会
6月25日 A2区 掘立柱建物、区画溝検出	11月18日 C1・C2区 調査後空撮
	11月25日 C1・C2区 調査終了

第3節 調査体制

発掘調査および報告書作成事業は、鳥取県教育文化財団が国土交通省中国地方建設局倉吉河川国道事務所の委託を受け、平成15年度に実施した。以下に組織としての体制を記す。

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 有田 博充
常 任 理 事 川口 一彦（兼・鳥取県教育委員会事務局次長）
事 務 局 長 下田 弘人

埋蔵文化財センター

所 長 田中 弘道（兼・鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次 長 竹内 茂
次 長 加藤 隆昭
調査課長（兼） 加藤 隆昭
企画調整班長 山枡 雅美
文化財主事 下江 健太
庶務課長（兼） 竹内 茂
主任事務職員 矢部 美恵
事務職員 田中 陽子 大川 秋子 植田 恵子（9月退職）
谷垣 真寿美 小谷 有里
事務補助員 山根 美代（11月採用）

○調査担当 埋蔵文化財センター東伯調査事務所

所 長 佐治 孝式
班 長 牧本 哲雄
文化財主事 玉木 秀幸 長尾 かおり（岩本遺跡担当）
調査員 浅田 康行 前島 ちか 福井 流星
調査補助員 野 浩一
事務補助員 大田 直子

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力 東伯町教育委員会

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

東伯町は鳥取県中部の西側に位置している。町域は大山連峰の烏ヶ山（1,381m）と野田ヶ山を結ぶ線を南西端とし、北東に細長い三角形状に広がり、北端は日本海に至る。東西15.2km、南北16.8km、総面積は約82.2km²を測り、県面積の約2.3%を占めている。この町域には約12,400人が生活している。昭和29年の5町村合併により東伯町となったが、全国的な市町村合併の潮流の中で平成16年9月1日には赤崎町との合併が予定されている。

町の南西部には秀峰大山（1,729m）が聳え立ち、1万数千年前まで火山活動が行われていたことが確認されている。町の西側は火山灰土の堆積した溶岩台地状地形となっており、丘陵が連なっている。町の中央部には加勢蛇川や洗川が流れしており、その下流域において沖積平野を形成している。

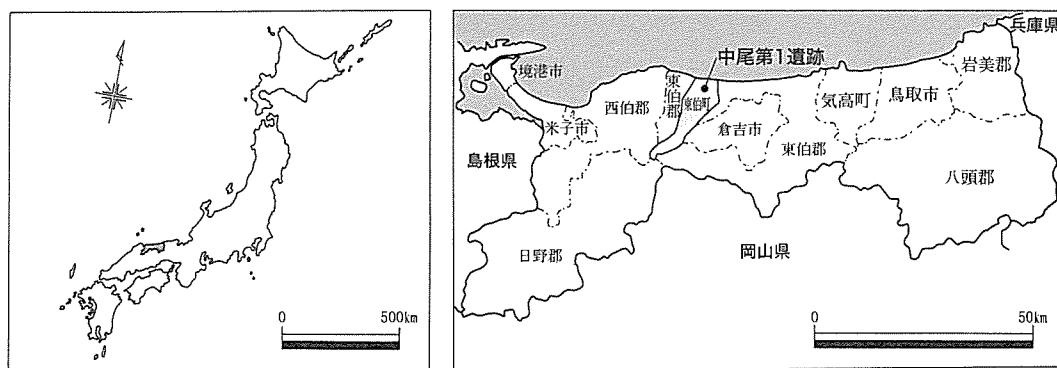
町の東側にあたる加勢蛇川東岸地域では火山扇状地性台地が広がっており、ここには大小の農業用ため池がみられる。これらのため池は荘園が発達した平安時代中期より使用されていたと考えられている。このため池から導水し、現在の大栄町域まで広がる稻作・畠作地帯を形成したものと考えられる。

加勢蛇川の最上流域には大山滝があり、そこから地獄谷、大休峠付近、大山町の川床を経て大山博労座に通じる急峻な古道がある。この川床道は江戸時代から昭和初期にかけての大山参拝の往還道であるとともに、東伯耆地方から市立つ大山へ牛馬を運ぶための重要な短絡ルートであった。また、海岸沿いの八橋地区には古代から伯耆の東と西をつなぐ交通の要衝として古代山陰道の清水駅が置かれ、中世以降は丘陵北端部に八橋城が築かれており、交流及び戦略的に重要な地域であったといえる。

東伯町のおもな産業として、二十世紀梨の生産が挙げられる。昭和20年代後半より生産が盛んとなり、鳥取県内では東郷町に次ぐ生産量を誇る。北米や香港、シンガポールなどにも輸出をしているが、近年では生産者の高齢化や後継者不足によって廃園されるところもあり、深刻な問題となっている。この他の産業として、稻作、芝生産、酪農、ブロイラーや和牛の畜産などがある。

中尾第1遺跡はJR浦安駅の南東側、東伯町の中央を北流する加勢蛇川の東岸に位置している。調査区の南側にあたるA1区とA2区の間を県道倉吉東伯線が通っている。遺跡の周囲は圃場整備が行われており、一面に区画された水田が広がっている。圃場整備前の状況は、なだらかな低丘陵地帯であったものと思われる。

(小谷・玉木)



第3図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代 旧石器時代の遺構は県内において確認されていない。当地域でも赤崎町松ヶ丘などで尖頭器が数点見つかっているのみである。縄文時代になると、低丘陵上および平野部において遺構が確認されるようになる。早・前期では、西高尾谷奥遺跡（34）で押型文土器とともに住居跡の可能性のある竪穴状遺構が検出されている。中期では遺構が確認されていないが、井図地頭遺跡（10）、笠見第3遺跡（7）などの丘陵上の遺跡で土器が出土している。後期になると森藤第2遺跡（30）において中央に石囲い炉をもつ竪穴住居が土器・土器片錘・土偶などを伴って検出されている。その他、この時期と考えられる落し穴が多くの遺跡で検出されており、丘陵・微高地が狩猟場として利用された様子が窺われる。

弥生時代 弥生時代になると本格的な稻作が始まられ、それを機軸とした社会が形成される。しかし、県中部では稻作に関する遺構は今日まで確認されていない。前期では大栄町大谷第1遺跡・後ろ谷遺跡で土坑墓が確認されているが、中・後期に比べ考古学的発見は少なく人間活動の痕跡が希薄な時期といえる。中期になると丘陵・微高地の集落が増加する。この傾向は後期においても継続し終末期から古墳時代初頭にかけてピークに達する。

古墳時代 古墳時代になると各地で前方後円墳が築造される。当地域では明らかに前期に属するといえる前方後円墳は確認されていないが、前方後方墳である別所1号墳（笠取塚古墳）（16）は、墳形等の特徴から、前期に遡る可能性が指摘されている。中・後期になると、八橋狐塚古墳（19）、笠見1号墳（22）、竜ヶ崎3号墳（27）などが築造される。これらの古墳は大山から日本海に延びる山麓の丘陵北縁にあたり、日本海を見下ろす要所となっている。また中・小規模の群集墳もこの時期に築かれる。主体部には大法3号墳（32）などで穴系横口式石室と呼ばれる特異な構造をもつものが確認されており、八橋狐塚古墳のくびれ部西側に位置する石室もその可能性がある。また楓下古墳群（38）などもそれに後続する石室形態であることが明らかになっており、加勢蛇川流域が共通性を持つ地域であったことを示している。なお、遺物散布地の状況から中尾周辺においても古墳群が築かれた可能性は高いが、近年の土地開発により消失しており、その実態を知ることは困難である。

古代 7世紀後半になると、山陰地方では仏教文化受容の痕跡が認められる。斎尾廃寺（41）は、県内の古代寺院の多くが法起寺式伽藍配置を採用するのに対し、法隆寺式を採っていることから、山陰では唯一の国特別史跡に指定されている。創建期の瓦は軒丸瓦に紀寺式、軒平瓦に法隆寺式系統をもつものを採用しており、これらは山陰・山陽地方で数少ない瓦当文様のため、畿内との関係性を知る上で貴重な史料となっている。斎尾廃寺の東方にある大高野遺跡（43）では、総柱礎石建物群が検出されており、正倉（郷倉）と考えられ、さらに伊勢野遺跡群（40）などでも掘立柱建物を中心とする集落が見つかっている。当地域は伯耆国八橋郡に属し、加勢蛇川右岸が当郡の中心地であったと推察される。平安時代の遺構として、金屋（39）などで経塚があり、金屋と西高尾（35）でも銅経筒が出土している。また、井図地頭遺跡（10）において方形区画遺構が見つかっており、丘陵上の方形居館の可能性が指摘されている。

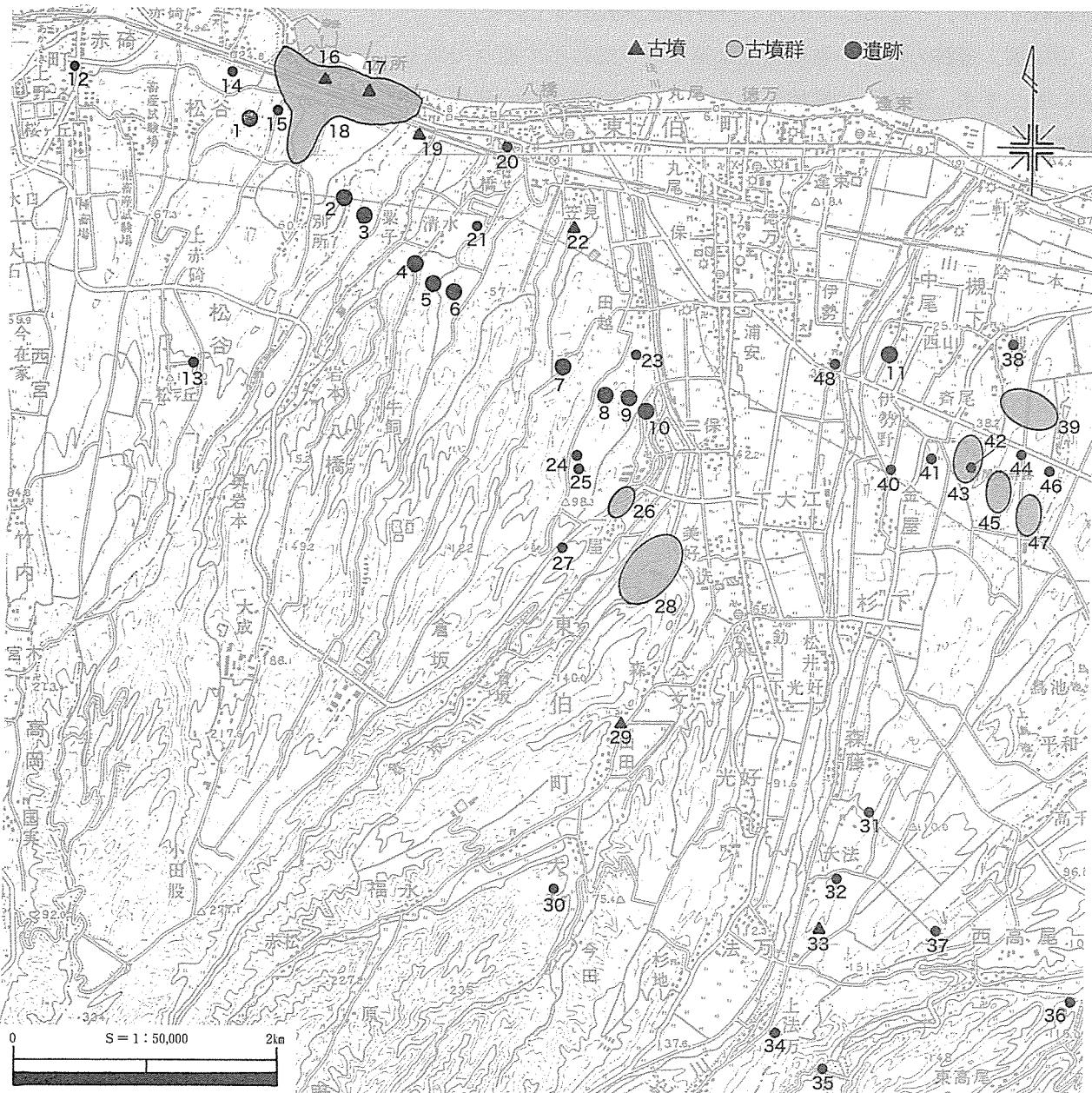
中世 鎌倉時代に入ると、武士的な性格を持つ豪士が出現する。東伯町楓下（37）には、台地に堀を巡らせた方形の一段高い敷地が並んで残り、一つには周囲に高さ2mの土塁が築かれた館跡と近接には陣馬野と呼ばれる馬場跡があり、武家社会の一端を知ることができる。加勢蛇川左岸に位置する方

見神社（48）では天照広大神を祭神として祭っている。周辺には伊勢野、鈴鹿野、斎王などの地名があり、方見郷一帯を伊勢神宮に寄進し、その庇護を受けながら管領権を確保し伊勢神宮の荘園にしていたものと考えられる。

（浅田、岩井、原、福井）

参考文献

鳥取県教育文化財団編集 2003『笠見第3遺跡』（財）鳥取県埋蔵文化財センター
東伯町誌編纂委員会 1968『東伯町誌』



1. 松谷中峰遺跡
2. 別所中峯遺跡
3. 八橋第8・9遺跡
4. 岩本遺跡
5. 蟻谷遺跡
6. 久藏峰北遺跡
7. 笠見第3遺跡
8. 三林遺跡（旧田越第4遺跡）
9. 井戸地中ソネ遺跡
10. 井戸地頭遺跡
11. 中尾第1遺跡
12. 福留遺跡
13. 松ヶ丘遺跡
14. 墓ノ上遺跡
15. 松谷遺跡
16. 笠取塚古墳
17. 別所2号墳
18. 別所古墳群
19. 八橋狐塚古墳
20. 八橋城跡
21. 八橋銅鐸出土地
22. 笠見1号墳
23. 田越第1遺跡
24. 田越第2遺跡
25. 田越第3遺跡（銅出劍土地）
26. 三保古墳群
27. 三保遺跡群
28. 竜ヶ崎古墳群
29. 山田1・2号墳
30. 妙見山城跡
31. 藤森遺跡群
32. 古瓦出土地（大法廃寺跡）
33. 大法古墳群
34. 法万経塚
35. 西高尾谷奥遺跡
36. 西高尾経塚
37. 大峰遺跡
38. 櫻下豪族居館跡
39. 櫻下古墳群
40. 金屋経塚
41. 伊勢野遺跡群
42. 斎尾廃寺跡
43. 斎尾古墳群
44. 大高野遺跡
45. 塚本古墳群
46. 水溜り・駕籠据場遺跡
47. 大高野古墳群
48. 方見神社

第4図 周辺遺跡分布図

第3章 遺跡の立地と層序

中尾第1遺跡は鳥取県東伯郡東伯町大字中尾に所在する。当地域は東伯町を北流する加勢蛇川の中流域にあたり、遺跡はその東岸に位置している。大山に起因する火山扇状地性台地の縁辺部にあたり、緩やかな傾斜をもつた低い丘陵が連続して形成されている。調査区は丘陵の尾根部から谷部にかけてであり、連続した一つの丘陵上および谷部に位置している。調査前の状況は、圃場整備による造成が行われており、一面には水田および耕作地が広がっていた。

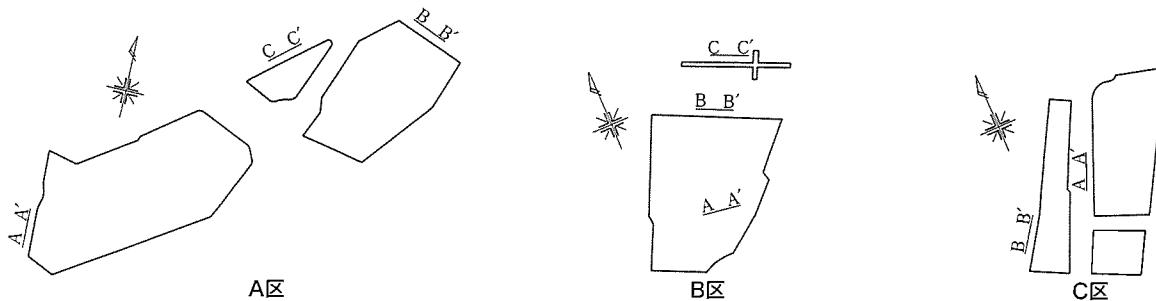
中尾第1遺跡の埋土の堆積状況は第7～9図に示す通りである。各調査区の堆積状況はほぼ共通している。まず、造成土が堆積し、その下には近世からの耕作土が堆積する。さらにその下には大山北麓に広く分布するクロボクが堆積している。以下、ソフトローム層、ホーキ層、A T層、白色粘質土層、淡赤橙色粘質土層、大山倉吉火山灰層（DKP）の順に堆積している。遺構はクロボク中に存在していたと思われるが、平面および断面での確認が困難であり、本調査では、クロボクとソフトローム層との中間にある漸移層（以下、漸移層）を遺構確認面として調査を行っている。

A1区は、造成土、耕作土、クロボク、遺構確認面である漸移層の順に堆積している。このうち、クロボクは植物に起因する酸化鉄の有無によって2層に分層した。上層は中世の遺物が出土しており、中世の生活面であった可能性が考えられ、下層からは縄文時代から弥生時代中期の遺物が包蔵しており、この時期に形成されたものと考えられる。A2区もA1区と同様の堆積状況を示す。クロボクは2層に分層でき、上層は耕作のため還元作用が起きたと思われ、粘性と青色を帯びる。この層の直下

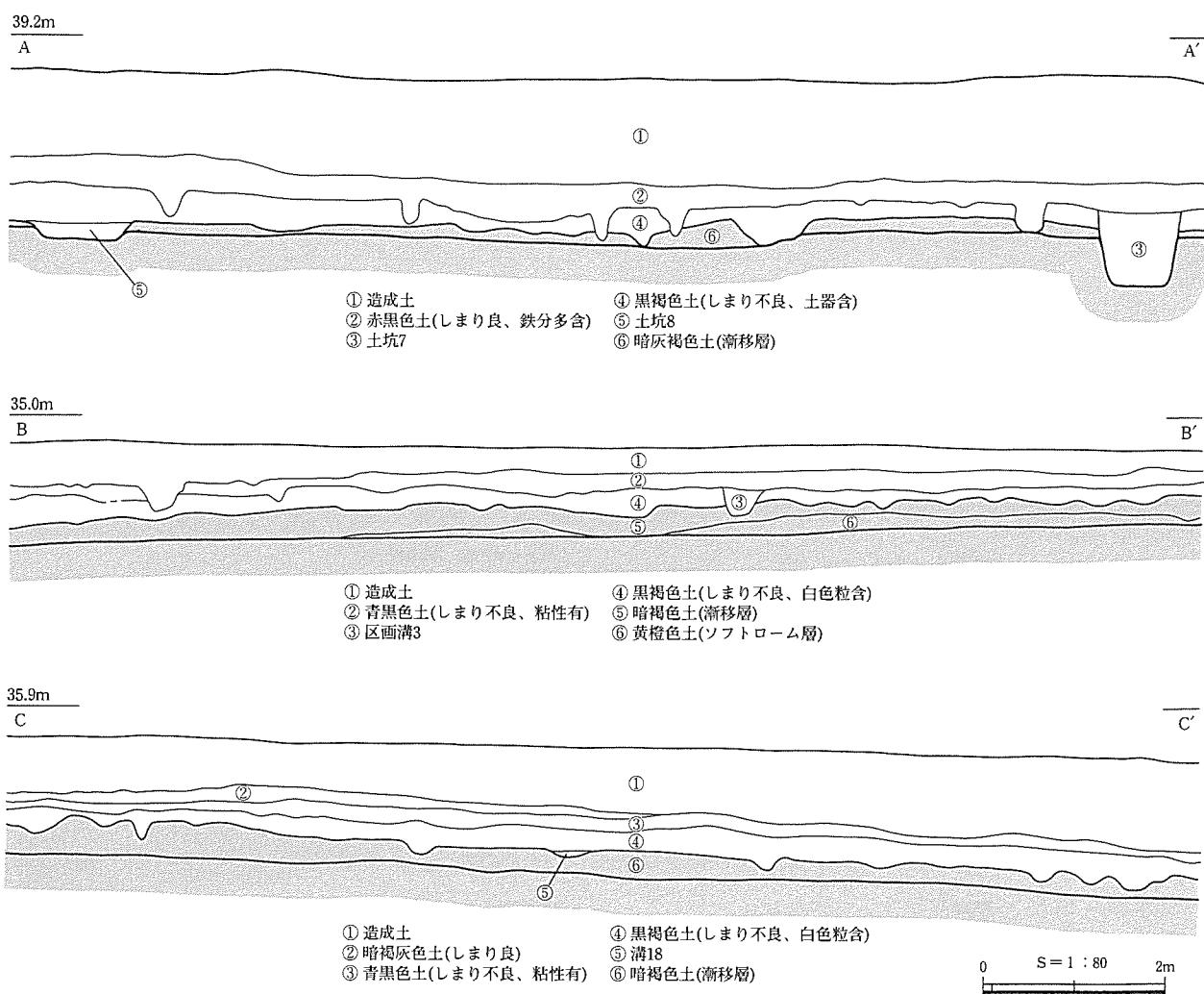


第5図 遺跡位置図

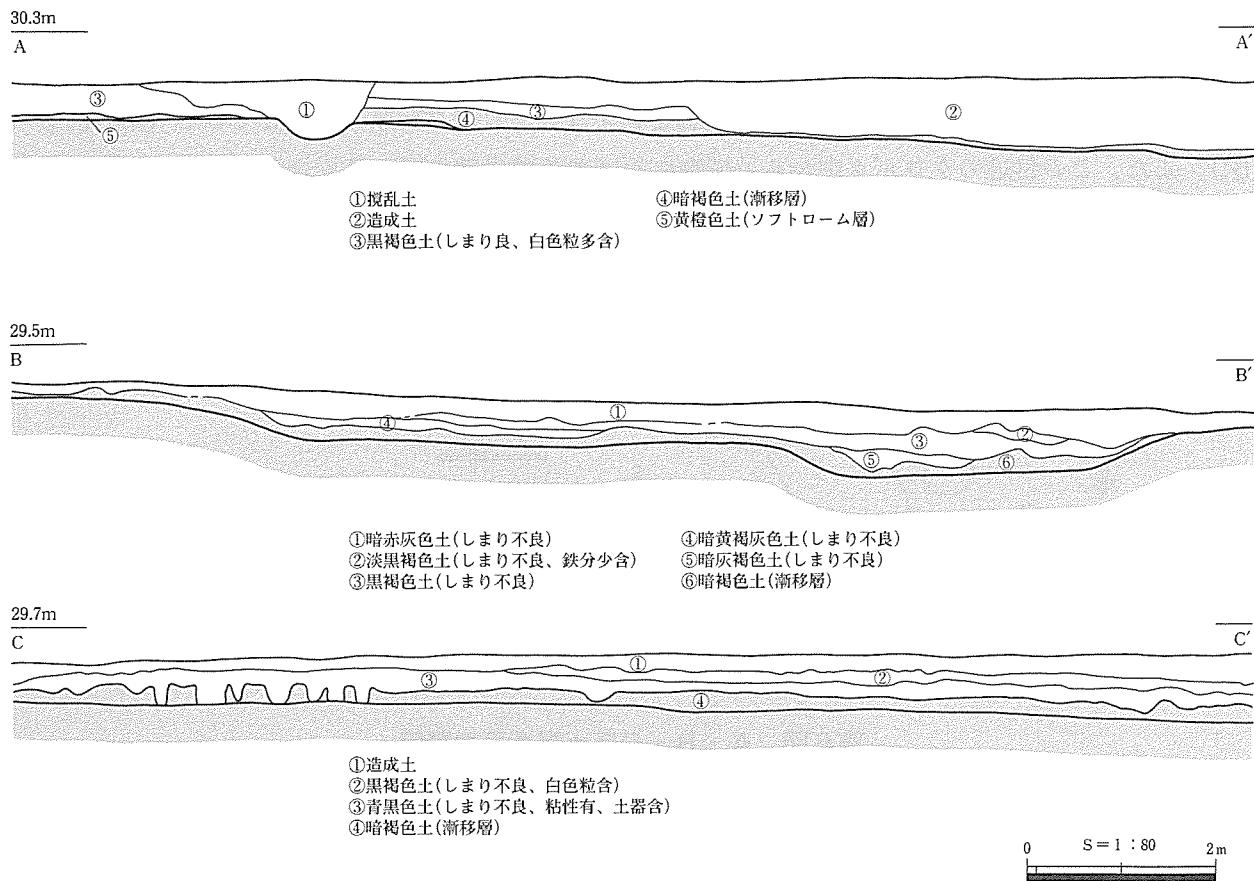
から時期が中世と考えられる区画溝の掘り込みが確認されている（第7図B-B'）。この層はA1区のクロボク上層と対応している。B1・B2区についてもA区と同様の堆積状況を示しているが、調査区東側の谷部では若干異なり、ここでは遺物を含まないクロボクが厚く堆積している（第8図B-B'）。また、この付近のクロボク中からは植物に起因する酸化鉄の塊が多く含まれており、湿地であった可能性がある。C1・C2区についても他の調査区と同様の堆積状況を示している。クロボク上層の近世の耕作土から縄文時代から近世に至る遺物が出土しており、また、クロボク中からも縄文時代から弥生時代にかけての遺物が出土している。（玉木）



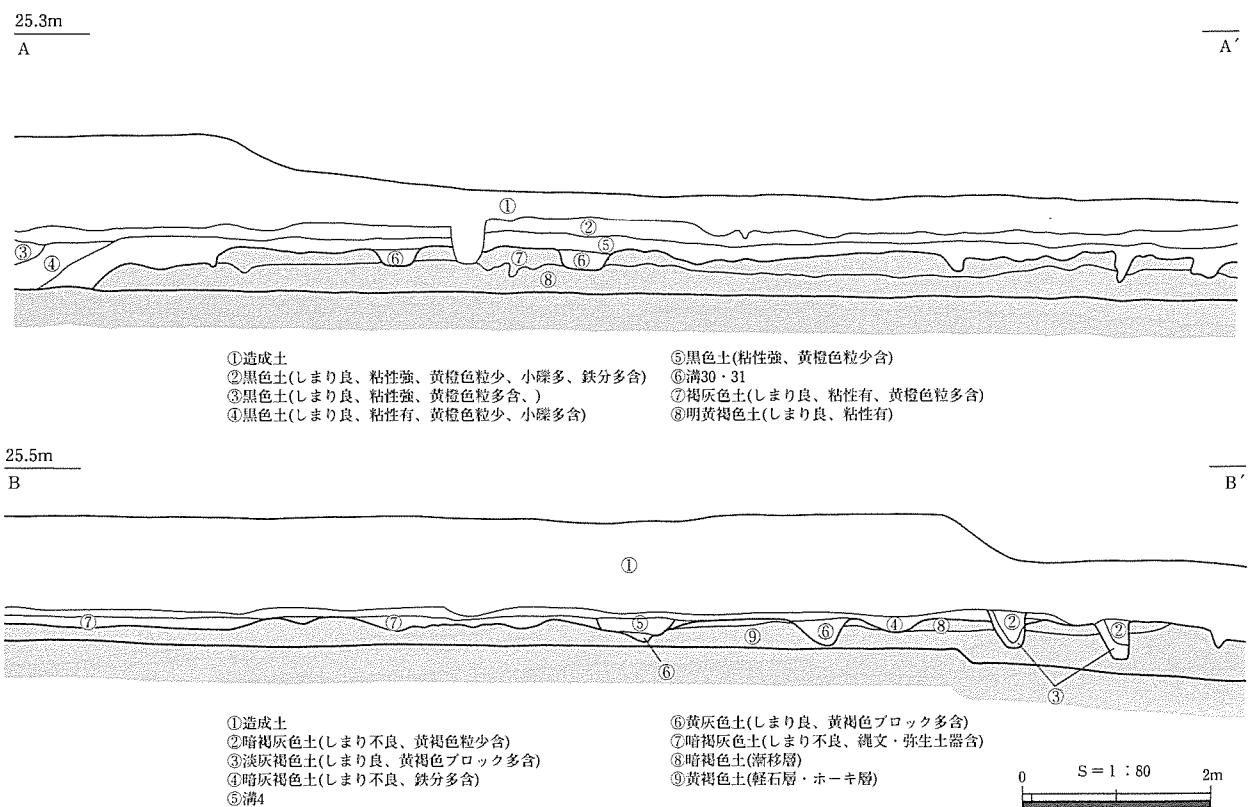
第6図 A・B・C区土層断面位置図



第7図 A1・A2区土層断面図



第8図 B1・B2区土層断面図



第9図 C1・C2区土層断面図

第4章 A1区の調査

第1節 調査の概要

A1区は調査地の最南端に位置しており、すぐ西側には加勢蛇川が流れている。周囲の地形はなだらかな丘陵が連なっており、A1区はこの丘陵上に位置している。調査区内の標高は約35～38mを測り、南側が最も高く北へ向かって緩やかに傾斜していく。標高の高い場所では圃場整備による削平を受けており、遺構の希薄な部分となっている。また、調査区内には圃場整備時に埋められた水路が南北に流れている。

A1区の層序は前章で述べたとおり、圃場整備によって造成された水田層の下に近世以降の耕作土が堆積し、その下には火山灰の腐植によるクロボクが堆積している。このクロボクは大きく2層に分層でき、上層が赤黒色土、下層が黒褐色土となっており、上層からは中世の遺物が、下層からは縄文時代から弥生時代の土器がわずかながら出土している。その下には漸移層、ソフトローム層、ホーキ層、AT層、白色粘質土層、淡赤橙色粘質土層、大山倉吉火山灰（DKP）層の順に堆積している。なお、A1区で検出した落し穴の多くは大山倉吉火山灰層まで掘られている。

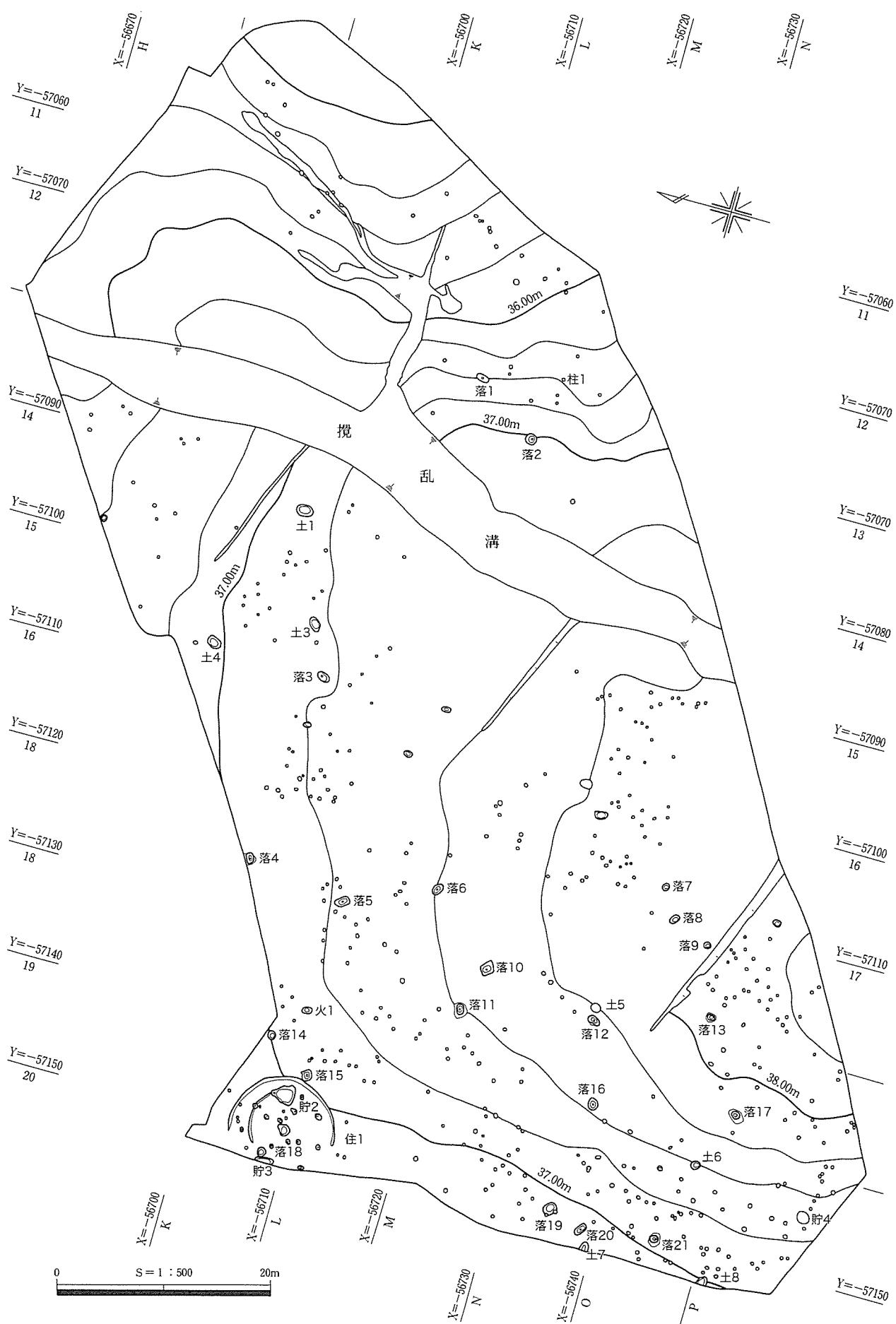
発掘調査は調査区南側から遺構検出を開始した。遺構検出はクロボクを掘り下げ、漸移層上面で行った。これはクロボク中での遺構検出が困難なためである。このため、本来あったであろうクロボク中の遺構を検出することができなかった。

検出された遺構・遺物の時期は縄文時代、弥生時代、中世である。縄文時代の遺構・遺物には中期から後期に属するものと考えられる器面にRLの縄文を施した深鉢の破片や晚期の刻目突帯をもつ深鉢が包含層中から出土している。また、遺物は出土していないが、周囲の状況から縄文時代のものと考えられる落し穴21基を確認している。これらの落し穴は標高37～38mの間に集中して分布しており、それ以下では東側斜面にいくつか見られるものの希薄となっている。平面形には長方形や円形を呈するものがあり、長方形を呈するものには底面ピットが認められ、円形のものにはこれが認められない傾向にある。

弥生時代の遺構・遺物には竪穴住居が重複するものを含めて2棟、貯蔵穴4基、土坑8基を確認している。時期の特定できない遺構もあるが、その大半が弥生時代中期前葉から中葉にかけての範疇に収まるのではないかと考えられる。これらの遺構はいずれも水路の西側に分布しており、標高37m付近の緩やかな斜面上に立地している。このうち注目される遺構としては、竪穴住居1と貯蔵穴1がある。竪穴住居1は復元径約10mを測る大型の住居であり、この住居の主柱穴であるP13からは完形の壺が口縁部を下にした状態で出土している。また、床面からは石鎌や石錐の未製品がチップとともに出土しており、石器を製作していたことが窺える。貯蔵穴1は袋状を呈しており、その底面から土器や石鎌とともに炭化米が出土している。

中世の遺構・遺物として火葬墓1基、柱穴が確認されている。火葬墓からは蔵骨器として利用されていたと考えられる須恵器壺が出土している。この壺は器面に格子タタキが施されており、岡山県倉敷市の亀山焼や同県勝央町の勝間田焼と造りが類似している。胎土分析を行ったところ、勝間田焼の領域に属することが判明している（第9章）。 (玉木)

第4章 A 1 区の調査



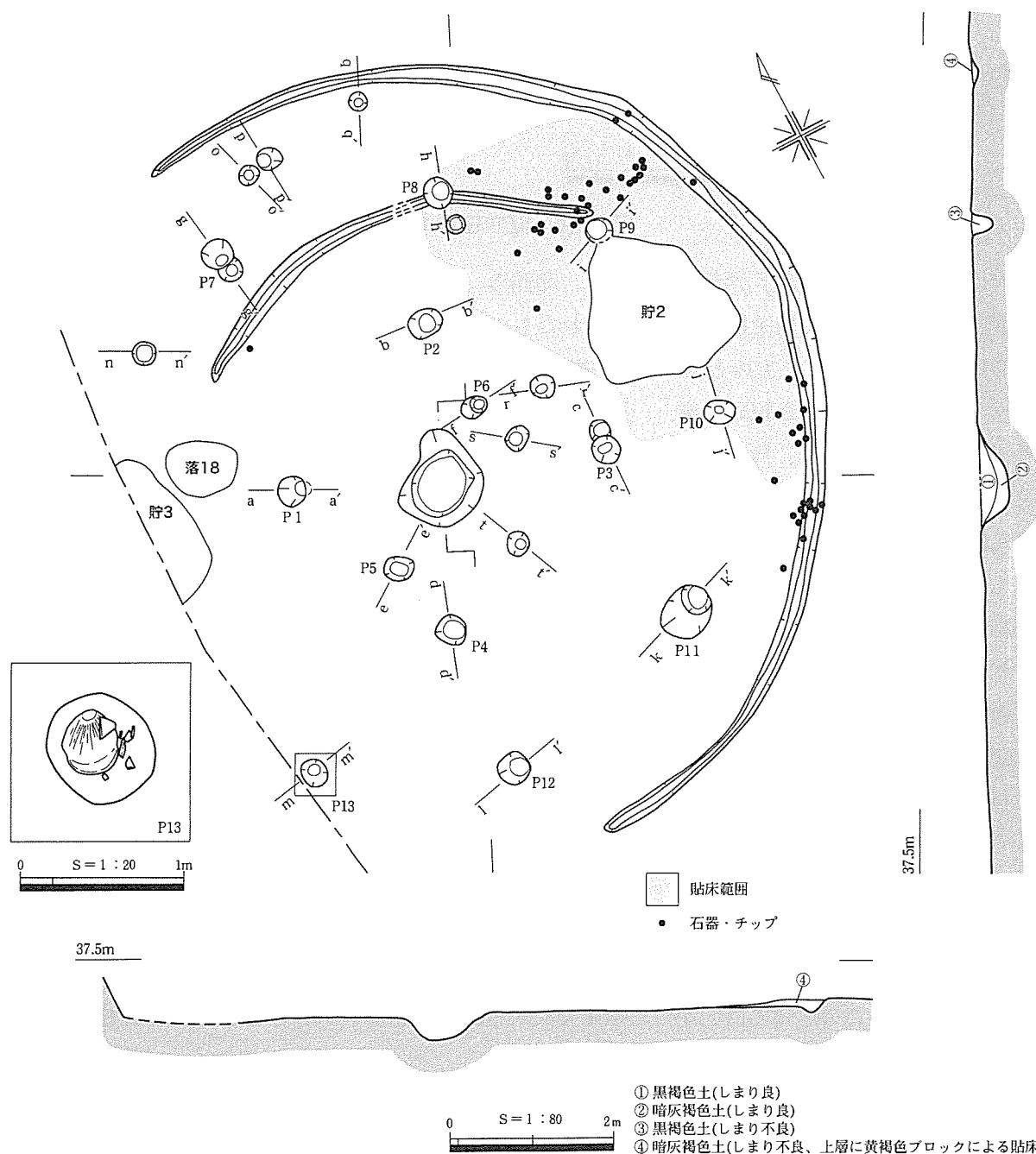
第10図 A 1 区遺構配置図

第2節 遺構と遺物

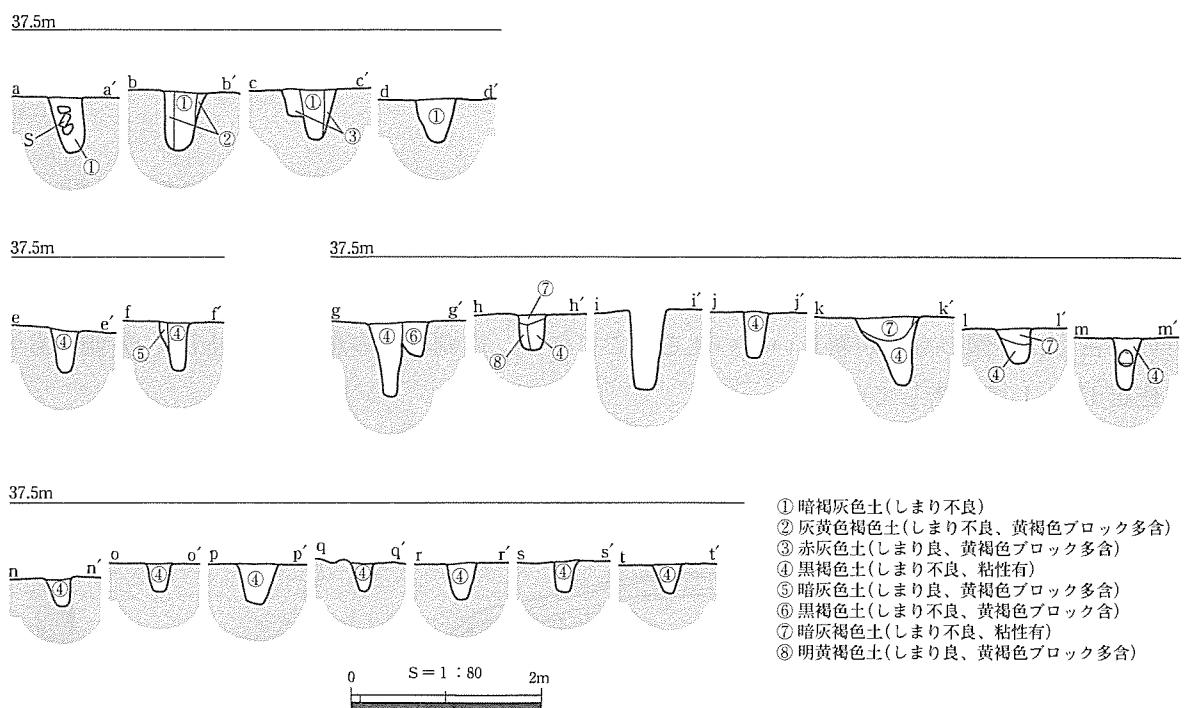
1. 竪穴住居

竪穴住居1（第11・12・13図、PL.2・8）

調査区西側のK19・L19グリッド中に位置しており、西側へ下る緩斜面上に立地している。当初、1棟の住居として調査を行っていたのだが、内側にひとまわり小さい住居1棟を確認し、2棟が重複していることが判明した。外側の住居の貼床によって内側の住居の壁溝が埋められていたため、内側のものが古く、外側のものが新しいといえる。ここでは、内側のものを竪穴住居1a、外側のものを竪穴住居1bとして報告していく。



第11図 竪穴住居①



第12図 壇穴住居②

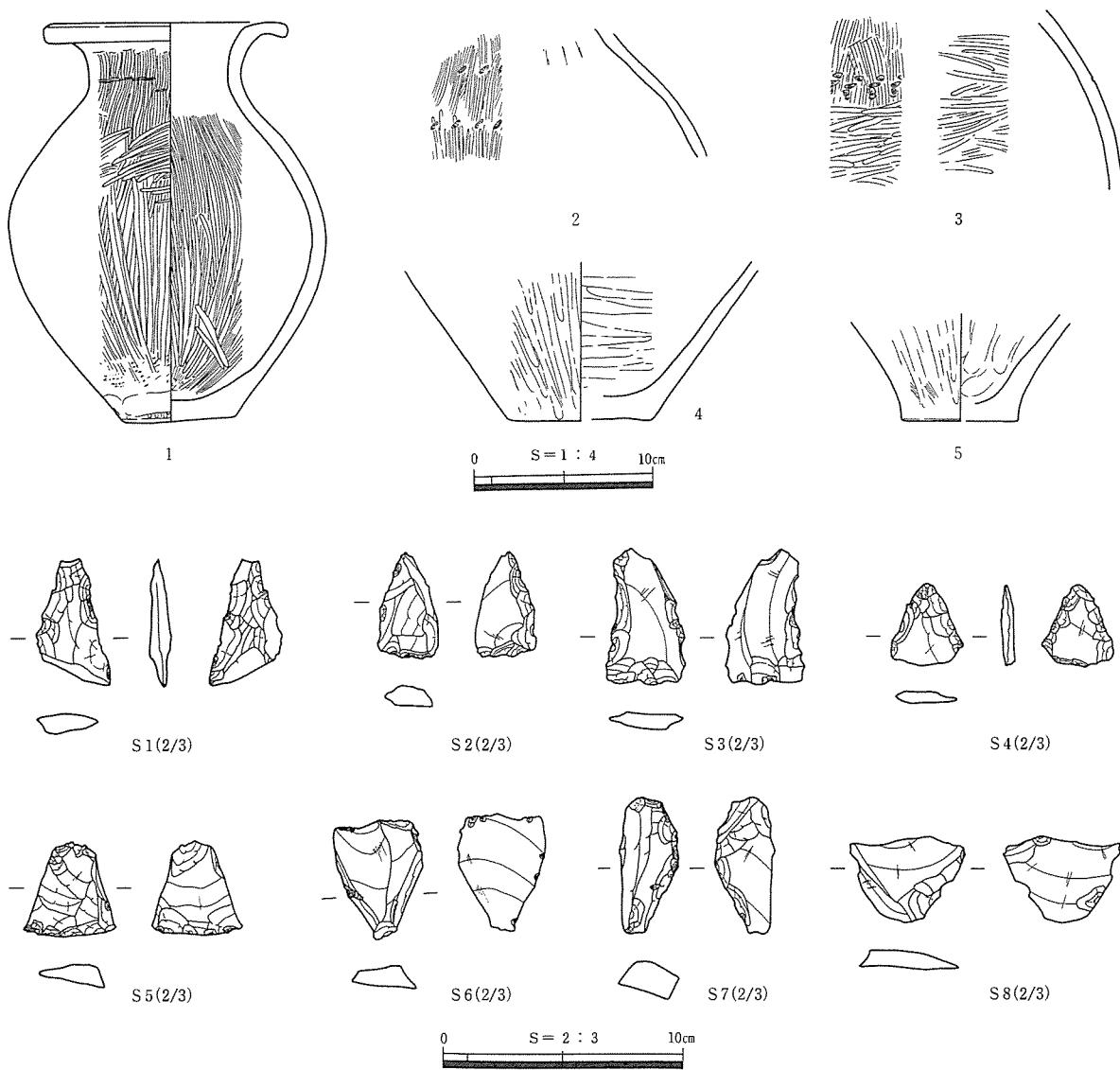
壇穴住居 1aは床面の大半が流失しており、北側の一部において壁溝が確認されたのみであった。この壁溝はソフトローム層を掘り込んで造られたものであり、断面形がU字形を呈している。住居の平面形は円形を呈していたものと考えられ、規模は復元径で6.5mを測る。柱穴は4基確認されており、このうちP 1では柱を引き抜いた後、一辺15cm程の角礫が埋め込まれていた。掘り方は円形を呈しており、規模は径30~40cm、検出面からの深さ50~60cm、柱間250~290cmを測る。検出された柱穴のうちP 2・3では柱痕を確認でき、その規模は径25cmを測る。遺物は出土していない。

壇穴住居 1bは1aと同様残りが悪く、床面の西側半分が流失していた。平面形は1aと同様、円形を呈していたものと考えられ、規模は復元径で10mを測る。住居の中央には長軸120cm、短軸104cm、深さ36cmを測る中央ピットをもつ。柱穴は壁溝に沿った7基と中央ピットを挟んだ2基の合計9基が確認されているが、貯蔵穴3の位置しているところにもう1基の柱穴が想定され、10本の柱で支えていたと考えられる。しかし、貯蔵穴3は本遺構の後に造られたものであり、柱穴を確認できなかった。

確認された柱穴のうちP 13では完形の壺が口縁部を下にした状況で出土しており、廃絶時に柱を抜いた後これを埋納したものと考えられる。柱の掘り方は円形を呈しており、規模は径30~70cm、検出面からの深さ40~80cm、柱間200~300cmを測る。この掘り方には、深く掘られたものと浅く掘られたものの2種類が存在しており、これらは交互に配置されている。この状況から、これらが主柱と補助柱であった可能性が考えられる。

床面はソフトローム層まで掘り込んで造られており、東側では黄橙色ロームブロックによる貼床が確認されている。この貼床の直上から石鎌未製品や石錐未製品がチップとともに出土しており、ここで石器製作が行われていたことが窺える。

遺物は弥生土器や石器の未製品が出土している。1・2はP 13から、その他は床面からの出土である。1は壺であり、タタキによる整形後、外面に縦方向のハケメを施し、胴下半部に縦方向のヘラミガキ、肩部に横方向のヘラミガキを施す。内面には縦方向のハケメ後ヘラミガキを施す。ハケメは底



第13図 竪穴住居出土遺物

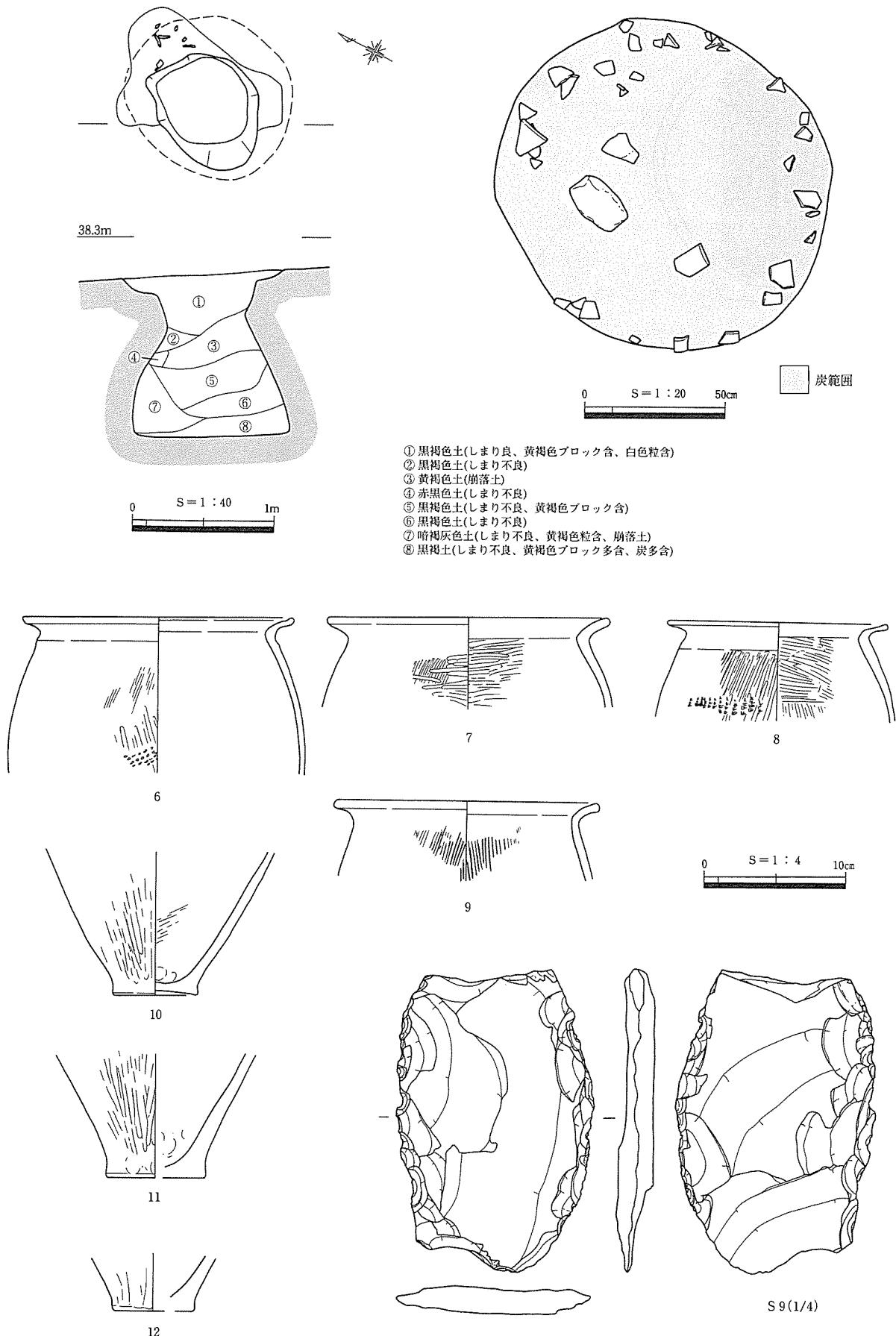
部から頸部にかけて一息に行われている。S 1～5は石鏃未製品、S 6～8は石錐未製品である。時期は弥生時代中期前葉と考えられる。
(玉木)

2. 貯蔵穴

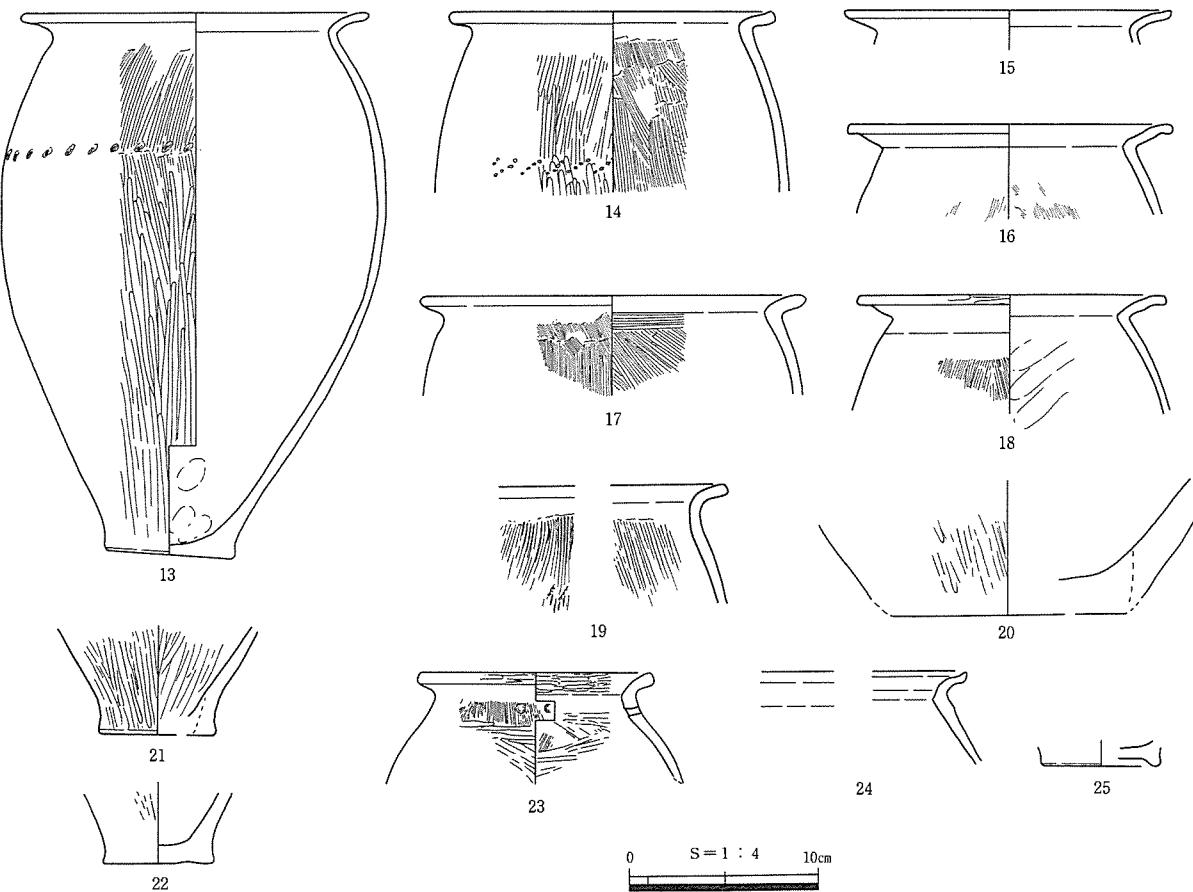
貯蔵穴1 (第14・15図、PL.2・8)

調査区中央、N16グリッド中に位置している。検出面は崩落により不整形な楕円形を呈していたが、本来は底面と同様の円形であったものと考えられる。断面形は上面が狭く、底面が広い袋状を呈しており、規模は上面で径68cm、床面で径112cm、検出面からの深さ126cmを測る。埋土は8層に分層でき、このうち第8層では多量の炭が土器と伴に出土している。この炭の中から炭化米がわずかに出土している。

遺物は弥生土器や石器が出土している。6～12・S 9は床面および第8層中から、13～22は第5・6層中から、その他は埋土中からの出土である。このうち8・10・14・23は後述する貯蔵穴2から出土した土器と接合している。土器の大半は甕であり、壺が若干含まれている。13は胴部に刺突文がめぐらしく、肩部から底部にかけてハケメ後、底部から胴部にかけてヘラミガキを施し、内面にはナデを施している。23は頸部に1対の円孔が認められる甕である。この円孔は焼成前に穿孔されたも



第14図 貯蔵穴1・出土遺物①



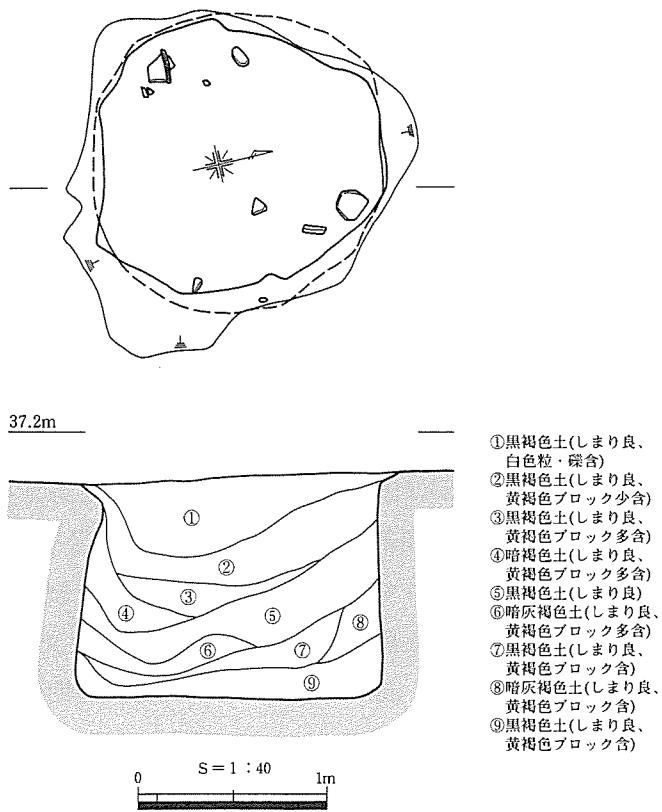
第15図 貯蔵穴1出土遺物②

のである。内・外面ともにハケメを施した後、ヘラミガキを施す。S 9は打製石鍬である。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。（玉木）

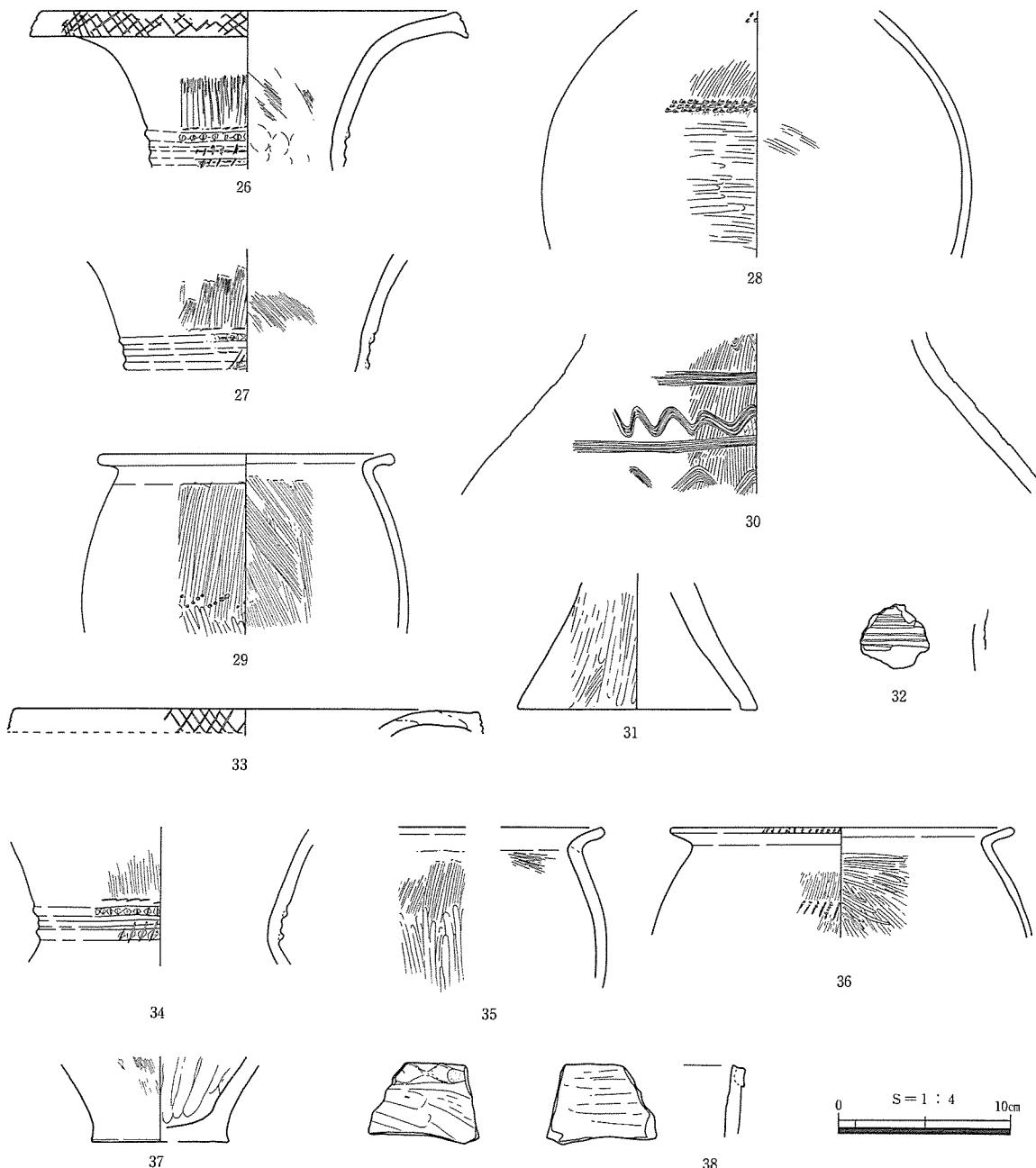
貯蔵穴2（第16図、PL.8）

豊穴住居1と重複しており、貼床を掘り込んで造られていたことから、住居の廃絶後に造られたものと考えられる。検出面は崩落のため不整形となっていたが、本来は底面と同様の円形であったと考えられる。検出面と底面の規模はほぼ同じであり、形状は円筒状を呈している。検出面の規模は径145cm、底面の規模は径160cm、検出面からの深さ118cmを測る。

遺物は弥生土器、炭化米が出土している。26～28は床面直上から、



第16図 貯蔵穴2



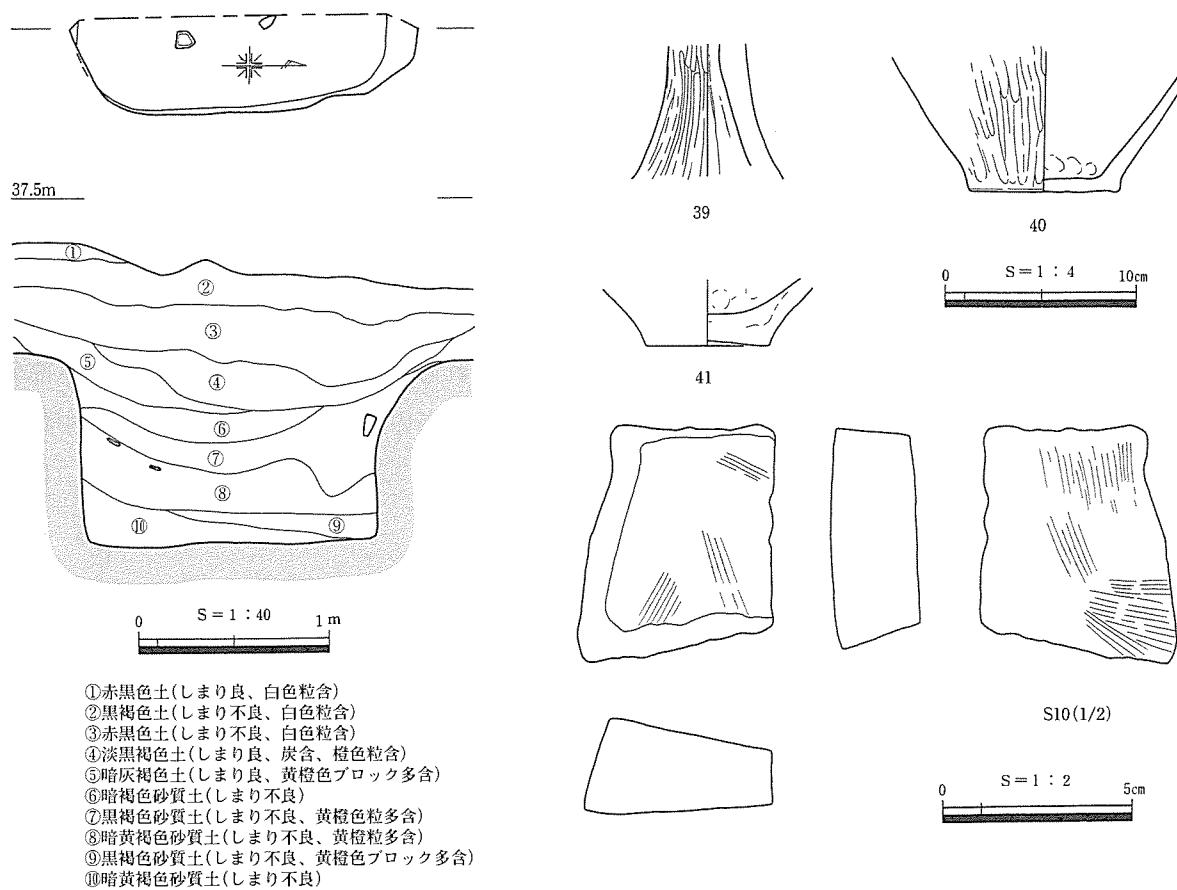
第17図 貯蔵穴2出土遺物

29～32は第3～6層から、33～35は第1・2層から、他は埋土中からの出土である。先にも述べたが、第3～6層から出土した土器と貯蔵穴1から出土した土器が接合しており、これらの状況から判断すると、貯蔵穴1・2がほぼ同時期に埋没したものと考えられる。

26・27は壺であり、頸部には刻目のある貼付突帯をめぐらせる。26の口縁部の肥厚部分には格子状のヘラ描沈腺文が施されている。31は高坏の脚部であり、外面にハケメ後縦方向のヘラミガキを施す。36は甕であり、口縁部と胴部に櫛状工具による刺突文をめぐらす。38は鉢であり、口縁部に刻目突帯をめぐらすものであり、混入したものといえる。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。 (玉木)

貯蔵穴3 (第18図、P.L.8)

竪穴住居1と重複しており、落し穴18と近接している。調査区境に位置しており、遺構の半分は調査区外へ延びている。前述したが、本遺構は竪穴住居1の廃絶後に造られたものであり、埋土中には貼床



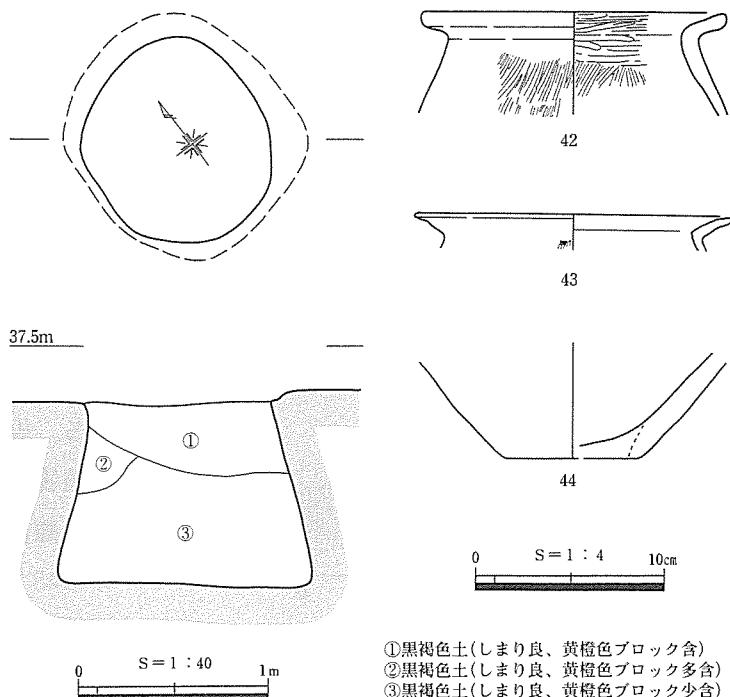
第18図 貯蔵穴3・出土遺物

として利用されていた土の流入が第5層において認められる。平面形は南北に長い隅丸長方形であり、長軸方向がほぼ北を向き等高線に沿っている。規模は長軸184cm、検出面からの深さ100cmを測る。

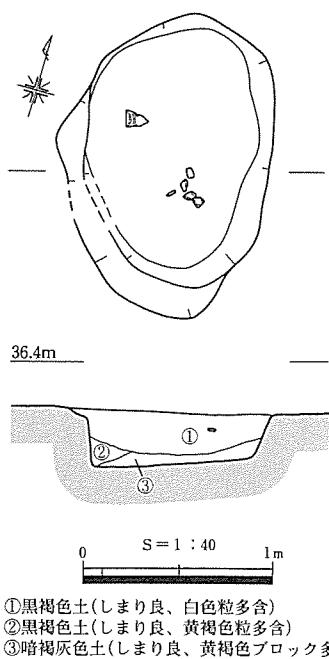
遺物は弥生土器、石器が出土している。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。
(玉木)

貯蔵穴4（第19図、P L.8）

調査区南側のP19グリッド中に位置しており、西へ下る緩やかな斜面上に立地している。平面形は検出面・底面とともに円形を呈しており、断面形は上面が狭く、底面が広い袋状を呈している。規模は検出面で径100cm、底面で径134cm、検出面からの深さ96cmを測る。遺物は弥生土器が出土している。時期は他の貯蔵穴と同様、弥生時代中期中葉と考えられる。
(玉木)



第19図 貯蔵穴4・出土遺物



3. 土坑

土坑1（第20図）

J 14グリッド中に位置している。圃場整備による削平を受けており残りが悪い。上面の一部が崩落しており不整形となっているが、本来は橢円形を呈していたものと思われる。底面は平坦となっており、壁面は垂直に立ち上がる。規模は長軸160cm、短軸115cmを測る。

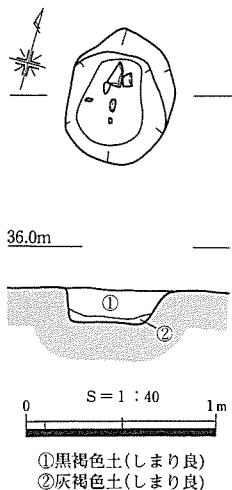
遺物はおもに第1層から弥生土器が出土している。このうち図化できたのは45・46であり、いずれも甕である。45は口縁部の肥厚部分に格子状のヘラ描沈線文が施されている。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

(玉木)



第20図 土坑1・出土遺物

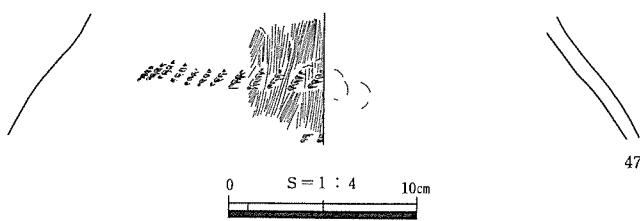
土坑2（第21図）



調査区北側、H14グリッド中に位置している。平面形は不整形な円形を呈しており、規模は径55cm検出面からの深さ17cmを測る。底面は平坦となっており、器面はほぼ垂直に立ち上がる。

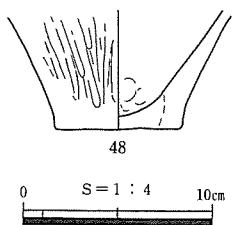
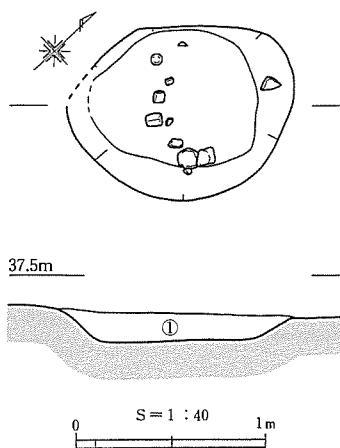
遺物は弥生土器が第1層上面から出土している。47は壺であり、櫛状工具による刺突文がめぐる。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

(玉木)



第21図 土坑2・出土遺物

土坑3（第22図）



第22図 土坑3・出土遺物

K 15グリッド中に位置している。圃場整備による削平を受けており残りが悪い。検出面は崩落により不整形となっていたが、本来は橢円形を呈していたものと思われる。底面は比較的平坦となっており、壁面は傾斜をもって立ち上がる。規模は長軸120cm、短軸92cmを測る。

遺物は埋土の下層から中層にかけて弥生土器や礫が出土している。このうち図化できたのは48である。48は甕の底部であり、外面には縦方向のヘラミガキ、内面にはナデを施す。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

(玉木)

土坑4（第23図）

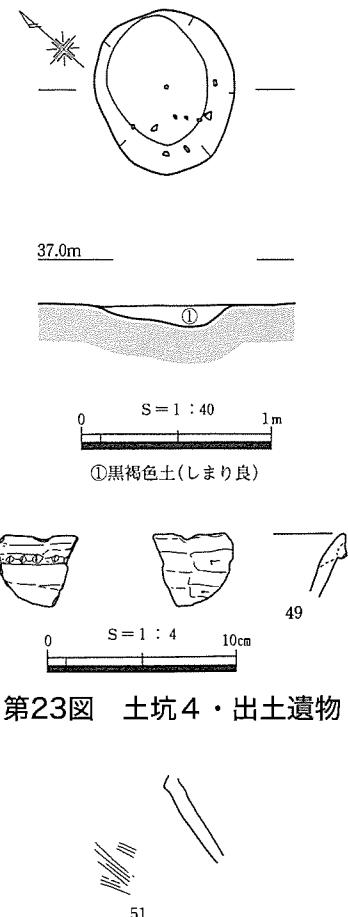
調査区北側、J15グリッド中に位置している。平面形は橢円形を呈しており、底面はすり鉢状となっている。規模は長軸86cm、短軸73cm、検出面からの深さは最も深い場所で11cmを測る。

遺物は上面から弥生土器が出土している。49は鉢であり、口縁部が細く尖り、若干下がった位置に刻目を施した突帯をめぐらす。時期は弥生時代前期と考えられる。
(玉木)

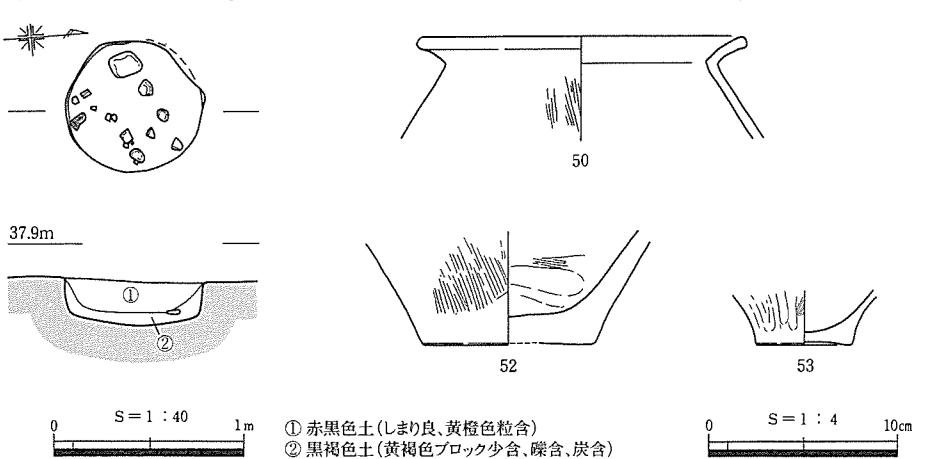
土坑5（第24図）

調査区西側のN18グリッド中に位置している。上面は圃場整備による削平を受けており残りが悪い。平面形は円形を呈しており、その規模は径73cm、深さ22cmを測る。底面はほぼ平坦となっており、壁面はやや内傾するがほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分層でき、おもに第1層から弥生土器や礫が出土している。

出土した遺物のうち図化できたのは50～54である。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。
(玉木)



第23図 土坑4・出土遺物

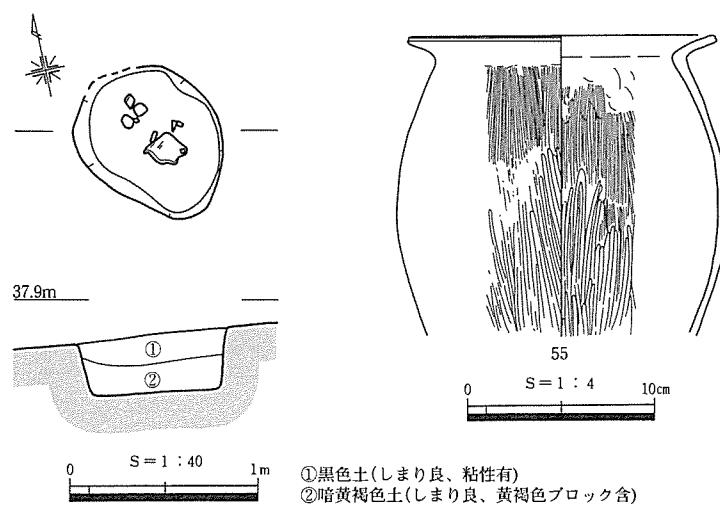


第24図 土坑5・出土遺物

土坑6（第25図）

調査区西側、O19グリッド中に位置している。平面形は不整形な円形を呈しており、規模は長軸91cm、短軸72cmを測る。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は2層に分層でき、第1層の上層からは弥生土器や礫が出土している。

出土した遺物のうち図化できたのは甕55である。外面調整はハケメ後ヘラミガキを施し、口縁部端部には面取りが施される。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。
(玉木)



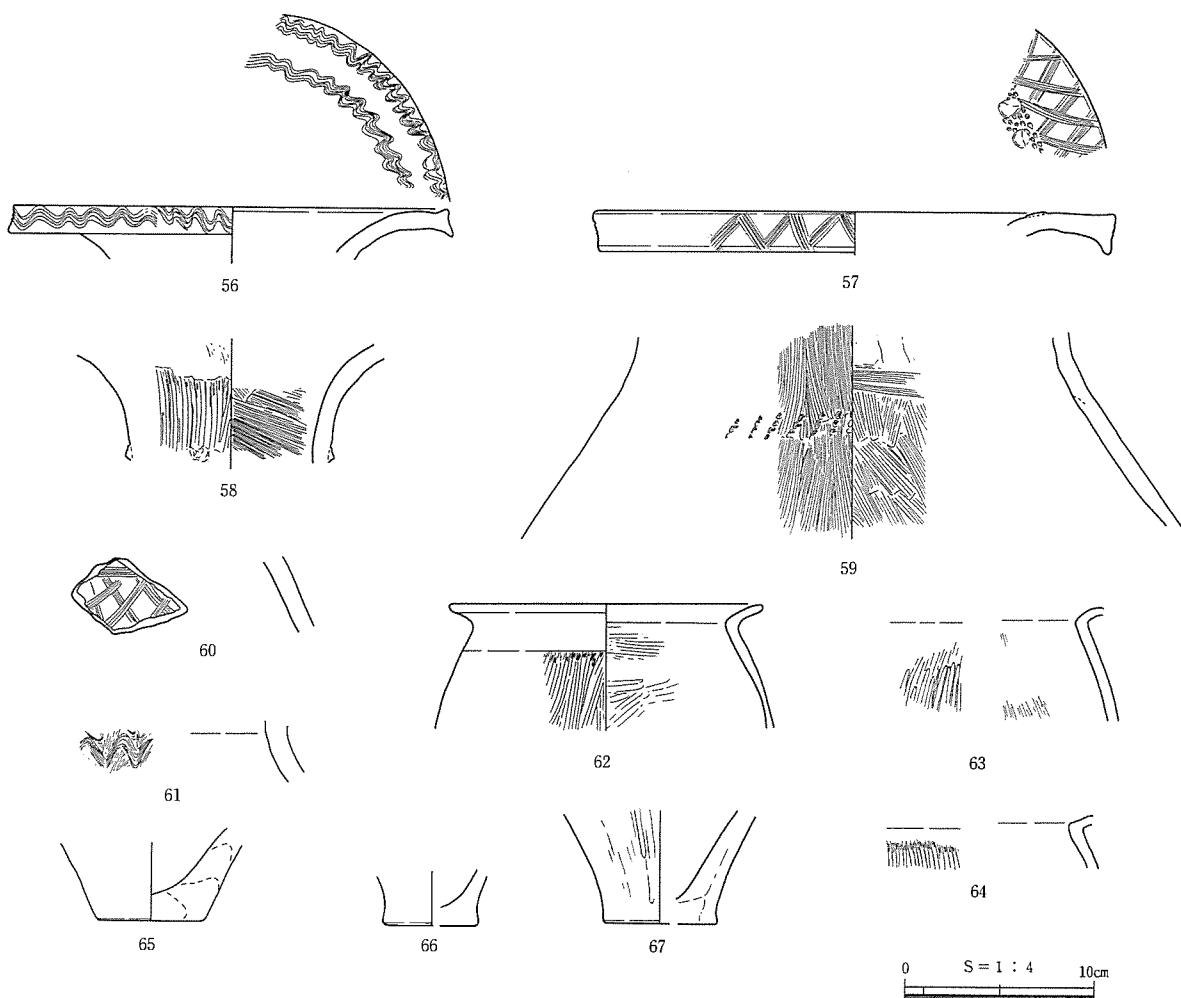
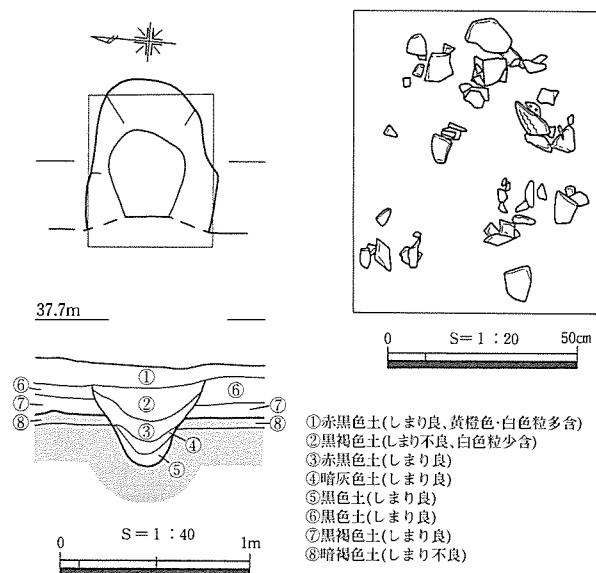
第25図 土坑6・出土遺物

土坑7（第26図、P.L.2・8）

調査区西側のN20グリッド中に位置している。西側は調査区境となっており、調査区外へ遺構の半分近くが延びているものと考えられる。また、調査区境であるために表土から土坑の底面までの土の

堆積を確認することができ、黒褐色土を掘り込んで造られていることが確認された。平面形は検出状況から細長い橢円形を呈しているものと思われる。埋土は4層に分層でき、このうち第4・5層から土器が出土している。規模は短軸68cmを測り、深さ40cmを測る。

遺物はおもに第5層から出土している。出土状況から一括して廃棄された可能性が高いと考えられる。56・57は壺であり、肥厚した口縁部に櫛描波状文・斜格子文が施される。58は頸部であり、刻目を施した貼付けによる突帯をめぐらせる。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。（玉木）



第26図 土坑7・出土遺物

土坑8（第27図）

調査区西側P20グリッド中に位置している。土坑7と同様、調査区境に位置しており、遺構の半分が調査区外へ延びているものと思われる。平面形は不整形であり、底面はほぼ平坦となっている。規模は幅96cmを測り、検出面からの深さ40cmを測る。埋土は黒褐色土の1層であり、自然堆積によるものといえる。遺物は出土していないが、周囲の状況から弥生時代中期と考えられる。（玉木）

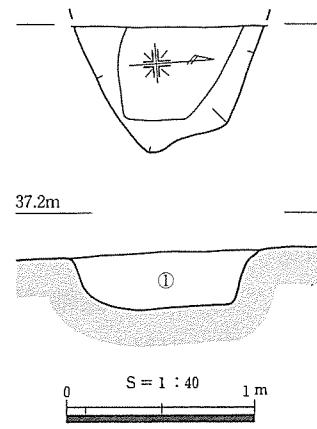
4. 落し穴

落し穴1（第28図）

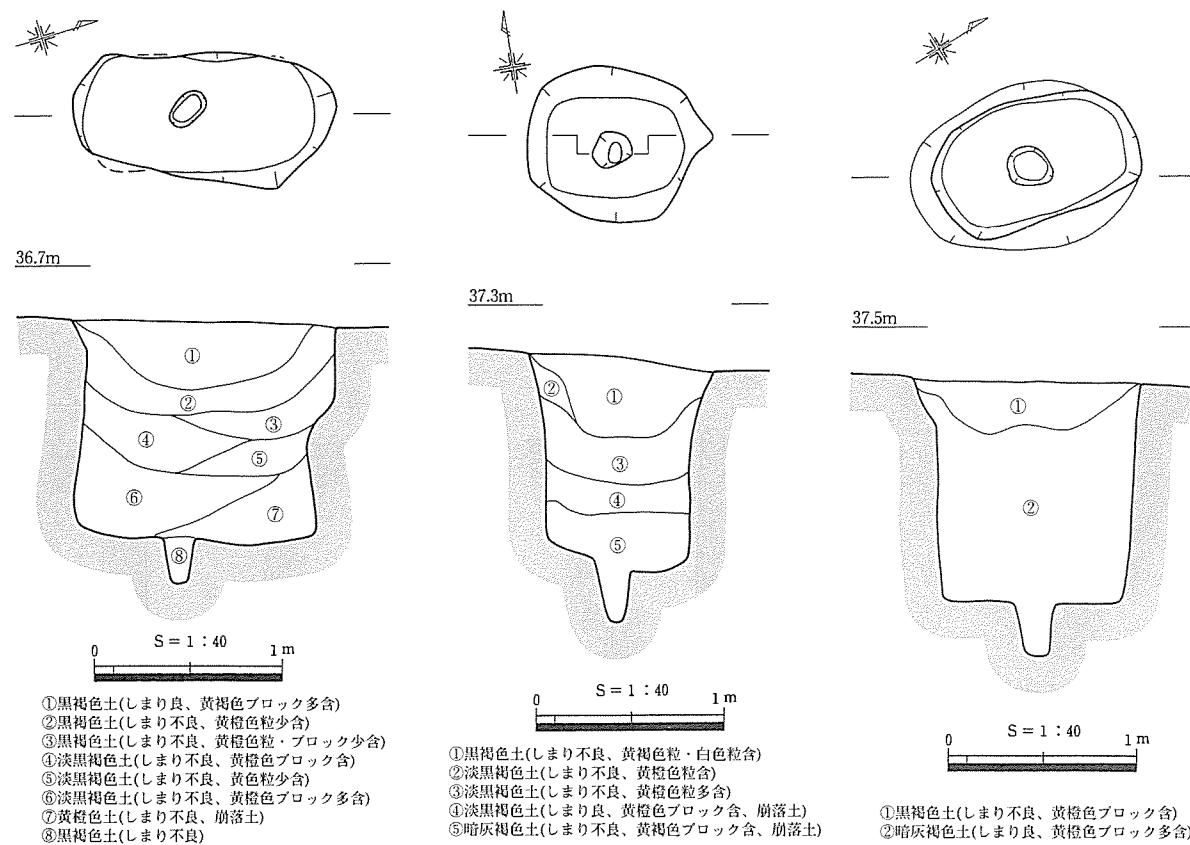
調査区北東側、L12グリッド中に位置している。検出面は崩落のため不整形となっていた。平面形は隅丸の長方形を呈しており、その規模は長軸140cm、短軸68cm、検出面からの深さ115cmを測る。底面は平坦となっており、壁面はやや内傾しながら立ち上がる。底面の中央には径16cm、深さ25cmの底面ピットをもつ。埋土は8層に分層でき、このうち第7層は崩落による堆積である。遺物は出土していない。（玉木）

落し穴2（第29図）

落し穴1から南西側へ6mの場所に位置している。平面形は隅丸方形を呈しており、その規模は長軸90cm、短軸84cm、検出面までの深さ112cmを測る。底面はほぼ平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面の中央には径17cm、深さ30cmの底面ピットをもつ。土層は5層に分層でき、このうち第4・5層は崩落による堆積である。遺物は出土していない。（玉木）



第27図 土坑8



第28図 落し穴1

第29図 落し穴2

第30図 落し穴3

落し穴3（第30図）

K15グリッド中に位置している。平面形は隅丸の長方形を呈しており、その規模は長軸132cm、短軸89cm、検出面からの深さ117cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦となっている。底面の中央には径22cm、深さ18cmの底面ピットをもつ。遺物は出土していない。（玉木）

落し穴4（第31図）

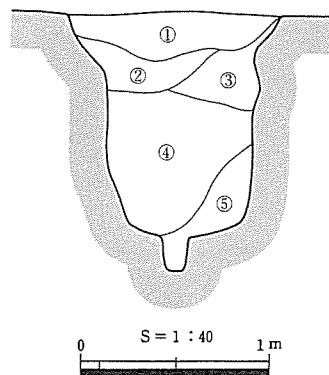
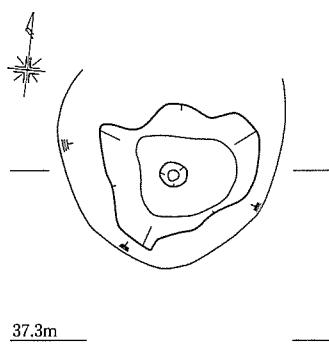
K17グリッド中に位置している。検出面は崩落のため不整形となっていた。平面形は隅丸方形を呈しており、その規模は長軸132cm、短軸60cm、検出面からの深さ120cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦となっている。底面の中央やや西側には径13cm、深さ17cmの底面ピットをもつ。遺物は出土していない。（玉木）

落し穴5（第32図）

落し穴4の南側、K17グリッド中に位置している。検出面は崩落のため不整形となっていた。平面形は隅丸の長方形を呈しており、その規模は長軸84cm、短軸96cm、検出面からの深さ102cmを測る。壁面は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦となっている。底面の中央には径15cm、深さ15cmの底面ピットをもつ。遺物は出土していない。（玉木）

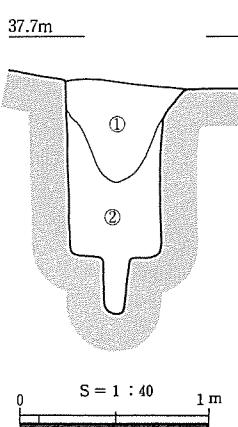
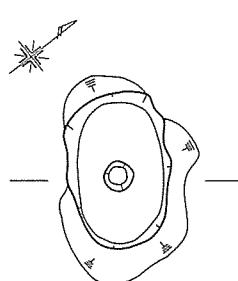
落し穴6（第33図）

落し穴5の南側、L17グリッド中に位置している。検出面は崩落のため不整形となっていた。平面形は隅丸の長方形を呈しており、その規模は長軸105cm、短軸67cm、検出面からの深さ102cmを測る。壁面は上面へ行くに従い傾斜をもって立ち上がる。底面は平坦となっており、中央には径15cm、深さ15cmの底面ピットをもつ。遺物は出土していない。（玉木）



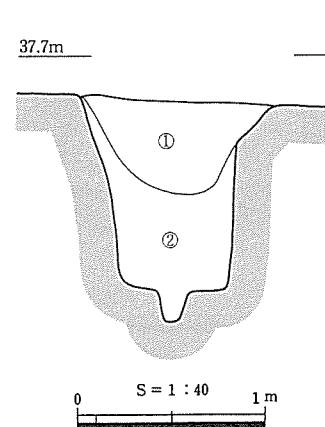
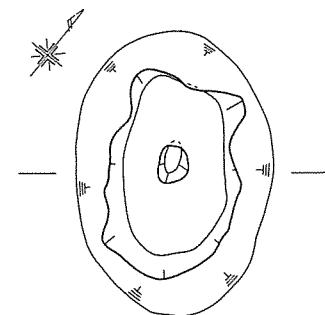
- ①黒褐色土(しまり不良、黄褐色ブロック含)
- ②赤黒色土(しまり不良、黄褐色ブロック少含)
- ③赤黒色土(しまり不良、黄褐色ブロック少含)
- ④黒褐色土(しまり不良、黄褐色粒少含)
- ⑤黒褐色土(黄褐色ブロック多含、崩落土)

第31図 落し穴4



- ①黒褐色土(しまり不良、粘性有、黄橙色ブロック少含)
- ②暗灰褐色土(しまり良、粘性有、黄橙色ブロック少含)

第32図 落し穴5



- ①黒褐色土(しまり良)
- ②黒褐色土(しまり良、黄褐色ブロック多含)

第33図 落し穴6

落し穴7（第34図）

調査区南側、N16グリッド中に位置している。周囲は圃場整備のため削平されており平坦となっている。平面形は円形を呈しており、規模は径75cm、検出面からの深さ112cmを測る。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は8層に分層でき、このうち第7・8層は使用時の堆積と思われる。遺物は出土していない。（玉木）

落し穴8（第35図）

落し穴7から西側へ約2mの場所に位置している。平面形は不整形な隅丸方形を呈しており、その規模は長軸85cm、短軸65cm、検出面からの深さ145cmを測る。壁面は中央付近で崩落しているがほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦となっている。埋土は5層に分層でき、このうち第5層は崩落による堆積であり、他は自然堆積によるものである。遺物は出土していない。（玉木）

落し穴9（第36図）

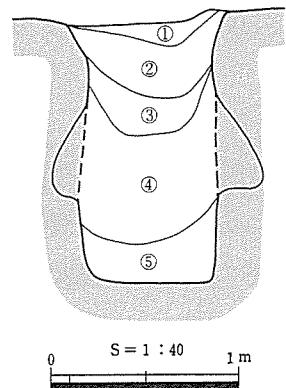
落し穴8から南側へ約3mの場所に位置している。平面形は円形を呈しており、その規模は径66cm、検出面からの深さ144cmを測る。底面は平坦となっており、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は8層に分層でき、このうち第6・7層は使用時の堆積と思われる。また、他は自然堆積によるものといえる。遺物は出土していない。

（玉木）



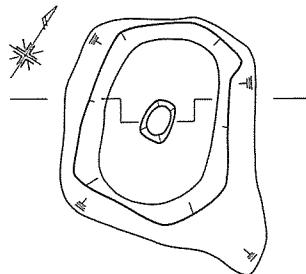
37.9m

37.9m



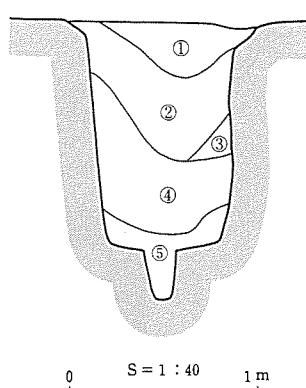
- ① 黒色土(しまり良、黄色粒・白色粒含)
- ② 黒褐色土(しまり良、黄橙色粒含、黄橙色ブロック含)
- ③ 赤黒色土(しまり不良、黄橙色粒含)
- ④ 黑褐色土(しまり不良、黄橙色粒含)
- ⑤ 淡褐色土(しまり不良、粘性有、崩落土)

- ⑥ 黄褐色土(しまり不良、粘性有、崩落土)
- ⑦ 黑褐色土(しまり不良、粘性弱)
- ⑧ 黑褐色土(しまり良、白色粒含)



37.9m

37.9m

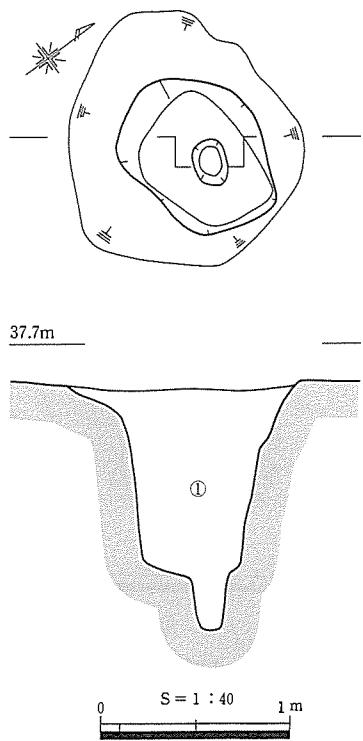


- ① 暗赤灰色土(しまり良、白色粒含、黄橙色粒多含)
- ② 黑褐色土(しまり良、黄橙色粒多含)
- ③ 黑褐色土(しまり不良、黄橙色少含)
- ④ 黑褐色土(しまり不良、黄橙色ブロック少含)
- ⑤ 暗灰色土(しまり不良、黄橙色ブロック多含)

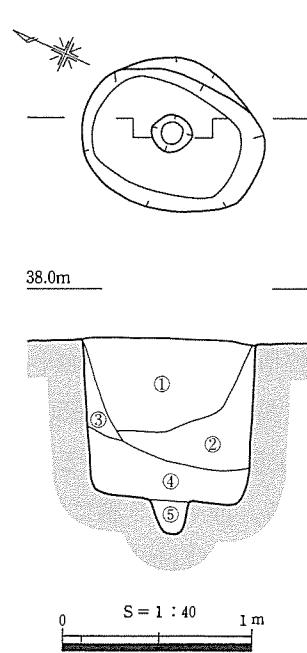
第35図 落し穴8

第36図 落し穴9

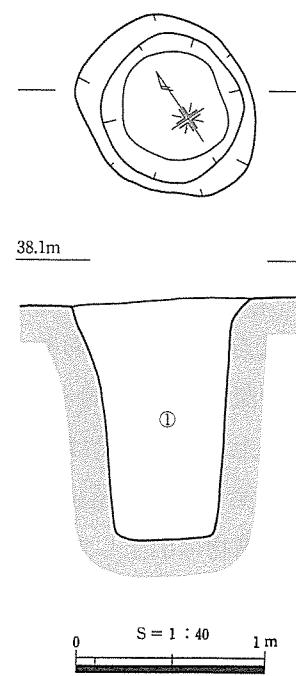
第37図 落し穴10



第38図 落し穴11



第39図 落し穴12



第40図 落し穴13

落し穴10 (第37図、P L.2)

M17グリッドに位置している。検出面は崩落のため不整形となっていた。平面形は不定形な隅丸の長方形を呈しており、その規模は長軸107cm、短軸74cm、検出面からの深さ120cmを測る。底面は平坦となっており、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面の中央には径15cm、深さ25cmの底面ピットをもつ。遺物は出土していない。

(玉木)

落し穴11 (第38図)

M18グリッド中に位置している。検出面は崩落のため不整形となっていた。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は径92cm、検出面からの深さ99cmを測る。壁面は傾斜をもって立ち上がり、断面形はすり鉢状を呈する。底面の中央には径20cm、深さ30cmの底面ピットをもつ。遺物は出土していない。

(玉木)

落し穴12 (第39図)

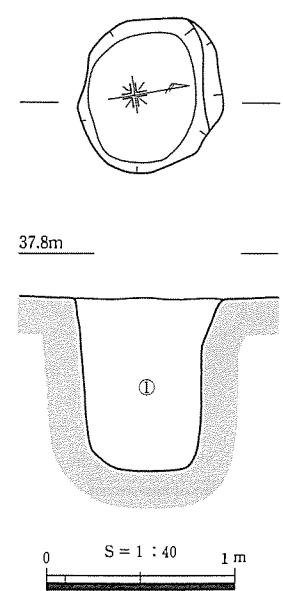
N18グリッド中に位置している。平面形は隅丸の長方形を呈しており、規模は長軸92cm、短軸73cm、検出面からの深さ83cmを測る。壁面は垂直に立ち上がる。底面は平坦であり、その中心には径20cm、深さ17cmの底面ピットをもつ。遺物は出土していない。

(玉木)

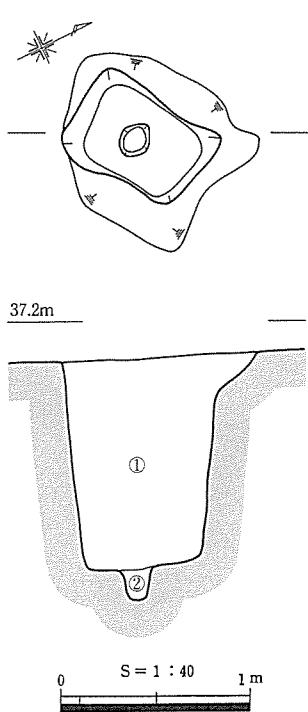
落し穴13 (第40図、P L.2)

O17グリッド中に位置している。平面形は不整形な円形を呈しており、規模は径90cm、検出面からの深さ126cmを測る。底面は平坦となっており、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土の1層であり、自然堆積によるものといえる。遺物は出土していない。

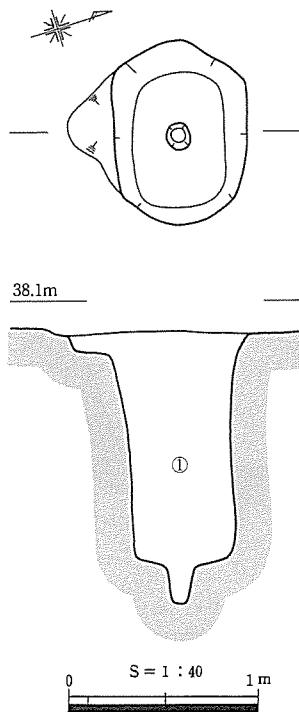
(玉木)



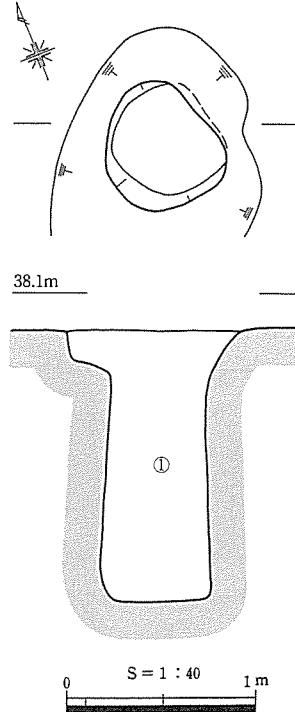
第41図 落し穴14



第42図 落し穴15



第43図 落し穴16



第44図 落し穴17

落し穴14（第41図）

K19グリッド中に位置している。平面形は円形を呈しており、規模は径81cm、検出面からの深さ93cmを測る。底面は平坦となっており、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土の1層であり、自然堆積によるものといえる。遺物は出土していない。（玉木）

落し穴15（第42図）

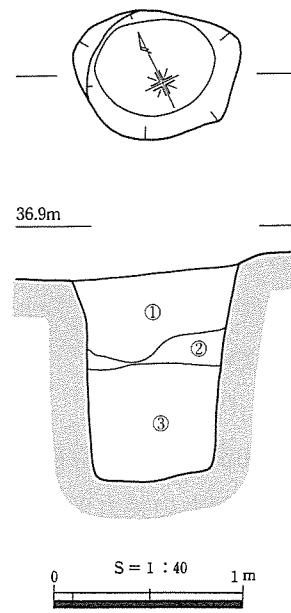
L19グリッド中に位置している。検出面は崩落して不整形となっていた。平面形は長方形を呈しており、規模は長軸71cm、短軸45cm、検出面からの深さ110cmを測る。底面は平坦となっており、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面の中央には径15cm、深さ20cmの底面ピットをもつ。遺物は出土していない。（玉木）

落し穴16（第43図）

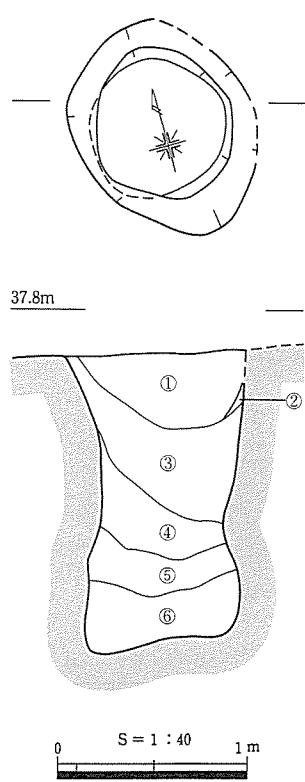
N18グリッド中に位置している。平面形は隅丸の長方形を呈しており、規模は長軸98cm、短軸71cm、検出面からの深さ125cmを測る。底面はほぼ平坦となっており、壁面はやや内湾しながら立ち上がる。底面の中央には径15cm、深さ20cmの底面ピットをもつ。遺物は出土していない。（玉木）

落し穴17（第44図）

O18グリッド中に位置している。検出面は崩落して不整形となっていた。平面形は不整形な円形を呈しており、規模は径41cm、検出面からの深さ143cmを測る。壁面はやや内傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦となっている。遺物は出土していない。（玉木）



第45図 落し穴18



第46図 落し穴19

落し穴19（第46図）

調査区西側、N20グリッド中に位置している。平面形は円形を呈しており、規模は径98cm、検出面からの深さ149cmを測る。底面はほぼ平坦となっている。壁面は内傾して立ち上がり、上面においてわずかに広がる。遺物は出土していない。
(玉木)

落し穴20（第47図）

落し穴19から南側へ約2mの場所に位置している。平面形は西側が弧の字状を描く隅丸の長方形を呈しており、規模は長軸125cm、短軸78cm、検出面からの深さ69cmを測る。底面はほぼ平坦となっており、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面の中央には径19cm、深さ32cmの底面ピットをもつ。遺物は出土していない。
(玉木)

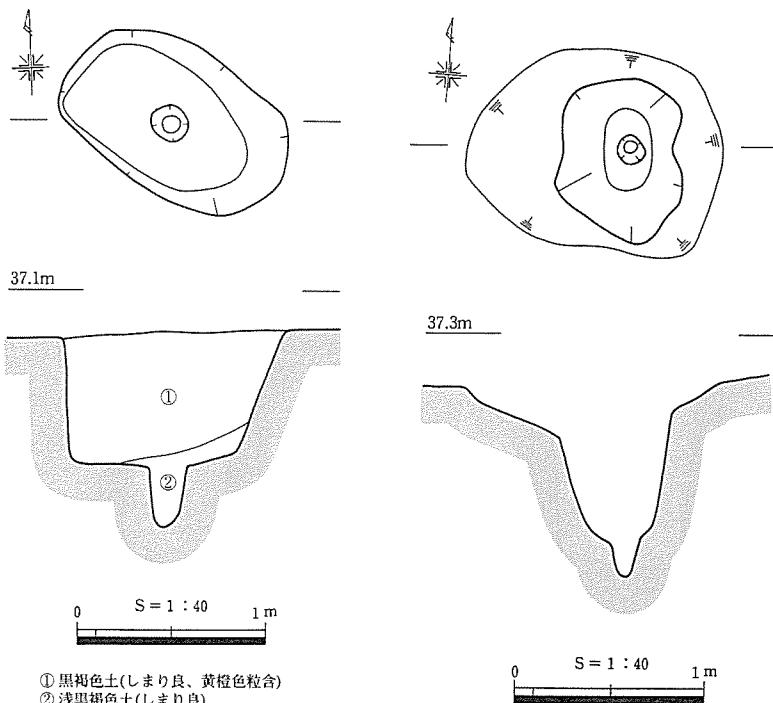
落し穴21（第48図）

落し穴20から南側へ約6mの場所に位置している。検出面は崩落して不整形となっていた。平面形は不整形な隅丸の長方形を呈しており、規模は長軸85cm、短軸62cm、検出面からの深さ80cmを測る。壁面は傾斜をもって立ち上がり、断面形がすり鉢状を呈している。底面は若干の平坦部をもつのみである。底面の中央には径15cm、深さ21cmの底面ピットをもつ。遺物は出土していない。
(玉木)

5. 墓

火葬墓1（第49図、P.L.2・8）

K18グリッド中に位置している。遺構は遺物の確認によってはじめて明らかとなった。このためク



第47図 落し穴20

第48図 落し穴21

落し穴18（第45図）

竪穴住居1と重複しており、貯蔵穴3に近接している。平面形は不整形な楕円形を呈しており、長軸85cm、短軸67cm、検出面からの深さ110cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦となっている。遺物は出土していない。
(玉木)

0

S = 1 : 40

1 m

0

0

S = 1 : 40

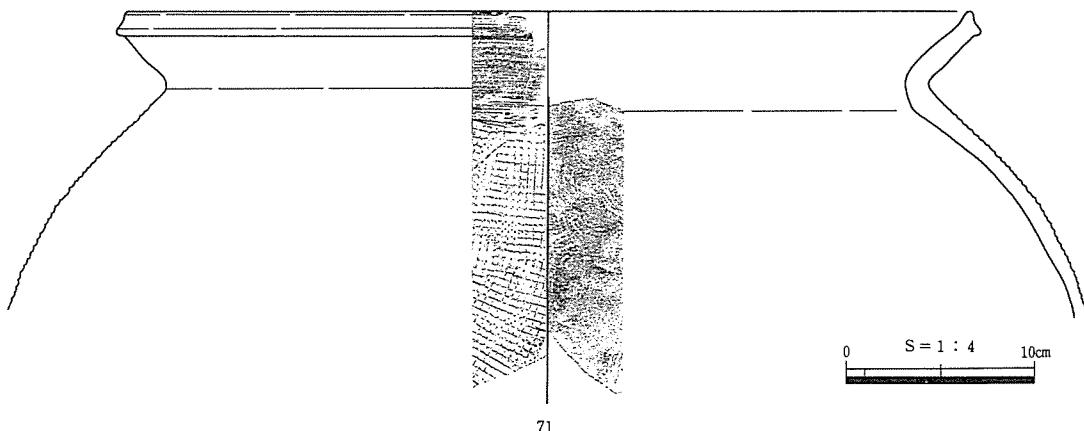
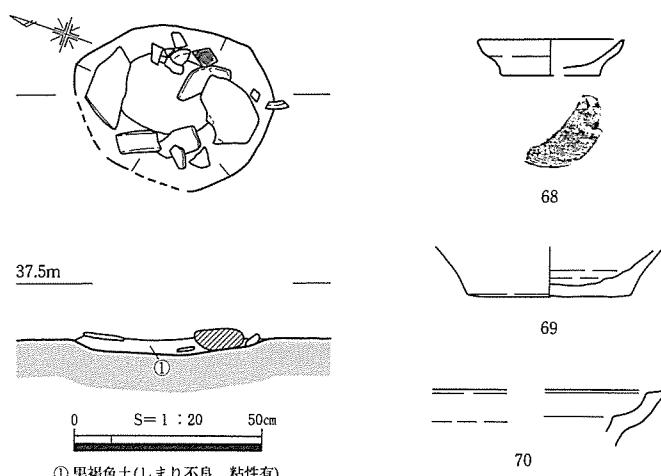
1 m

0

S = 1 : 40

ロボクである黒褐色土を掘り込んで造られていたものと考えられるが、検出時に掘り方を確認することができず、底面のみの確認となつた。平面形は不整形な円形を呈しており、底面は皿状を呈している。規模は長軸53cm、短軸41cmを測る。埋土は黒褐色土の1層であり、わずかに炭が含まれている。

遺構の上面には一辺20cm、厚さ5cmを測る扁平な石が置かれており、周囲から



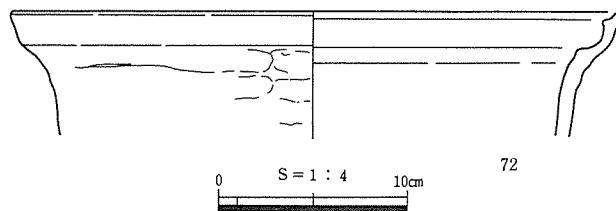
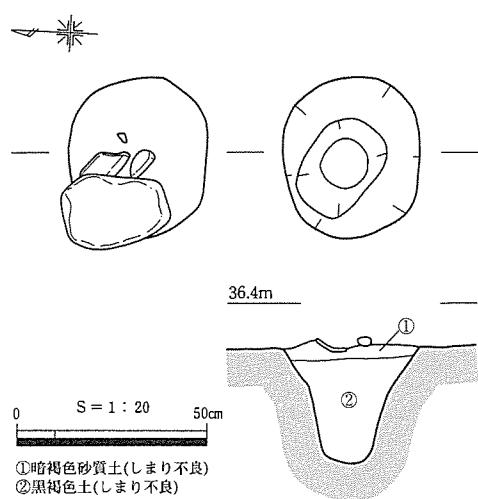
第49図 火葬墓1・出土遺物

須恵器甕の破片が出土している。遺物の出土状況から甕が蔵骨器として使用されていたものと考えられる。甕は器面の外面に格子タタキが施されており、内面には同心円状の当て具の痕跡が認められる。外面の格子タタキは口縁部まで施されており、口縁部ではタタキ後ヨコナデによって消されている。内面の当て具の痕跡は部分的に認められる程度であり、粗いナデによって消されている。口縁端部はヨコナデによってわずかに内湾している。岡山県で生産された亀山焼や勝間田焼と造りが類似しており、胎土分析を行ったところ、胎土が勝間田焼の領域に属していることが判明した（第9章）。（玉木）

6. 柱穴

柱穴1（第50図）

L12グリッド中に位置している。検出面において一辺

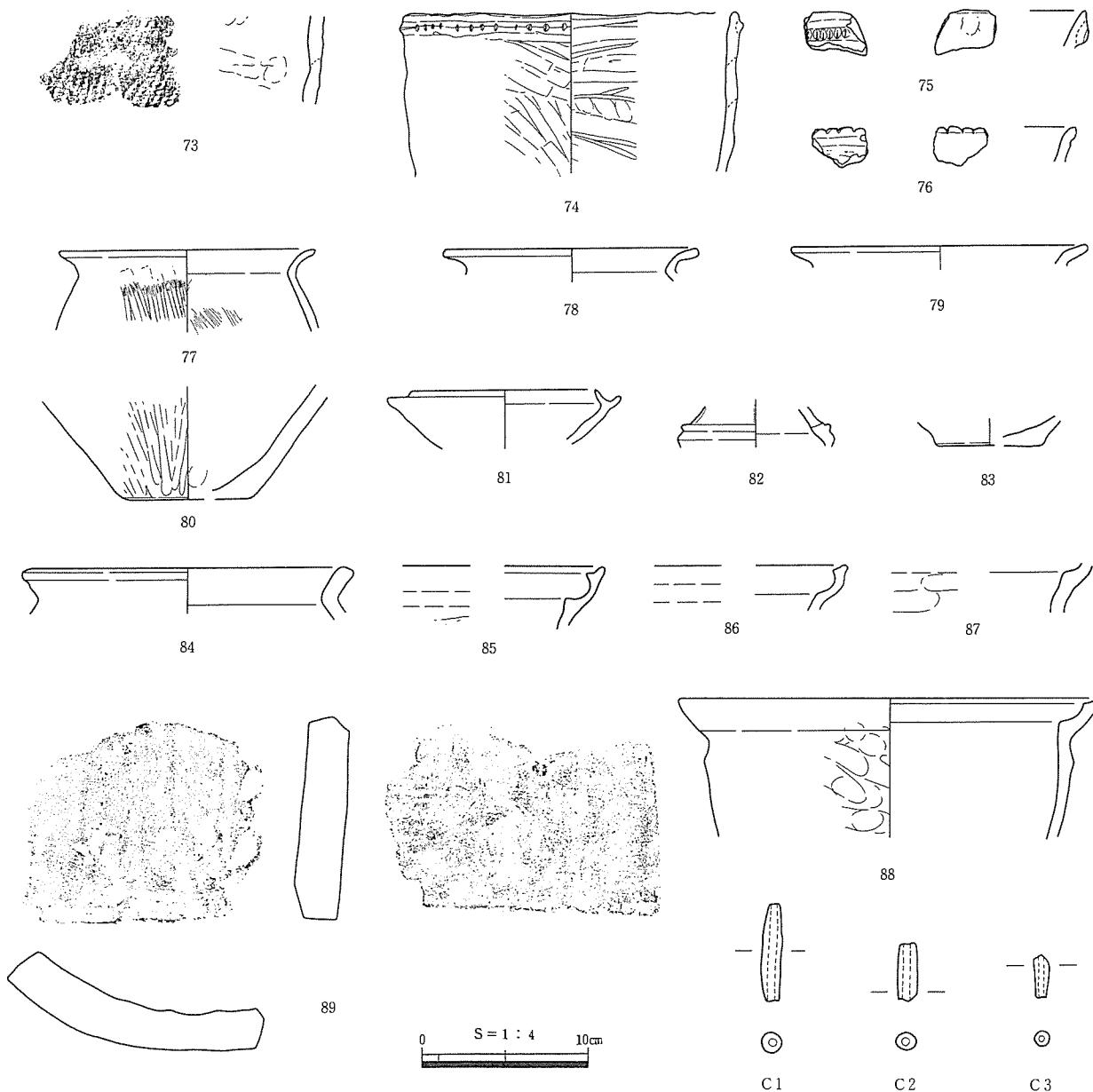


第50図 柱穴1・出土遺物

15cmほどの石が配されており、その下から72が出土している。掘り方は検出面が隅丸方形を呈しており、途中で隅丸の長方形となる。規模は最大径32cm、検出面からの深さ36cmを測る。 (玉木)

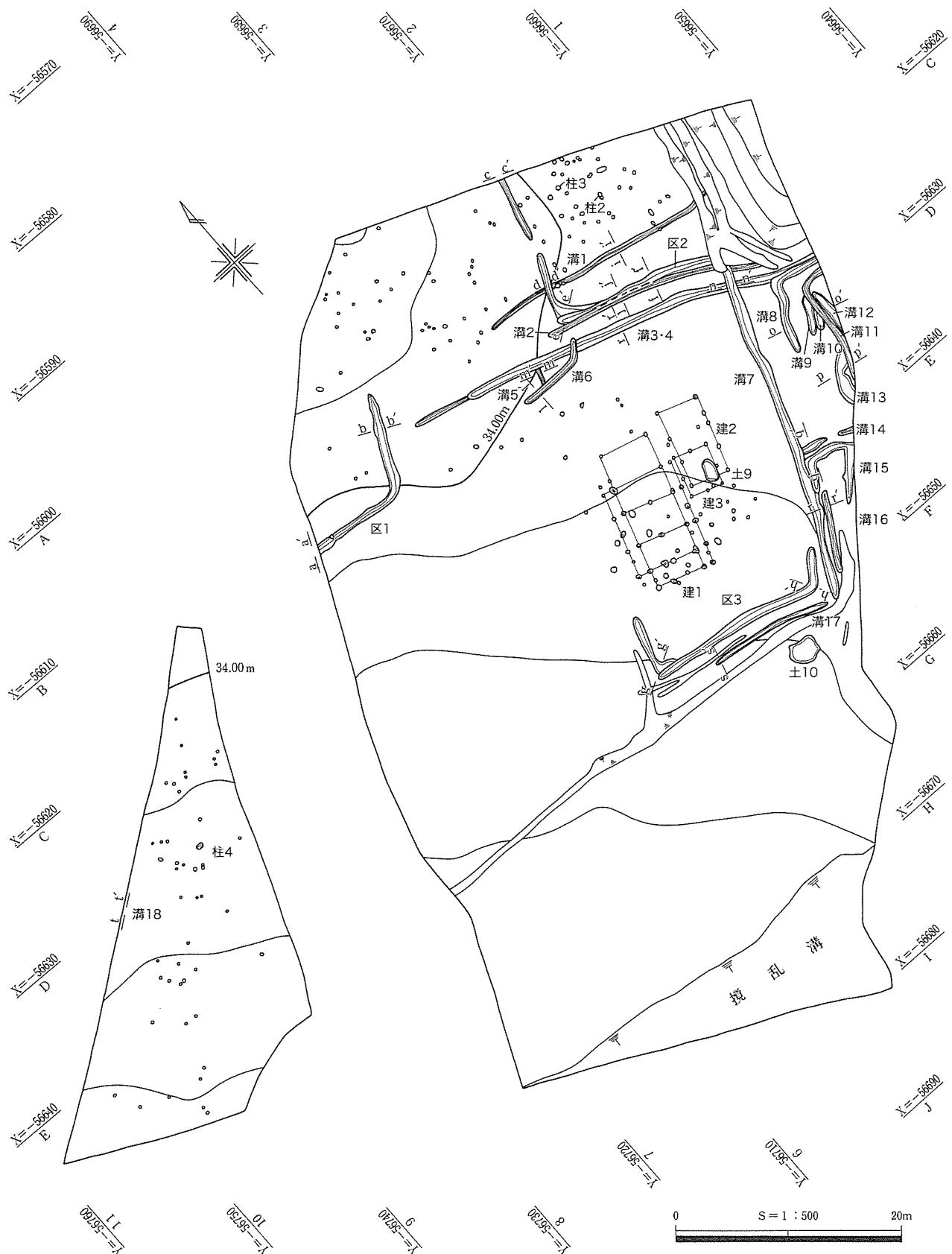
7. 遺構に伴わない遺物 (第51図)

クロボクである赤黒色土および黒褐色土、調査区を東西に流れる水路の埋土中から縄文時代から中世に至る遺物がわずかながら出土している。縄文時代の遺物は73～75であり、73は外面に縦方向の斜行縄文が施されている。74・75は晩期の突帯文土器であり、口縁部付近に刻目突帯がめぐる。また、74は外面調整に板状工具によるケズリが施されている。弥生時代の遺物は76～80であり、76の口縁部には刻目が施されている。古墳時代の遺物は81・82であり、81は壊身、82は高壙の脚部である。中世の遺物は83～89、C1～C3であり、83は皿の底部、84は甕、85～88は鍋、89は瓦、C1～3は土錘である。89は凹面に布目压痕と幅約2.8cmを測る側板模骨痕が認められ、狭端部には面取りが行われている。凸面には横方向のケズリが施されている。 (玉木)



第51図 遺構に伴わない遺物

第5章 A 2区の調査



第52図 A 2区遺構配置図

第1節 調査の概要

A 2区は、A 1区から延びる丘陵上に位置しており、比較的平坦な地形となっている。調査区の南側は圃場整備による削平を受けており、また、南端部には造成時に埋められた水路が東西に流れている。層序はA 1区と共通しており、現代の水田層、クロボク、漸移層、ソフトローム層となっている。遺構の検出はA 1区と同様、漸移層およびソフトローム層で行った。

遺構は掘立柱建物3棟、土坑2基、区画溝3条、溝18条、柱穴を確認した。このうち、掘立柱建物1はその東西に庇をもつものであり、確認された柱穴の上層から常滑焼の甕が出土している。また、この掘立柱建物の東側には2棟の掘立柱建物が確認されている。これらの掘立柱建物は、主軸方向がほぼ同じとなっており、関連性が窺われる。

この掘立柱建物群をとりまくようにコの字状を呈する溝が確認されている。他の溝と性格が異なると考えたことから、ここでは区画溝として報告した。これと同等の形状を示すものがこの他に調査区内で2条確認されている。これらの区画溝は掘立柱建物群の主軸方向と平行または直交しており、一連のものであった可能性が高い。区画溝によって区画された場所で柱穴を確認しているが、掘立柱建物としてまとまるものが少なく、遺物が出土したものに関して報告を行った。

この他の遺構として溝があるが、これらはクロボク中から掘り込まれているものと考えられる。しかし、層位を意識した調査をすることが困難であり、また、埋土の状況も類似し、遺物が出土していないことから時期・性格などを判断することができなかった。
(長尾)

第2節 遺構と遺物

1. 掘立柱建物

掘立柱建物1（第53・54図、P L. 3）

D 2・3グリッド中に位置している。5間×1間の掘立柱建物であり、規模は桁行12.7m、梁間は最大で4.7mを測る。主軸方向はN-18°-Eである。柱の掘り方は円形を呈しており、径24~44cm、検出面からの深さ31~44cmを測る。このうち、P 15・17・22・25・26で柱痕が確認でき、その規模は24cmを測る。

また、建物の両側面には庇がついており、その東西で柱穴の数が異なっている。東側の柱穴は6基確認されており、その配置は建物の柱と対応するが、建物の中央にあたる部分に柱穴P 13が確認されており、その点が異なる。掘り方は円形を呈しており、規模は径26~38cm、検出面からの深さ22~44cmを測り、建物の柱穴よりも小さくなっている。柱間は145~231cmであり、建物との距離は85cmを測る。

西側の柱穴は東側よりも1基少ない5基確認されており、その配置は建物や東側の庇と対応している。東側と同様、建物の中央にあたる部分において柱穴P 12が確認されている。掘り方は円形を呈しており、規模は径22~26cm、検出面からの深さ28~46cmを測り、東側に比べ小さくなっている。柱間は155~241cmを測る。建物との距離は101~106cmとなっており、東側に比べわずかに広くなる。

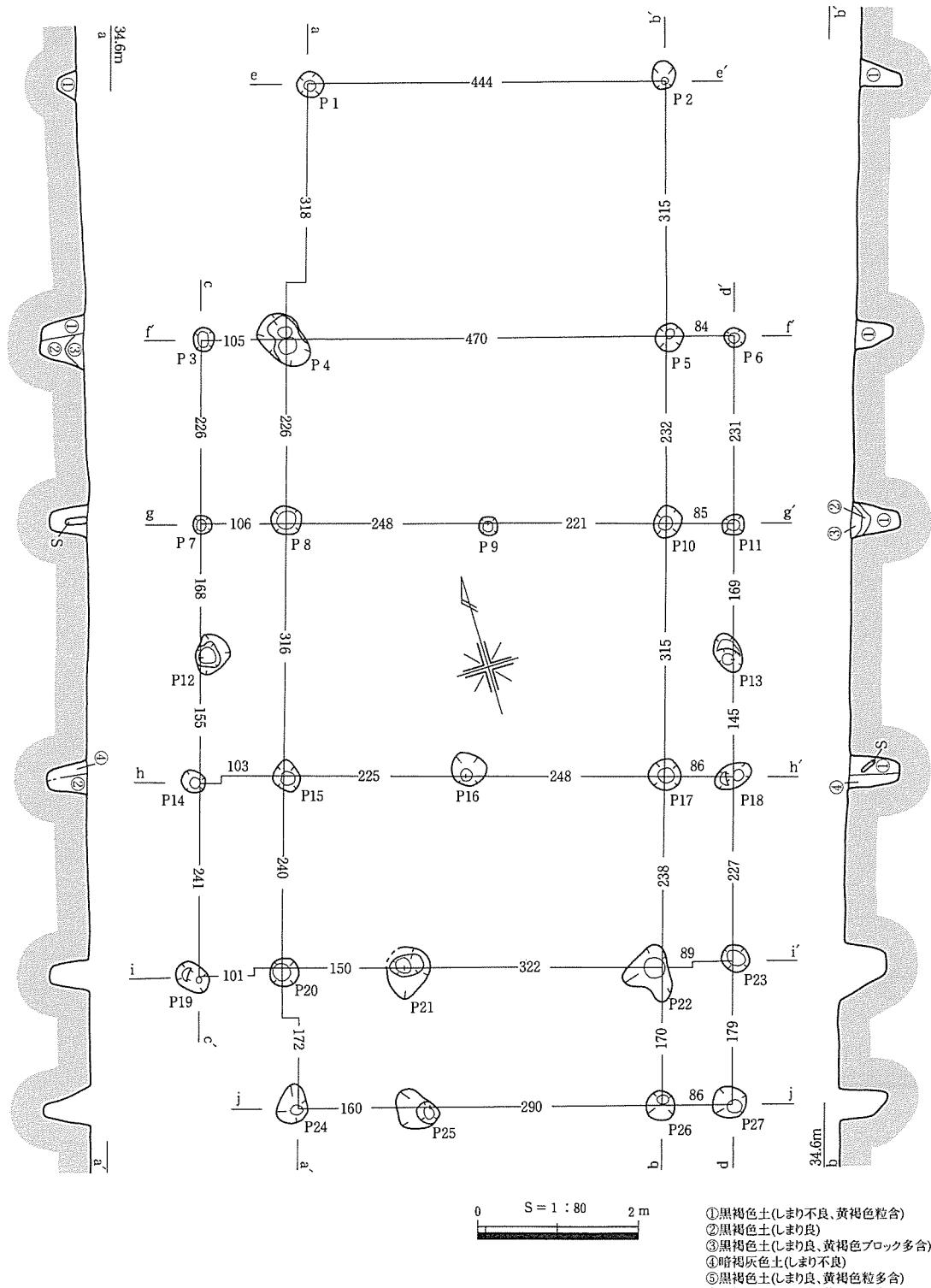
遺物はP 18から90が出土している。90は常滑焼の甕である。時期は特定し難いが、遺物や周囲の状況から判断して、14世紀の範疇に収まるものと考えられる。
(長尾)

掘立柱建物2（第55図）

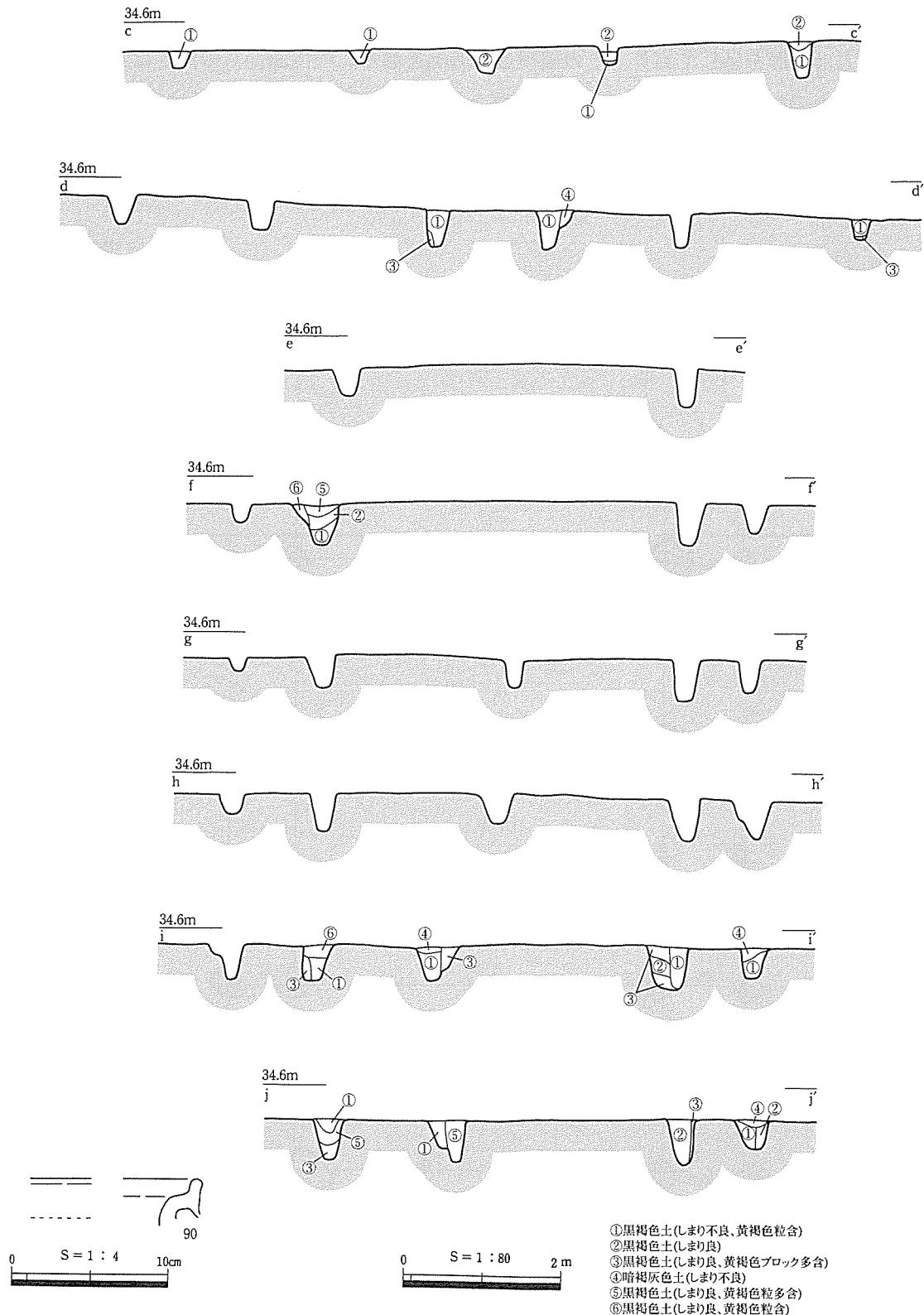
C 2・D 2グリッド中に位置しており、掘立柱建物1の東側約2mの場所に近接している。また、

掘立柱建物3と重複している。3間×1間の掘立柱建物であり、規模は桁行701cm、梁間374cmを測る。主軸方向は掘立柱建物1と同じN-18°-Eであり、関連性が窺われる。

柱穴の掘り方は円形を呈しており、その規模は径30cmを測る。検出面からの深さは29~58cmを測り、P4・8が他のものに対して浅くなる。確認された柱穴のうちP4~6、8では柱痕が認められ、その規模は径25cmを測る。柱間は216~256cmを測る。遺物は出土しておらず時期の特定が困難であるが、掘立柱建物1と主軸方向が同じことから、これとほぼ同一の時期に属する可能性が高い。(長尾)



第53図 掘立柱建物1

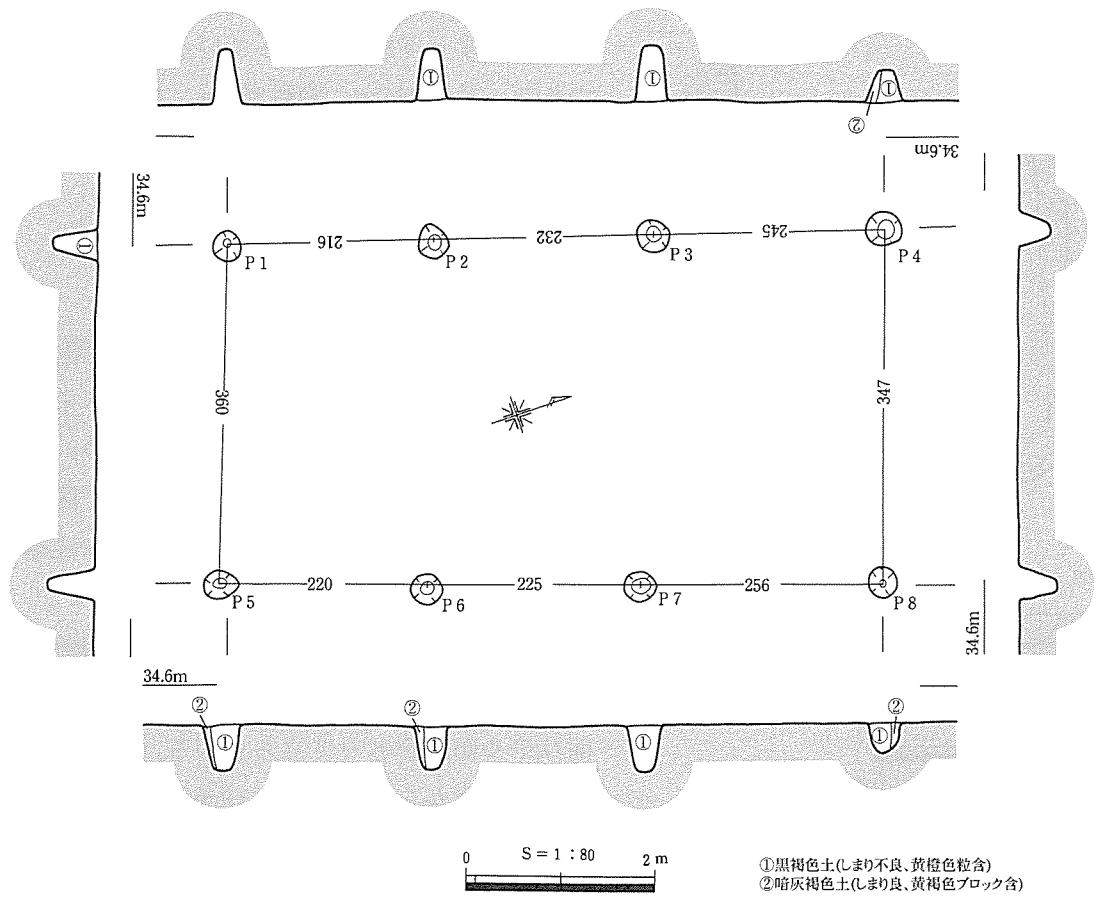


第54図 掘立柱建物 1・出土遺物

掘立柱建物 3 (第56図)

D2グリッド中に位置している。掘立柱建物 1 の東側に近接しており、掘立柱建物 2 と重複している。柱穴の切り合いが認められず、新旧関係は不明である。

2間×2間の掘立柱建物であり、桁行386cm、梁間314cmを測る。主軸方向はN—16°—Eであり、



第55図 掘立柱建物2

前述した掘立柱建物1・2とほぼ同じである。柱穴の掘り方は円形ないしは橢円形を呈しており、規模は13～36cm、検出面からの深さ18～38cmを測る。遺物は出土しておらず時期の特定は困難であるが、掘立柱建物1・2との関連性が窺え、それに近い時期にあったものと考えられる。

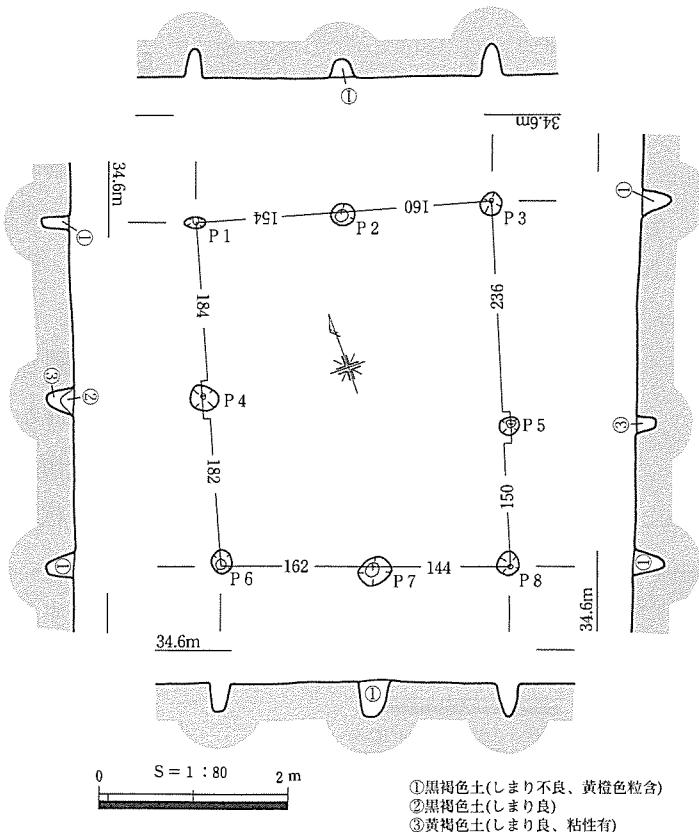
(長尾)

2. 土坑

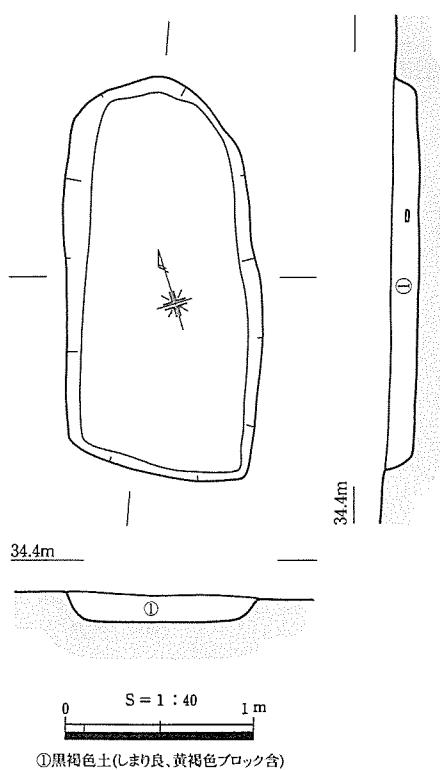
土坑9（第57図）

D2グリッド中に位置しており、掘立柱建物2・3と重複する。平面形は長方形を呈しており、規模は長軸204cm、短軸102cm、検出面からの深さ15cmを測る。底面は平坦であり、壁面はやや傾斜して立ち上がる。遺物は出土していない。

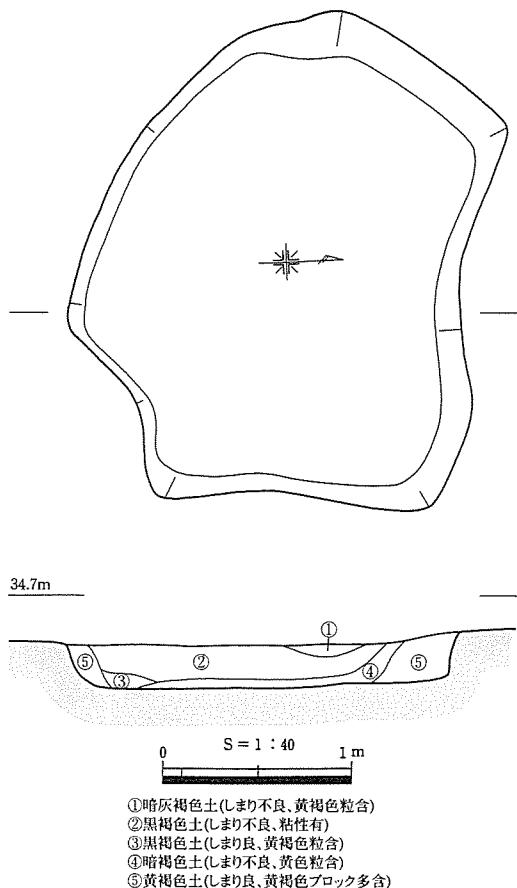
(長尾)



第56図 掘立柱建物3



第57図 土坑9



第58図 土坑10

土坑10 (第58図、P L.3)

F 2 グリッド中に位置している。平面形は不整形であり、長軸265cm、短軸207cm、検出面からの深さ27cmを測る。底面はほぼ平坦であり、壁面がやや傾斜して立ち上がる。遺物は出土していない。(長尾)

3. 区画溝

区画溝1 (第59図、P L.3)

調査区北東側、B 4・5 グリッド中に位置している。西側は調査区境となっており、遺構の大半が調査区外へ延びているものと考える。このため、全体の形状・規模は不明である。また、この溝で区画した範囲において柱穴を確認しているが、掘立柱建物としてまとまるものはなかった。

溝は東西方向から北東一南西方向へ屈曲するL字状を呈している。底面はほぼ平坦となっており、壁面はやや傾斜をもって立ち上がる。規模は幅20~46cm、検出面からの深さ10~30cmを測り、検出した長さは南北7.6m、東西9.4mである。埋土は最大で3層に分層でき、このうち第3層は黒褐色砂質土となっており、砂の堆積が認められ、流水の可能性を考えられる。遺物は出土していない。(長尾)

区画溝2 (第59図、P L.3)

A 2・B 1~2 グリッド中に位置しており、区画溝1から西側へ約20mの場所にあたる。また、一部が溝2によって切られている。溝の北側は調査区外へ延びており、東側は後世の攪乱によって消失している。このため、全体の形状・規模は不明である。また、この溝で区画した範囲において柱穴を確認しているが、掘立柱建物としてまとまるものはなかった。

溝は南東一北西方向から南西一北東方向へ屈曲するL字状を呈している。南側が一段深く掘り下げられており、南西隅では2段に掘り下げた状況を顕著に確認することができた。規模は南側で幅50~62cm、深さ20cmを測り、13.5mを検出している。西側では幅50~62cm、深さ10cmを測り、14mを検出している。遺物は出土していない。(長尾)

区画溝3 (第59図、P L.3)

区画溝2の南側、E 2・3 グリッド中に位置して

いる。掘立柱建物1～3の南側で検出しており、これらを区画していた溝であったものと考えられる。

形状はコの字状を呈しており、区画溝2と同様、南側が一段深く掘り下げられており、南西隅では2段に掘り下げた状況を顕著に確認できた。また、南東隅では区画溝1と同様の構造を呈しており、L字状に屈曲している。規模は幅26～82cm、深さ4～28cmを測り、東西で13.5mを検出している。

区画溝1・2とほぼ同じ方向を向
き、また、構造も類似していること
から関連性が認められ、ほぼ同じ時
期の所産であった可能性がある。遺
物は出土していないが、この区画内
で確認された掘立柱建物と同一の時
期であったと考えられる。（長尾）

4. 溝

溝1（第60図）

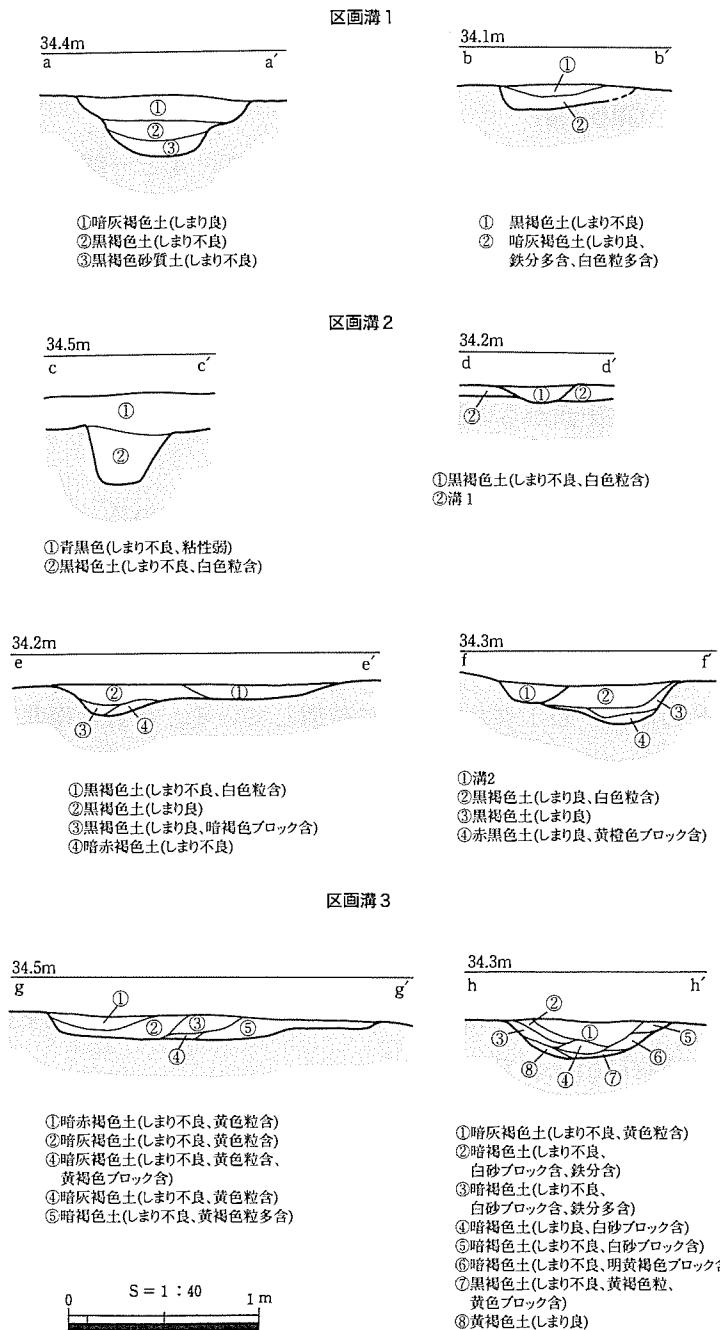
調査区北側に位置しており、区画溝2によって切られている。東西方向へ直線的に延びており、断面はU字状を呈している。規模は幅15~40cm、検出面からの深さ12cmを測り、21mを検出している。埋土は黒褐色土の1層であり、砂は含まれておらず、流水の痕跡は確認できなかつた。

溝2（第61図）

B1・2グリッドに位置しており、区画溝2を切っている。南東一北西方向へ直線的に伸びている。断面形は逆台形であり、規模は幅17~23cm、深さ20cmを測る。遺物は出土していない。(長尾)
溝3・4(第62図)

溝2の南側約1mに位置している。南東一北西方向へ直線的に延びており、溝2と並行している。溝3・4は同じ方向へ重複して延びていることから、本来、同一の溝であった可能性も考えられるが、本報告では、断面形態が異なり、さらに堆積状況から溝3の埋没後、溝4の埋土が堆積したものと考えられることから2条の溝とした。

溝3は断面形がUの字状を呈しており、規模は幅25cm、検出面からの深さ60cmを測り、38.5mを検



第59図 区画溝1～3
ふらず 時期の特定はできない (長尾)

出した。溝4は断面形が逆台形を呈しており、溝3に比べ幅が広く、浅い。規模は幅90cm、検出面からの深さ40cmを測り、33mを検出した。遺物は出土していない。
(長尾)

溝5・6 (第63図)

B 2・3グリッド中に位置しており、溝3・4と一部が重複する。たわみ状を呈しており、規模は溝5で幅56cm、深さ10cm、溝6で幅32cm、深さ6cmを測る。遺物は出土していない。
(長尾)

溝7 (第63図)

調査区東側に位置しており、溝2に切られており、溝3・4を切っている。また、北側は搅乱によって削平されている。北東一南西方向へ直線的に延びており、断面形はUの字状を呈している。規模は幅65cm、検出面からの深さ15cmを測り、31mを検出した。遺物は出土していない。
(長尾)

溝8 (第63図)

溝7の東側に位置しており、溝3・4を切っている。東端は調査区外へ延びている。南西一北東方向から北西一南東方向へ屈曲し、L字状を呈している。断面形は皿状を呈しており、規模は幅40cm、検出面からの深さ5cmを測る。形状から区画溝の可能性もあるが判然としない。
(長尾)

溝9~13 (第63図)

溝8の南側、D 1グリッド中に位置している。溝11は南北から東西方向へ屈曲し、L字状を呈しており、溝9・10・13を切っている。他の溝はたわみ状を呈しており、平面形は不整形となっている。遺物は出土していない。
(長尾)

溝14・15 (第63図)

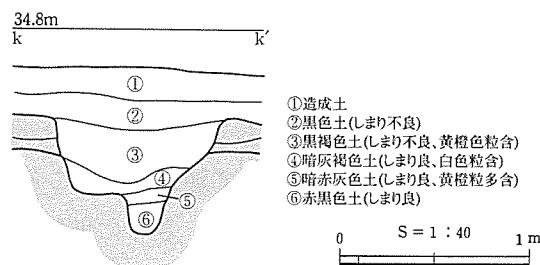
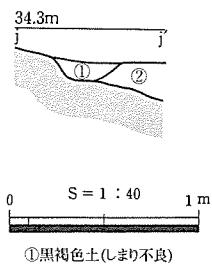
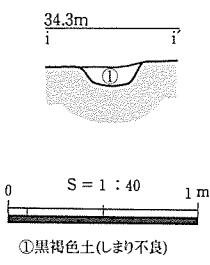
E 1グリッド中に位置している。溝14は東西方向へ直線的に延びており、西側は溝7に切られている。また、東端は調査区外へ延びている。断面形は逆台形を呈しており、規模は幅80cm、検出面からの深さ30cmを測る。溝15はコの字状を呈し、断面形は皿状を呈している。規模は幅70cm、深さ10cmを測る。遺物は出土していない。
(長尾)

溝16 (第63図)

E 1グリッド中に位置しており、溝7に近接している。北東一南西方向へ直線的に延び、溝7と並行する。断面は皿状であり、規模は幅33cm、深さ約5cmを測る。遺物は出土していない。
(長尾)

溝17 (第63図)

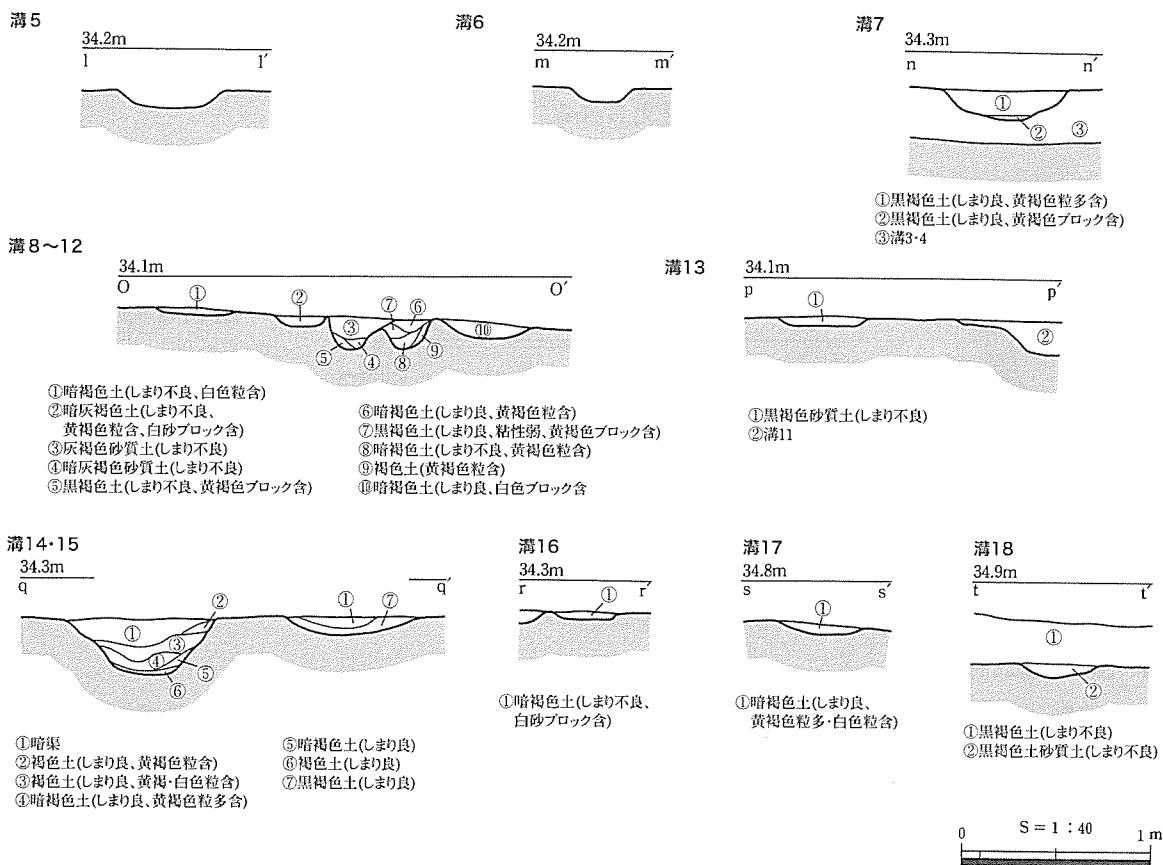
E 2・3グリッド中に位置している。東西方向へ直線的に延びており、区画溝3と並行している。断面形は皿状であり、規模は幅45cm、検出面からの深さ10cmを測る。遺物は出土していない。
(長尾)



第60図 溝1

第61図 溝2

第62図 溝3・4



第63図 溝5～18

溝18（第63図）

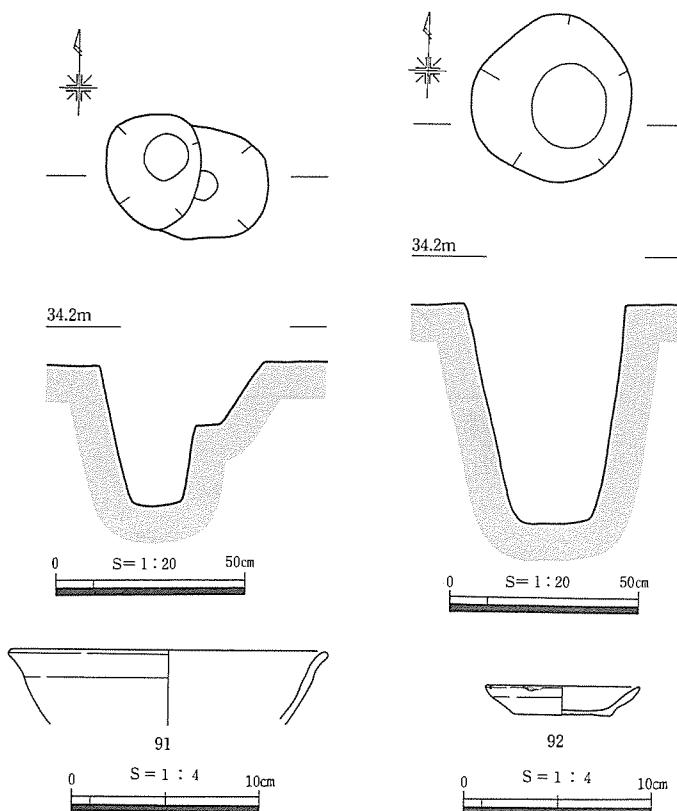
道を挟んだ西側の調査区のD 9 グリッド中に位置している。漸移層まで掘り込んで造られているが、浅い掘り込みのため平面を捉えることができず、調査区西壁での確認となつた。

断面形は皿状を呈しており、規模は幅40cm、深さ8cmを測る。埋土は淡黒褐色砂質土の1層であり、砂の堆積が認められ、流水のあったことが窺える。遺物は出土していない。
(長尾)

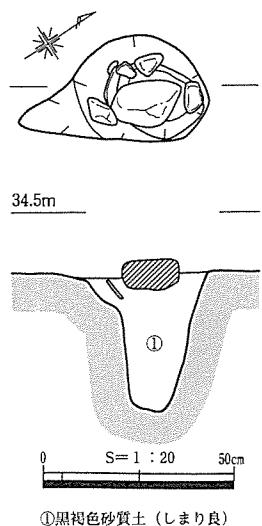
5. 柱穴

柱穴2（第64図、P L.8.）

A 1 グリッド中、区画溝2の区画内に位置しており、2基の柱穴が重複している。平面形は不整形な円形を呈しており、規模は東側で径28cm、検出面からの深さ17cmを測る。西側は径24～30cm、検出面からの深さ37cmを測る。周囲にはこれとほぼ同じ規



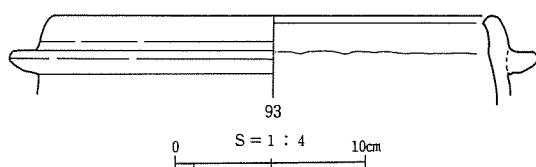
第64図 柱穴2・出土遺物 第65図 柱穴3・出土遺物



模をもつ柱穴が認められるが、掘立柱建物としてまとまらなかった。遺物は埋土中から91が出土している。91は青磁碗であり、時期は13世紀後半から14世紀前半と考えられる。
(長尾)

柱穴3 (第65図、PL.8)

A 1 グリッド中、柱穴2の南側に位置している。平面形は円形を呈しており、規模は径43cm、検出面からの深さ58cmを測る。



遺物は92が出土している。92は灯明皿であり、口縁端部には煤が付着している。口縁部はやや内湾しており、端部は尖る。器高が低く、内・外面にはナデが施される。時期は中世と考えられる。
(長尾)

柱穴4 (第66図、PL.8)

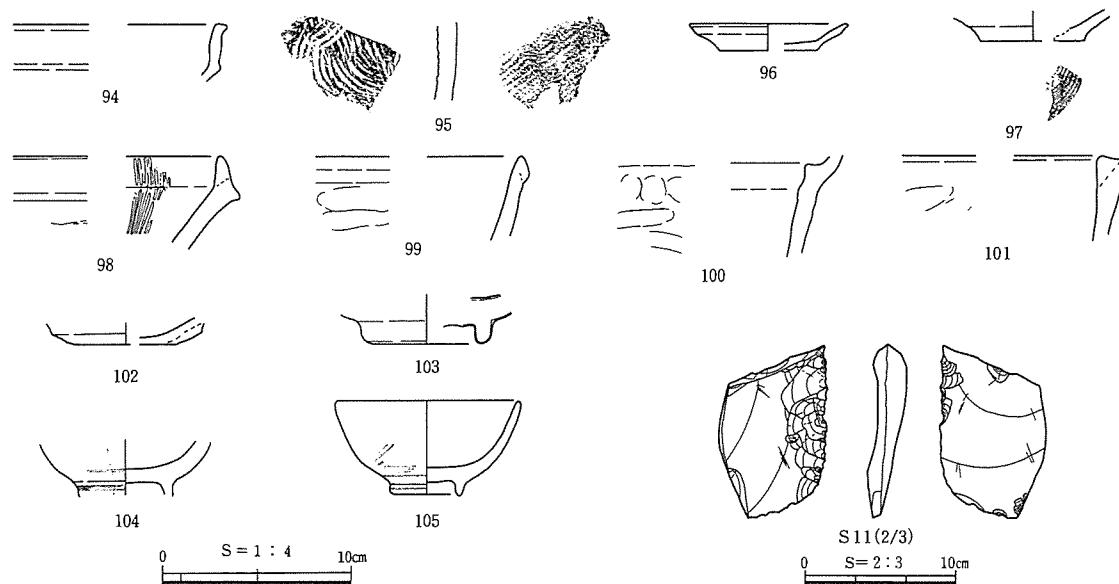
溝18の東側、D 8 グリッド中に位置している。上面には1辺15cmを測る石が置かれており、その下から93が出土している。柱穴の平面形は不整形な円形を呈しており、規模は径35cm、検出面からの深さ36cmを測る。時期は中世と考えられる。
(長尾)

6. 遺構に伴わない遺物 (第67図、PL.8・10)

クロボクである黒褐色土中および造成土中から縄文時代、古墳時代から近世の遺物が出土している。S11は黒曜石を素材とするスクレイパーであり、時期は縄文時代と考えられる。

94は複合口縁をもつ甕であり、口縁端部に平坦面をもつ。時期は古墳時代中期と考えられる。95は須恵器の甕である。外面はタタキ後ハケメを施し、内面は同心円の当て具痕が残る。

96・97・102は皿である。96の底面には静止糸切り、97には回転糸切り痕が認められる。98は備前焼の擂鉢、99は鉢、100は鍋、101は盤、103は青磁碗であり、中世に属するものと考えられる。104・105は碗であり、近世のものと考えられる。
(長尾)

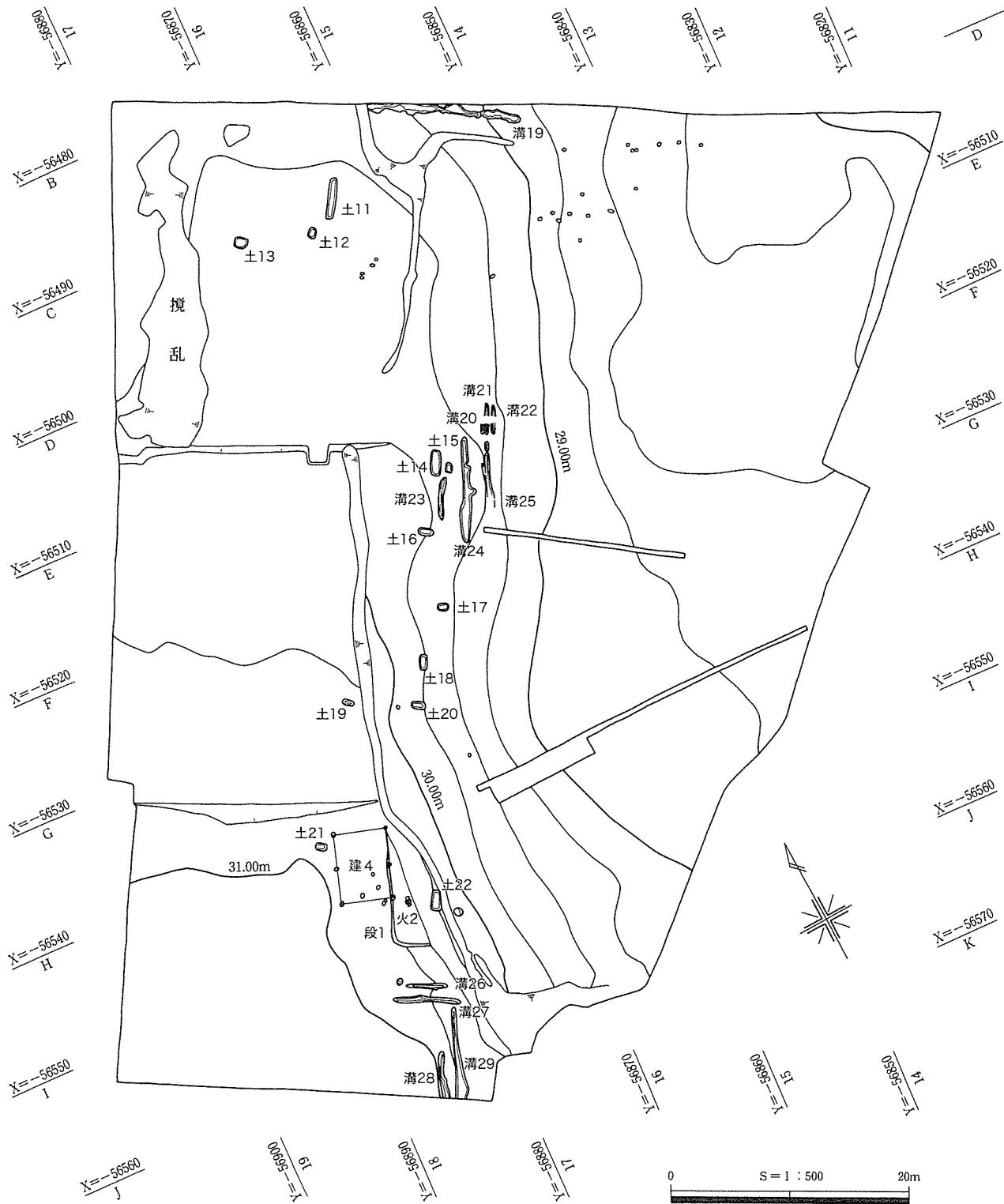


第67図 遺構に伴わない遺物

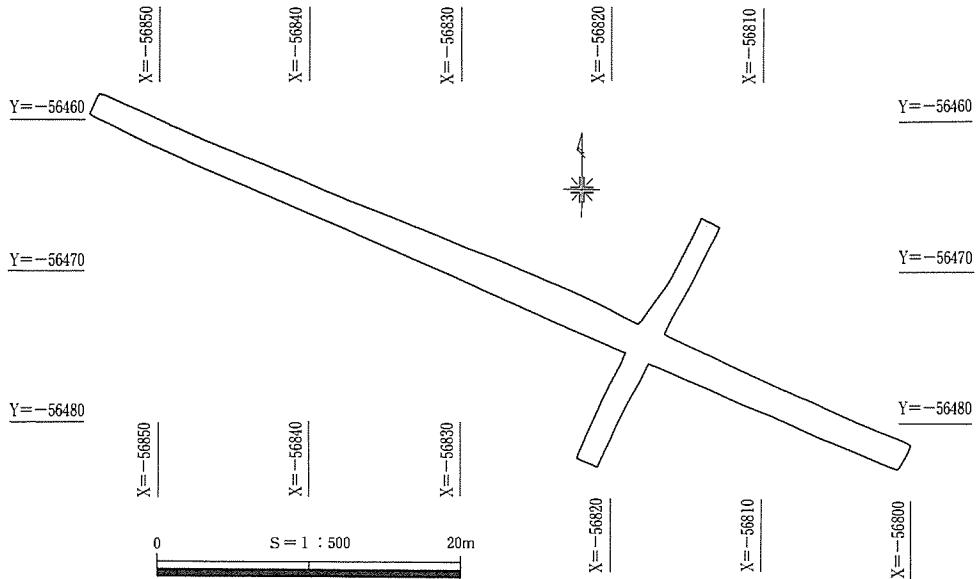
第6章 B区の調査

第1節 調査の概要

B1区はA区から続く丘陵の東斜面に位置している。調査区の西側は圃場整備による削平を受けて



第68図 B1区遺構配置図



第69図 B2区調査範囲図

おり確認できた遺構はわずかであった。また、調査区東側は谷部にあたり、ロームの再堆積によるものと考えられる白色粘質土の堆積が認められ、その上面にはクロボクが厚く堆積していた。このクロボク中には植物に起因する酸化鉄の塊を多く含む箇所を確認しており、一定期間この谷部が湿地であったことが窺える。ここでは遺構・遺物を確認していない。

B1区において、遺構が確認された部分は標高29~31mの範囲であり、掘立柱建物1棟、段状遺構1基、土坑12基、火葬墓1基、溝11条が確認された。掘立柱建物はA2区のものと主軸方向がほぼ同じである。また、この他の遺構に関しても掘立柱建物の主軸方向と平行ないしは直交しており、規則性が認められる。溝以外からは遺物がほとんど出土しておらず、時期の詳細は不明であるが、中世の範疇に収まるのではないかと思われ、A2区と関連したものであった可能性が推察される。

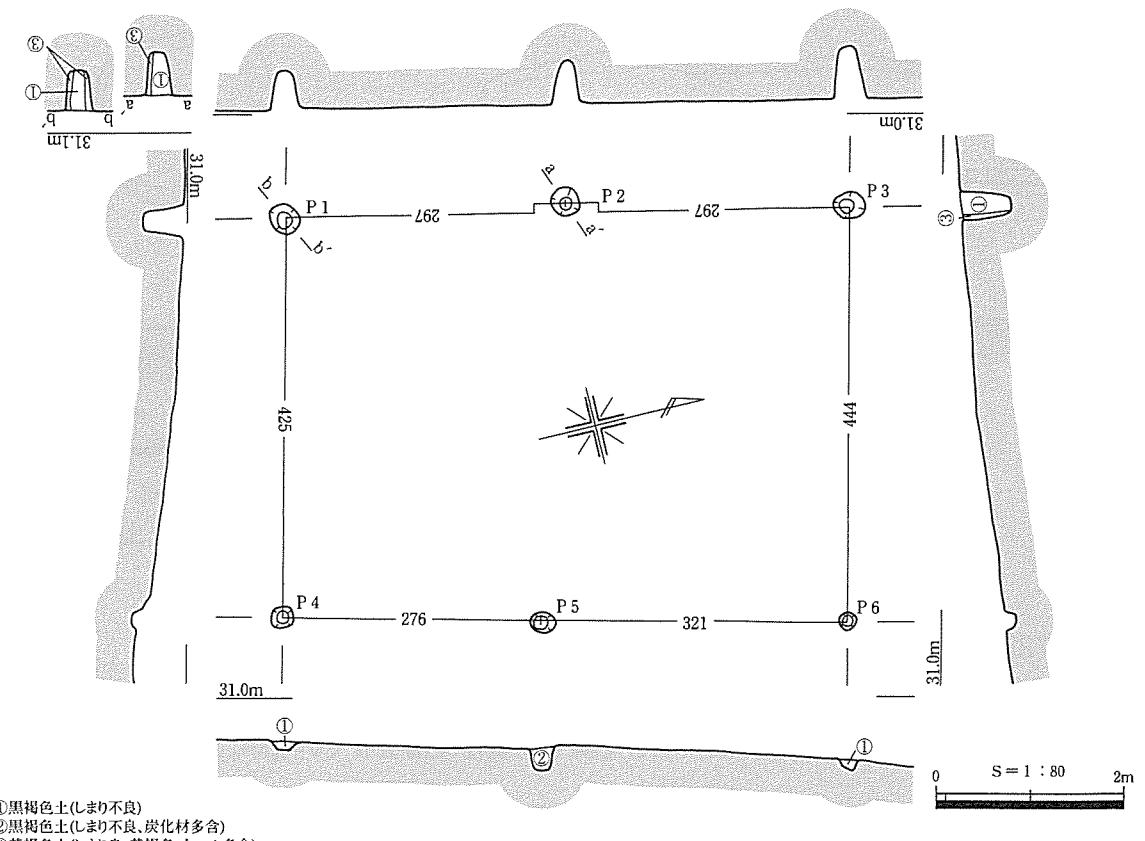
B2区はB1区の北側にあたり、A区から続く丘陵の東斜面に位置しており、圃場整備がなされているが、削平を受けた部分は少なく、なだらかな傾斜地となっている。調査の結果、この地区では遺構を確認することができず、また、遺物もクロボク中から須恵器や土師器が数点認められたのみであった。このため、トレンチ調査でこの地区の調査は終了した。
(玉木)

第2節 遺構と遺物

1. 掘立柱建物

掘立柱建物4 (第70図、P.L.4)

H17グリッド中に位置しており、緩斜面上に立地している。東側は後述する段状遺構1によって切られており残りが悪い。2間×1間の掘立柱建物であり、平面形は長方形を呈している。規模は桁行597cm、梁間444cm、面積26.5m²を測る。梁間が長く、中間に柱があった可能性がある。堀り方は円形を呈しており、このうちP1~3では柱痕が確認された。柱痕の平面形は円形を呈しており、径20cmを測る。主軸方向はN-12°-Eであり、A2区の掘立柱建物とほぼ同じとなっており注目される。土器は出土していないが、P5から炭が出土している。放射性炭素年代測定を行ったところ、890±30~950±30BPであった (第9章)。
(玉木)

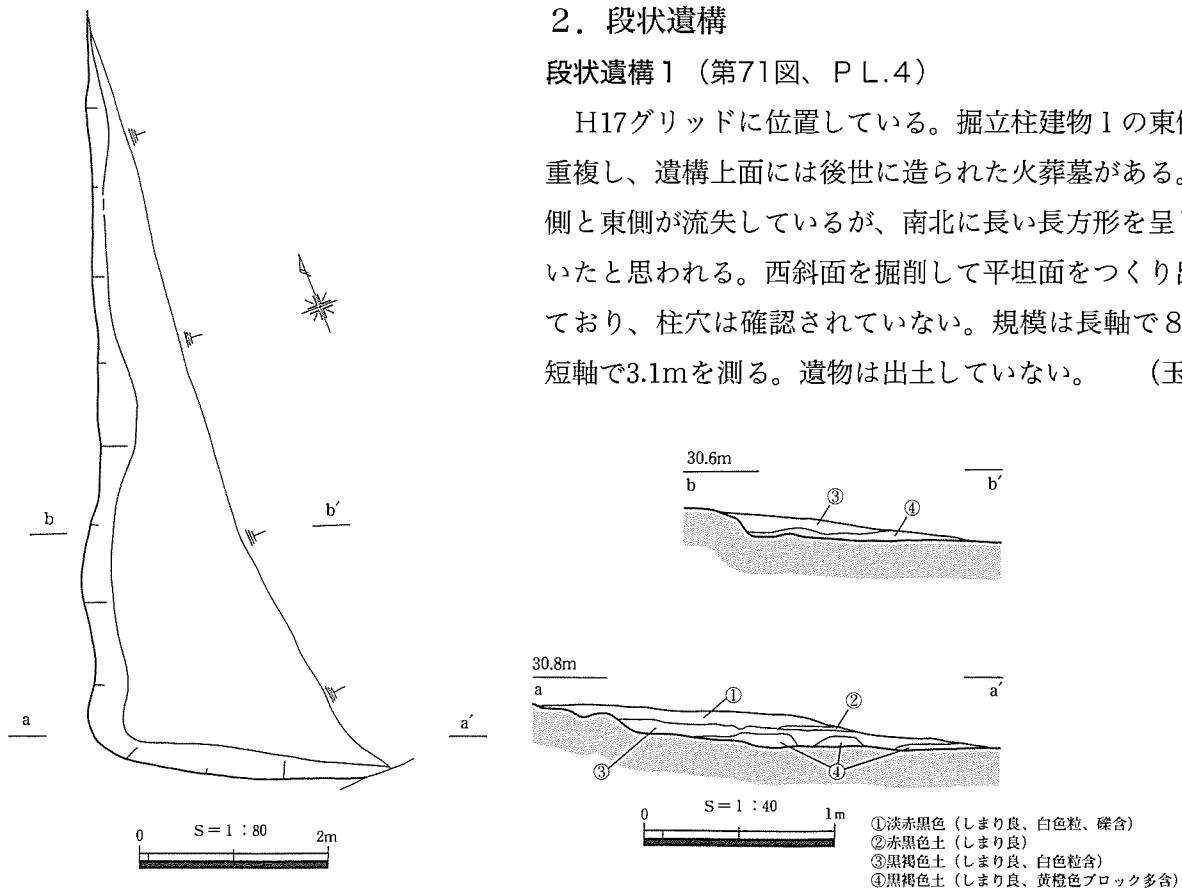


第70図 掘立柱建物4

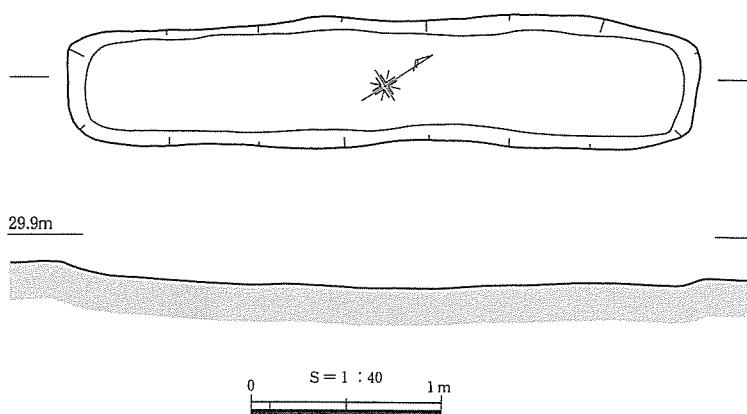
2. 段状遺構

段状遺構1（第71図、P.L.4）

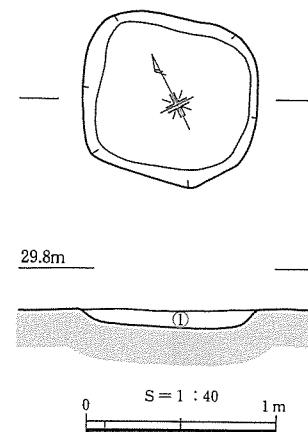
H17グリッドに位置している。掘立柱建物Iの東側と重複し、遺構上面には後世に造られた火葬墓がある。北側と東側が流失しているが、南北に長い長方形を呈していたと思われる。西斜面を掘削して平坦面をつくり出しておらず、柱穴は確認されていない。規模は長軸で8m、短軸で3.1mを測る。遺物は出土していない。（玉木）



第71図 段状遺構1



第72図 土坑11



① 黒褐色土(しまり良、褐灰色・黄橙色ブロック含)

第73図 土坑12

3. 土坑

土坑11（第72図）

調査区北側、C15グリッド中に位置している。平面形は細長く、溝状を呈している。規模は長軸334cm、短軸65cmを測る。長軸方向はN—34°—Eを向く。遺物は出土していない。
（玉木）

土坑12（第73図）

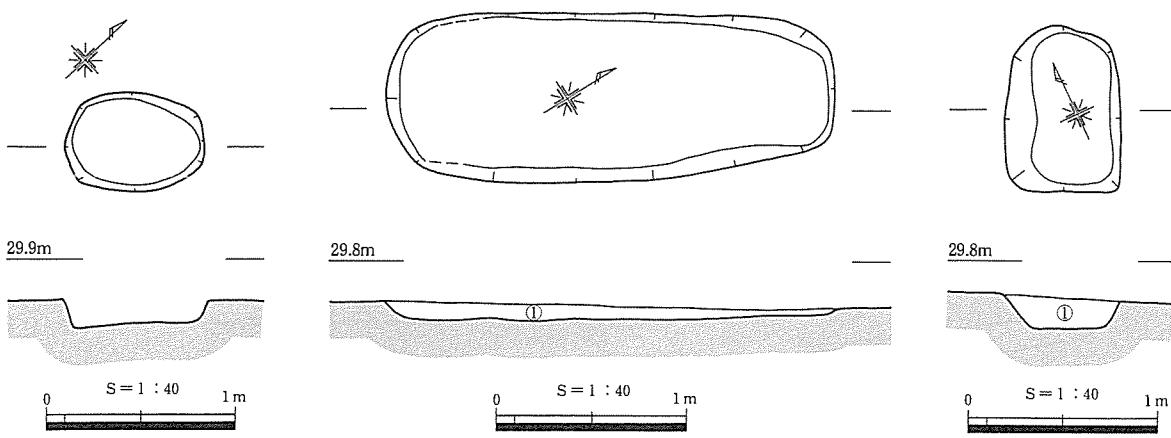
土坑11の西側、C16グリッド中に位置している。圃場整備による削平を受けおり残りが悪い。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は径98cm、検出面からの深さ10cmを測る。底面は皿状を呈している。遺物は出土していない。
（玉木）

土坑13（第74図）

土坑11の西側に近接している。平面形は橢円形を呈し、規模は長軸74cm、短軸54cm、深さ16cmを測る。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。
（玉木）

土坑14（第75図）

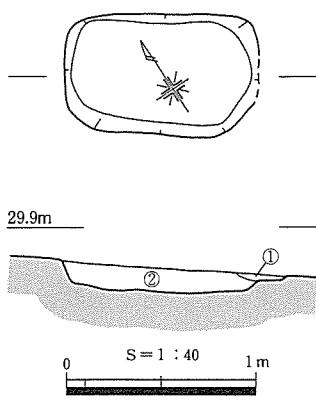
調査区中央、E15グリッド中に位置している。平面形は隅丸の長方形を呈しており、底面はほぼ平坦となっている。規模は長軸248cm、短軸90cm、検出面からの深さ19cmを測る。長軸方向はN—30°—Eを向く。形状から墓の可能性が考えられる。遺物は出土していない。
（玉木）



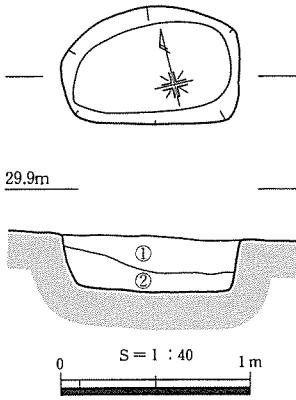
第74図 土坑13

第75図 土坑14

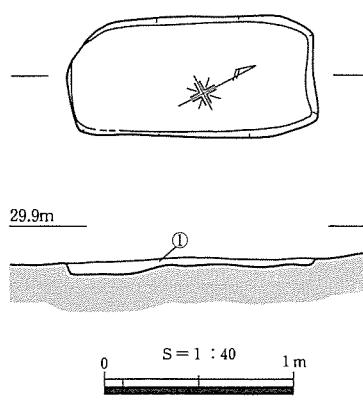
第76図 土坑15



第77図 土坑16



第78図 土坑17



第79図 土坑18

土坑15 (第76図、P L. 4)

土坑14の東側に近接している。平面形は北側が弧の字状を描く隅丸の長方形を呈しており、規模は長軸87cm、短軸60cm、検出面からの深さ15cmを測る。底面は平坦であり、壁面はやや傾斜をもって立ち上がる。長軸方向はN—24°—Eを向く。形状から墓の可能性が考えられる。
(玉木)

土坑16 (第77図)

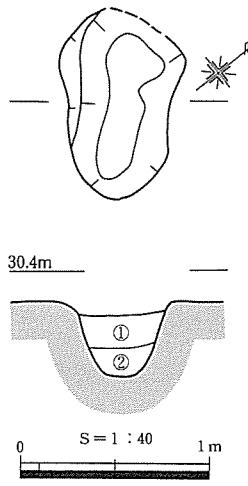
F 15グリッド中に位置している。平面形は隅丸の長方形を呈しており、その規模は長軸106cm、短軸長64cm、検出面からの深さ12cmを測る。底面は平坦であり、壁面は垂直に立ち上がる。長軸方向はN—57°—Wを向く。形状から墓の可能性が考えられる。
(玉木)

土坑17 (第78図)

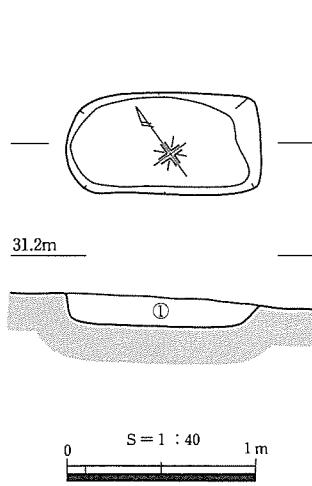
F 15グリッド中に位置している。平面形は北側が弧の字状を描く隅丸の方形を呈しており、その規模は長軸94cm、短軸62cm、検出面からの深さ26cmを測る。底面は平坦であり、壁面は垂直に立ち上がる。長軸方向はN—76°—Wを向く。形状から墓の可能性が考えられる。
(玉木)

土坑18 (第79図)

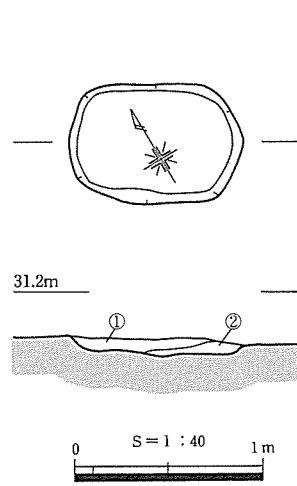
土坑17の東側、G 16グリッド中に位置している。平面形は隅丸の長方形を呈しており、底面は比較的平坦となっている。規模は長軸130cm、短軸65cm、検出面からの



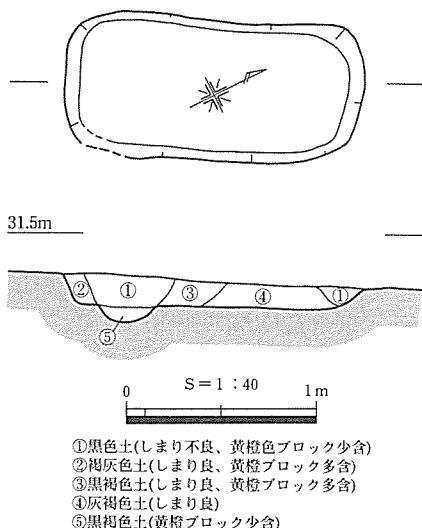
第80図 土坑19



第81図 土坑20



第82図 土坑21



第83図 土坑22

上がる。長軸方向はN—54°—Wを向く。形状から墓の可能性がある。遺物は出土していない。(玉木)
土坑21 (第82図)

掘立柱建物4の東側に近接している。圃場整備による削平を受けており残りが悪い。平面形は隅丸の長方形を呈しており、底面は平坦となっている。規模は長軸96cm、短軸63cmを測る。長軸方向はN—60°—Wを向く。遺物は出土していない。(玉木)

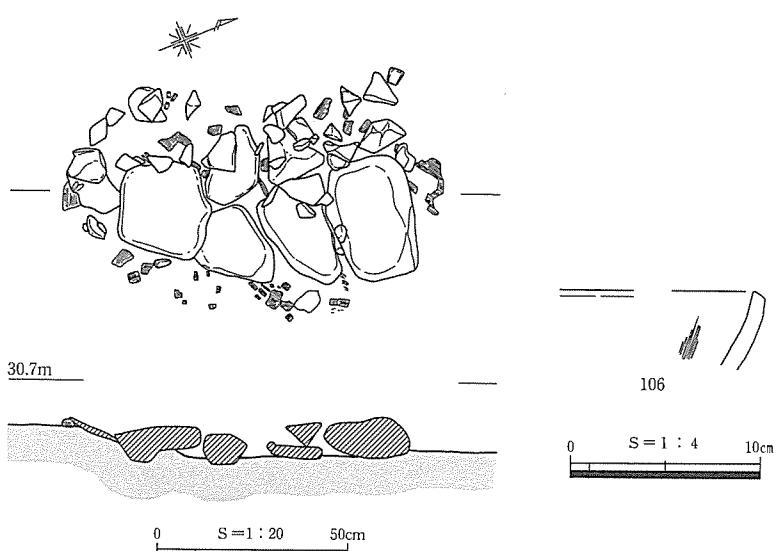
土坑22 (第83図)

段状遺構1の東側に位置している。平面形は隅丸の方形を呈しており、規模は長軸158cm、短軸76cm、検出面からの深さ12cmを測る。底面は平坦となっており、長軸方向はN—29°—Eを向く。形状から墓の可能性がある。遺物は出土していない。(玉木)

4. 墓

火葬墓2 (第84図、P L.4)

段状遺構1の直上に位置している。遺構は墓に使用されている石材の確認によってはじめて明かとなつた。クロボクである黒褐色土を掘り込んで造られたものと考えられるが、堀り方を確認することはできなかつた。底面は平坦となっており、そこには一辺20～30cmを測る扁平な石が5個敷かれており、その周囲には10cmほどの角礫が配されている。主軸はN—17°—Eを向く。敷かれた石の表面には火葬による脂肪分の付着が認められ、また、これらの周囲には炭や焼骨などが認められた。



第84図 火葬墓2・出土遺物

遺物は土師器が1点出土したのみである。時期は出土した炭の放射性炭素年代測定を行つた

ところ、 510 ± 50 BPであった（第9章）。

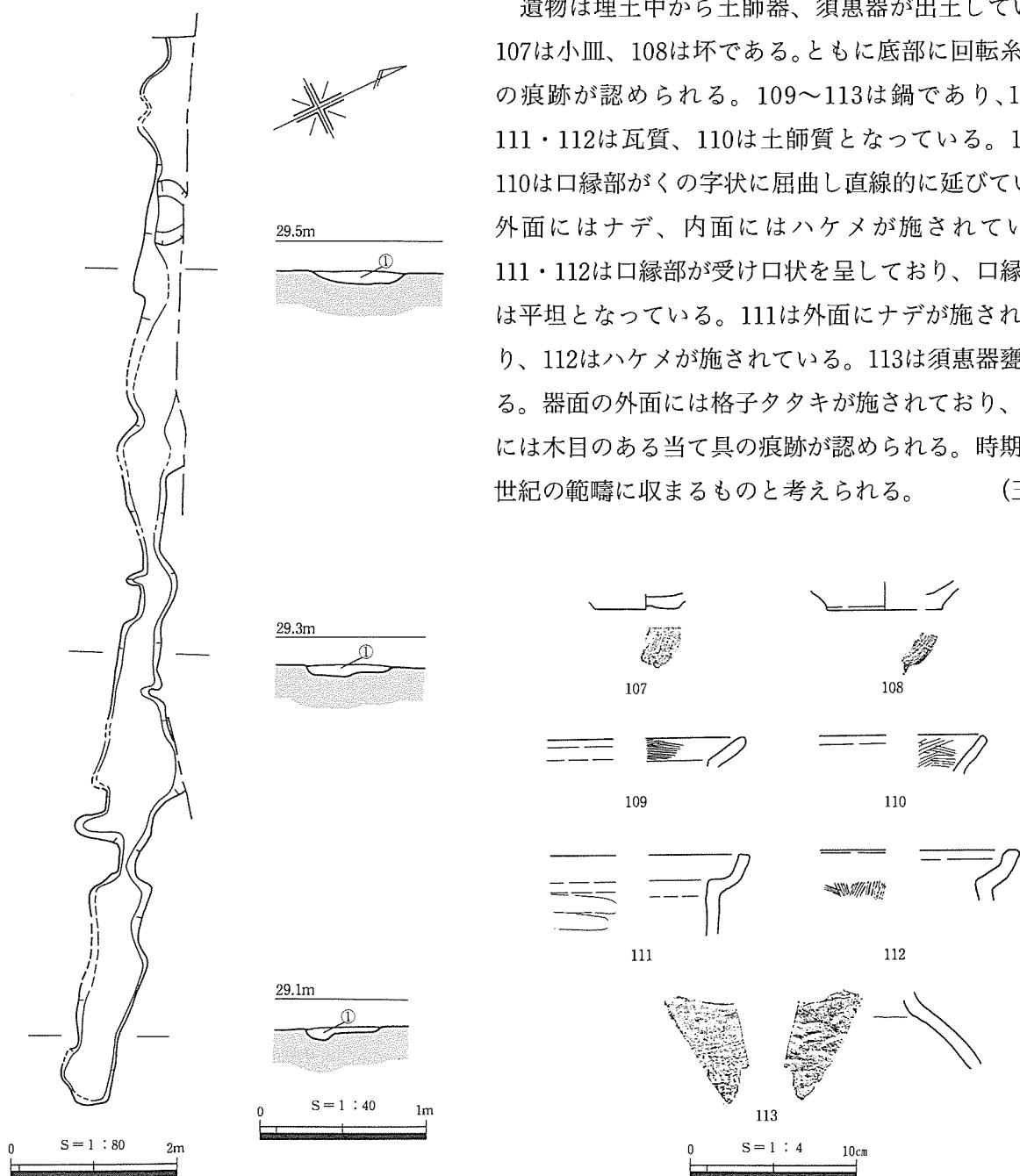
（玉木）

5. 溝

溝19（第85図、P.L.4）

調査区北側、B14グリッド中に位置しており、溝の北西側は調査区境となっている。北西—南東方向へ直線的に延びており、後述する溝26・27とほぼ並行している。圃場整備や近世以降の耕作によって削平されており残りが悪い。平面形は不整形となっており、底面には凹凸が認められる。規模は幅110cmを測り、全長13mほどを検出している。埋土は黒褐色土の1層であり、この層には炭の細片が若干含まれている。また、底面の窪みにおいて砂の堆積がわずかに確認されている。このため、この溝には流水があったものと推察される。

遺物は埋土中から土師器、須恵器が出土している。107は小皿、108は壺である。ともに底部に回転糸切りの痕跡が認められる。109～113は鍋であり、109・111・112は瓦質、110は土師質となっている。109・110は口縁部がくの字状に屈曲し直線的に延びている。外面にはナデ、内面にはハケメが施されている。111・112は口縁部が受け口状を呈しており、口縁端部は平坦となっている。111は外面にナデが施されており、112はハケメが施されている。113は須恵器甕である。器面の外面には格子タタキが施されており、内面には木目のある当て具の痕跡が認められる。時期は14世紀の範疇に収まるものと考えられる。（玉木）



第85図 溝19・出土遺物

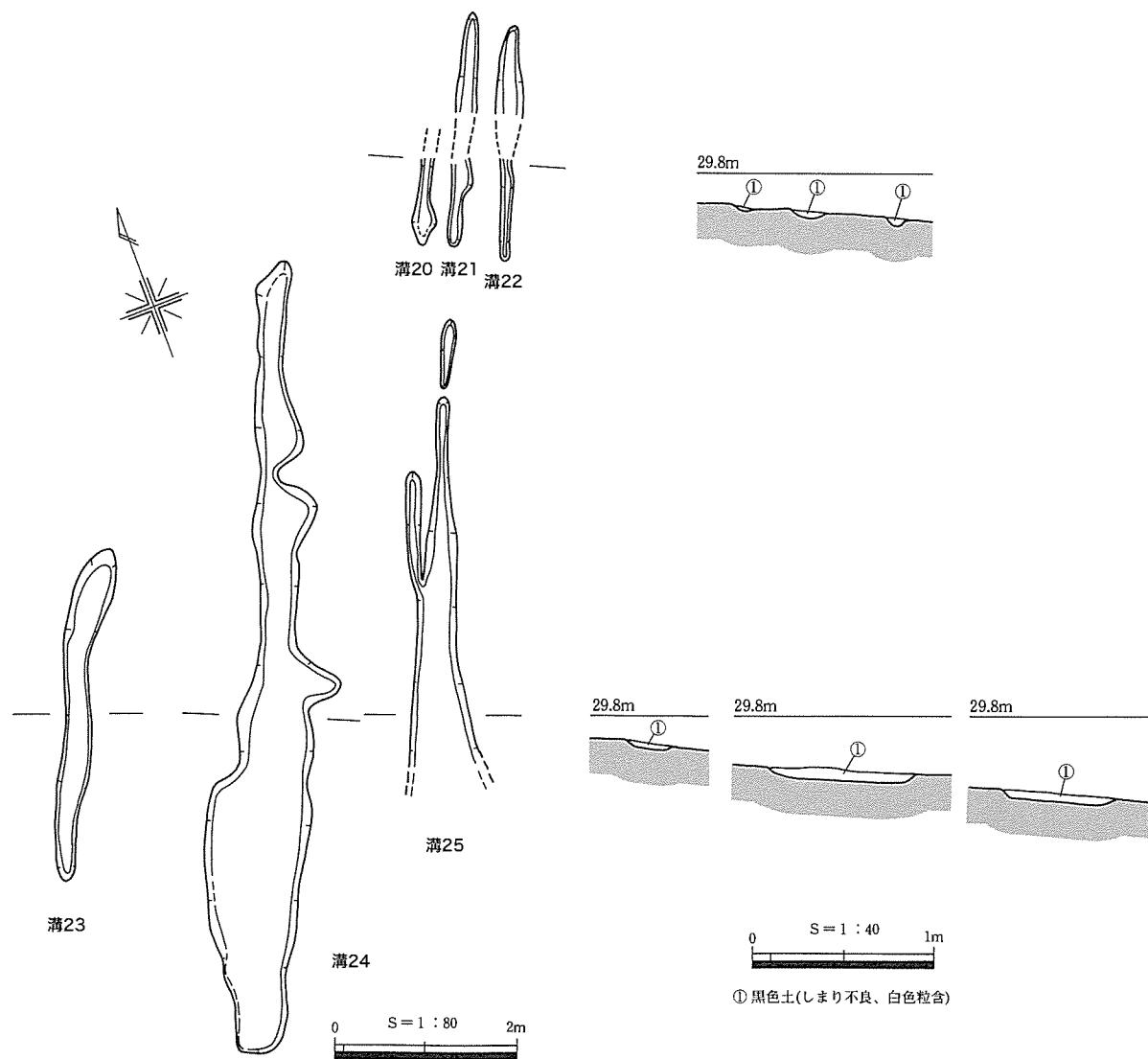
溝20～25（第86図）

調査区ほぼ中央のE15グリッド付近に位置している。上面は圃場整備や近世以降の耕作によって削平されており残りが悪い。溝は北東一南西方向へ直線的に延びており、前述した溝19とほぼ直交し、後述する溝28・29と並行する。規模は溝20で幅10cm、深さ4cm、溝21では幅20cm、深さ4cm、溝22では幅30cm、深さ6cm、溝23では幅25cm、深さ4cm、溝24では幅110cm、深さ8cm、溝25では幅70cm、深さ6cmを測る。このうち、溝25は中央付近で分岐している。遺構の位置関係から、溝20～22と同一のものであった可能性が考えられる。埋土は黒色土の1層であり、砂の堆積は認められない。遺物は出土していない。

（玉木）

溝26・27（第87図、P.L.8）

調査区南側、I17グリッド中に位置している。北西側は圃場整備により、南東側は暗渠によって消失していた。溝は北西一南東方向へ直線的に延びており、前述した溝19と並行している。溝19との距



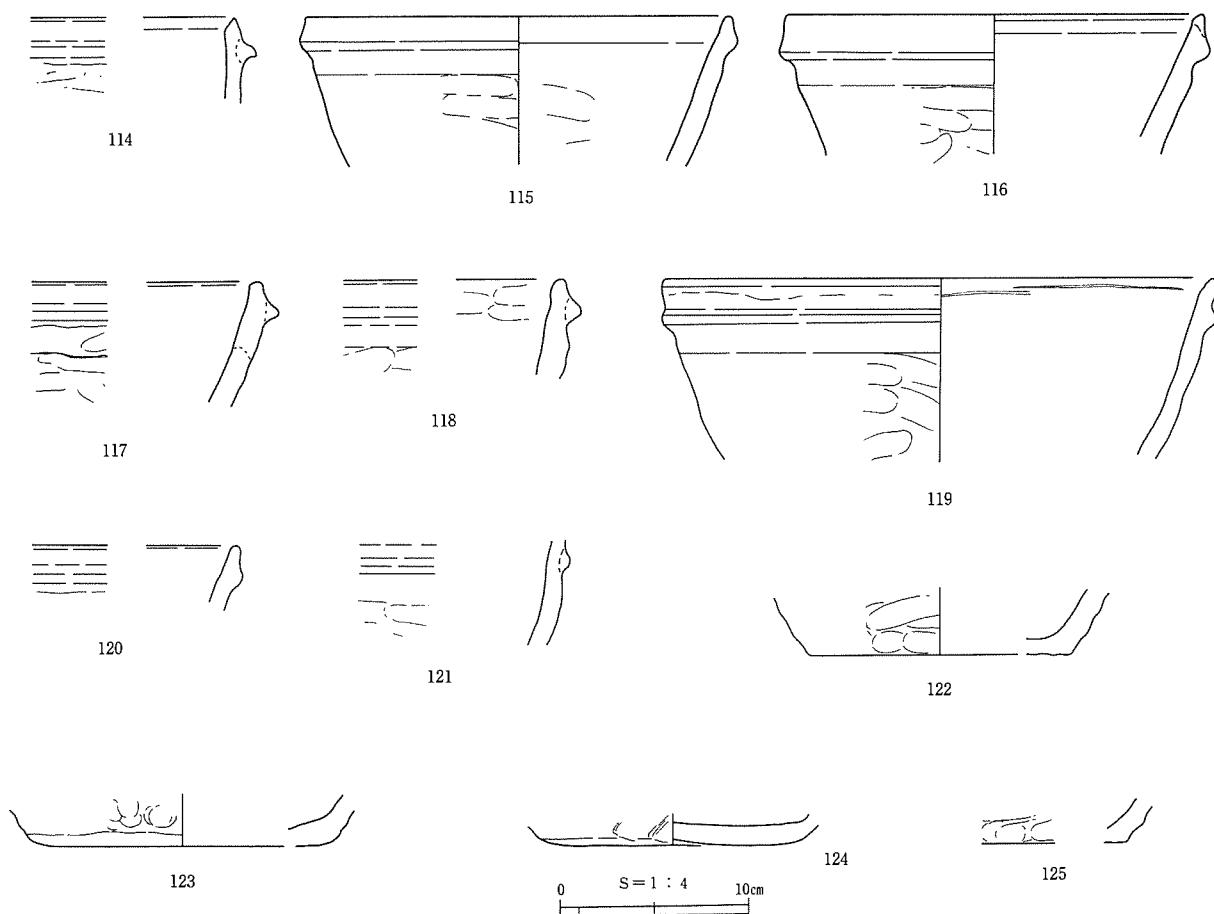
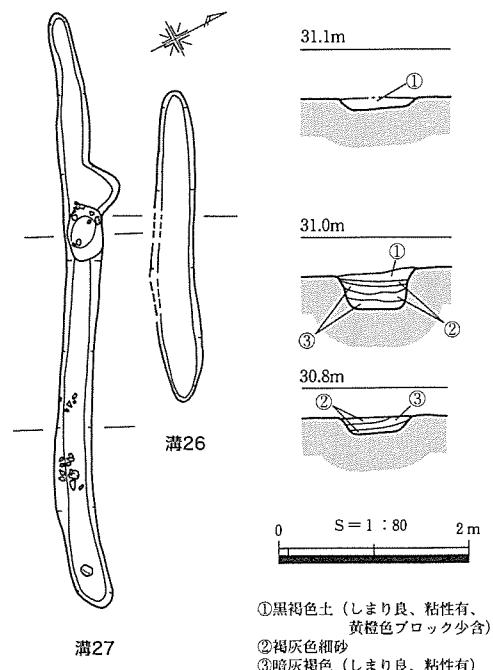
第86図 溝20～25

離は約75mを測る。

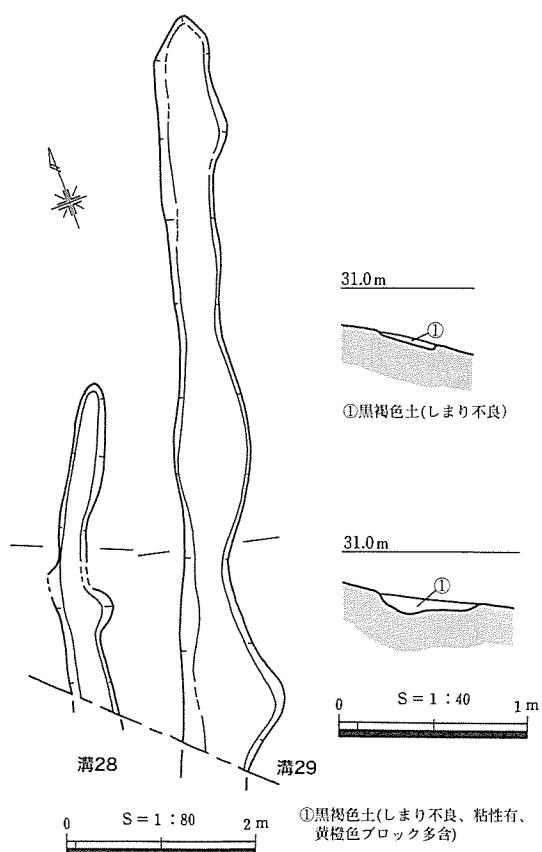
溝26は底面がほぼ平坦となっており、規模は幅40cm、深さ10cmを測り、全長3.3mを検出した。埋土は黒褐色土の1層であり、砂の堆積は認められない。埋土中から遺物は出土していない。

溝25は底面に凹凸が認められる。規模は幅40cm、深さ20cmを測り、全長6.4mを検出した。埋土は最大で6層に分層される。黒褐色土および暗灰褐色土と褐灰色細砂が交互に堆積している。このため溝19と同様、流水があったものと推察される。

遺物は中世の土器が出土している。114～118、120・121は瓦質、他は土師質となっている。いずれも鍋であり、114～121は口縁部であり、その下端には突帯がめぐっている。122～125は底部であり、平坦となっている。124の外面には板によるナデのためか条線が認められる。その他の遺物として、図化できなかつたが、常滑焼の破片が出土している。時期は14世紀の範疇に収まるものと考えられる。
(玉木)



第87図 溝26・27・出土遺物



第88図 溝28・29

の痕跡や焼成前の穿孔が認められる。129は碗であり、鉄釉が掛けられており、外面の下半部が露胎している。130は須恵器の壺の底部である。131は瓦質の釜であり、口縁部が若干内湾して立ち上がる。132～136は鍋であり、132は口縁部が短く垂直に立ち上がり、短い突帯をもつ。133・134は口縁部が屈曲し、受け口状を呈している。135は口縁部下端に突帯をめぐらしている。136は口縁部が133・134に比べて屈曲の少ない受け口状を呈しており、外面にケズリが施されている。

(玉木)

溝28・29 (第88図)

調査区南側、J 17グリッド付近に位置している。溝は北東ー南西方向へほぼ直線的に延びており、前述した溝20～25と並行している。遺構の配置状況からこれらと同一であった可能性がある。

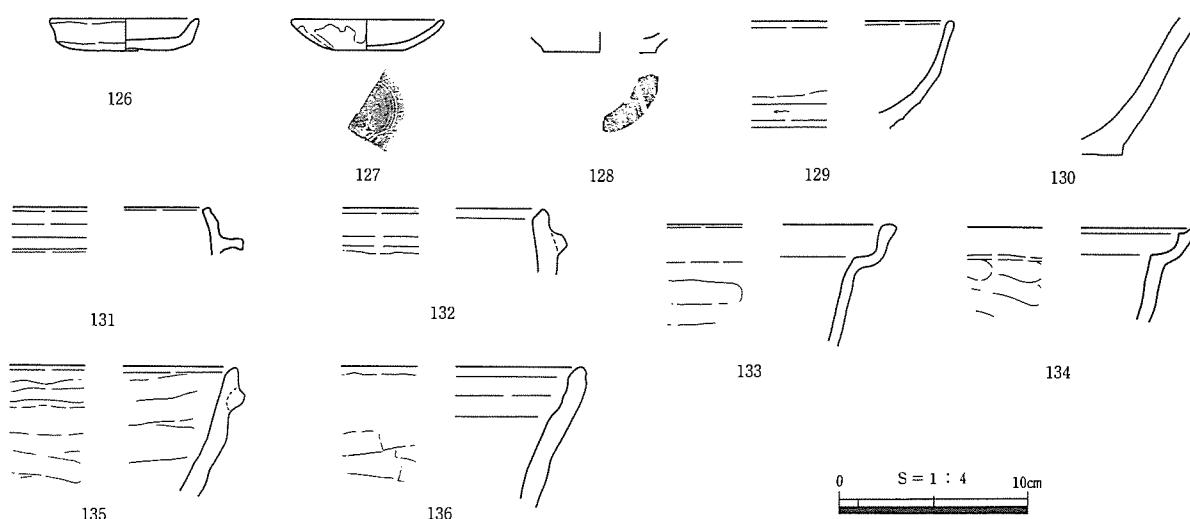
溝28は底面が平坦となっている。規模は幅40cm、深さ4 cmを測り、全長3.3mを検出した。埋土は黒褐色土の1層であり、黄橙色ブロック（ソフトローム層）が含まれている。

溝29は底面に若干の凹凸が認められる。規模は幅80cm、深さ10cmを測り、全長7.8mを検出した。埋土は黒褐色土の1層であり、溝28と同様である。遺物は図化できなかったが須恵器片が1点出土している。

(玉木)

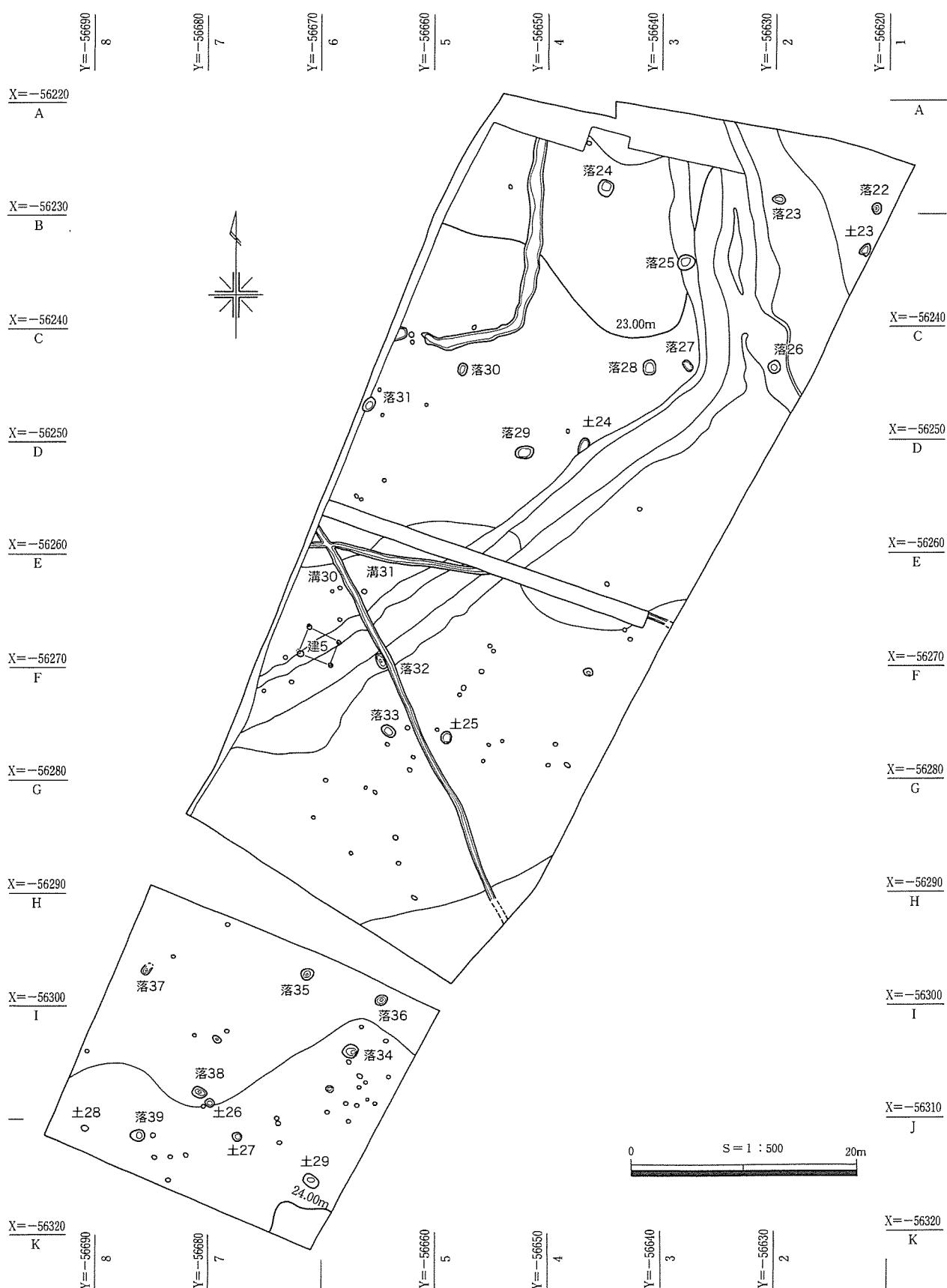
6. 遺構に伴わない遺物 (第89図)

クロボクである黒褐色中から近世までの遺物がわずかに出土している。126は皿であり、手づくねによる成形である。127は灯明皿である。内面には黒色釉が掛けられており、底部には回転糸切りの痕跡が認められる。128は皿であり、底部には静止糸切り



第89図 遺構に伴わない遺物

第7章 C1区の調査



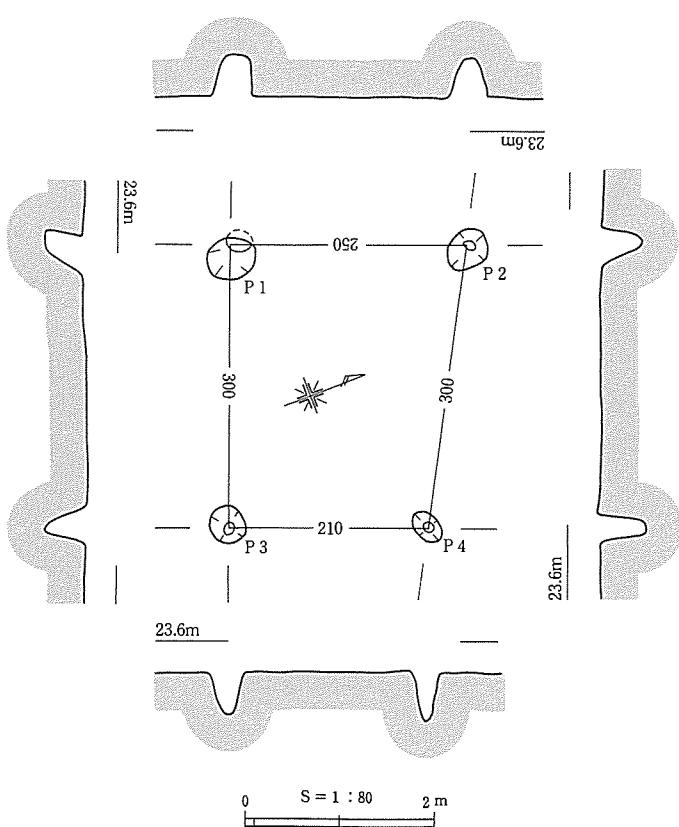
第90図 C1区遺構配置図

第1節 調査の概要

C1区は遺跡北東部、加勢蛇川右岸に位置し、調査以前は水田地であった。堆積土は水田造成・耕作土直下に黒色土が堆積し、植物起源の酸化鉄の含有量で上下2層に分層した。鉄分を多く含む上層は縄文時代から近世の遺物を多量に包含し、下層はほとんど遺物を含んでいないため、下層の黒色土が遺構面と判断し精査したが、明確なプランを確認できなかつたため、漸移層（第9図A-A' 7層）において遺構検出をおこなつた。調査の結果、調査区南東から北西へ向かって堆積土が徐々に厚くなり、北東部において造成土直下が地山面であることから水田造成以前は、東から西へ傾斜する緩やかな丘陵斜面および谷底部であったことがわかつた。検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土坑7基、落し穴18基、溝2条で、時期は縄文時代から中世の可能性のあるものがあり、時期幅がある。出土遺物は、縄文時代から近世にかけての土器、石器、陶磁器、土製品、漆器などが出土した。かなりの時期幅があるが、縄文時代晚期終末期～弥生時代前期、古墳時代中期のものが主体をなす。出土状況は、水田耕作による攪乱を受けたことから時期の異なるものが同一層（第9図A-A' 1・2層）に混在しており、層位による時期差はみられなかつた。

C1区は水田造成及び耕作による攪乱を受け、消失した遺構が存在したと考えられるが、それを考慮しても他の調査区に比べ、弥生時代以降の遺構数は極めて少ない。また、出土遺物も調査区南側に集中する傾向がみられ、北側では散在的に出土するにとどまり、人間活動の痕跡が希薄である。以上のことから弥生時代以降、当地の大部分は土地利用が活発でなかつたといえるだろう。（福井）

第2節 遺構と遺物



第91図 掘立柱建物5

1. 掘立柱建物

掘立柱建物5（第91図）

E5グリッド、標高23.3mに位置する。漸移層精査中に検出した。1間×1間の建物跡で主軸方位はN-21°-Eである。柱穴規模は、それぞれP1が直径52cm、深さ44cm、P2は直径48cm、深さ44cm、P3は直径40cm、深さは52cm、P4は直径40cm、深さは52cmを測り、柱穴間はP1-P2で250cm、P2-P4で300cm、P3-P4で210cm、P1-P3で300cmを測る。

時期は他の掘立柱建物と主軸方位が同一方向であることから他の掘立柱建物と同時期の可能性が考えられるが、遺構周辺では縄文時代から中世の遺物が混在して出土すること、遺構残存状況が不良であることから判然としない。（福井）

2. 土坑

土坑23（第92図）

A 1 グリッド、標高23.5mに位置する。ソフトローム層精査中に検出した。水田造成による削平を受けているため残存状況は不良であった。形態・規模は長軸88cm、短軸76cmで不整形な円形を呈し、検出面からの深さは24cmを測る。埋土は2層に分層され、黒褐色土が主体をなす。遺物は出土しておらず、時期などの詳細は不明であるが、遺構形態から風倒木痕の可能性も考えられる。(福井)

(福井)

土坑24（第93図）

A 3 グリッド、標高23.2mに位置する。漸移層精査中に検出したが、南東部は攪乱を受けており、1/4程度壊されていた。残存する規模は長軸112cm、短軸72cm、検出面からの深さは6cmで、推定される形態は橿円形である。埋土は黒色土が主体をなす。遺物は底面直上から土器片1点、礫石器1点、礫2点が出土し、そのうち、礫石器1点を図示した。S 12は敲石で長軸端部に敲打痕がみられる。時期などの詳細は、遺物による時期決定が困難なこと、残存状況も不良であることから不明である。

(福井)

土坑25（第94図）

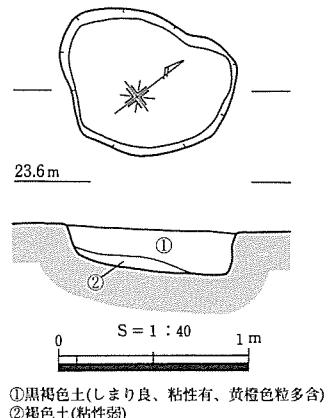
F4グリッド、標高23mに位置する。ソフトローム層精査中に検出した。形態・規模は直径90cmの円形を呈し、検出面からの深さは14cmを測る。埋土は黒色土が主体をなす。遺物は出土しておらず、時期などの詳細は不明であるが、遺構形態から風倒木痕の可能性も考えられる。(福井)

(福井)

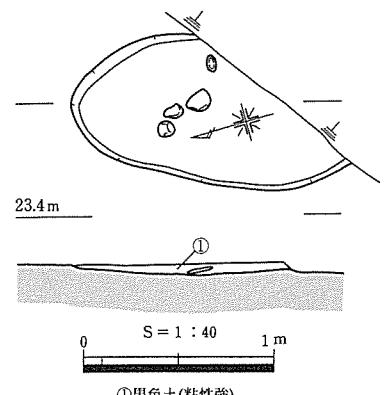
土坑26（第95図）

J 6 グリッド、標高23.7mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は直径67cmで、円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。埋土は黒色土が主体をなす。出土遺物は土師器甕2点を図示した。137の口縁部は器壁が厚く、やや外反しながら立ち上がる。外面口縁部から胴部には、煮炊きによる煤状炭化物の付着がみられる。138は甕の胴部片で、上半部に刺突文が施文される。時期は遺物から古墳時代中期のものと考えられるが、用途などの詳細は不明である。

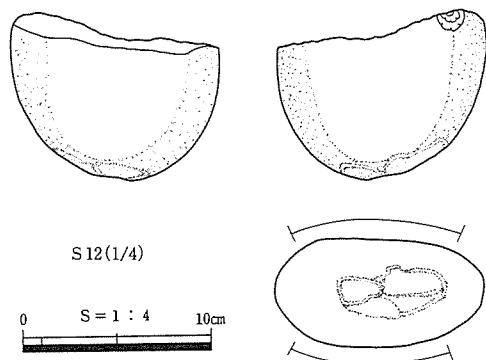
(福井)



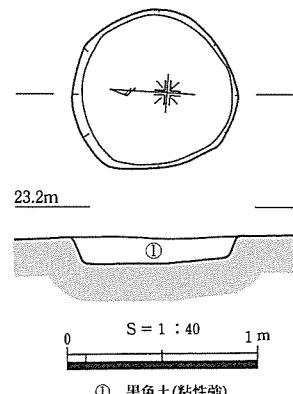
第92図 土坑23



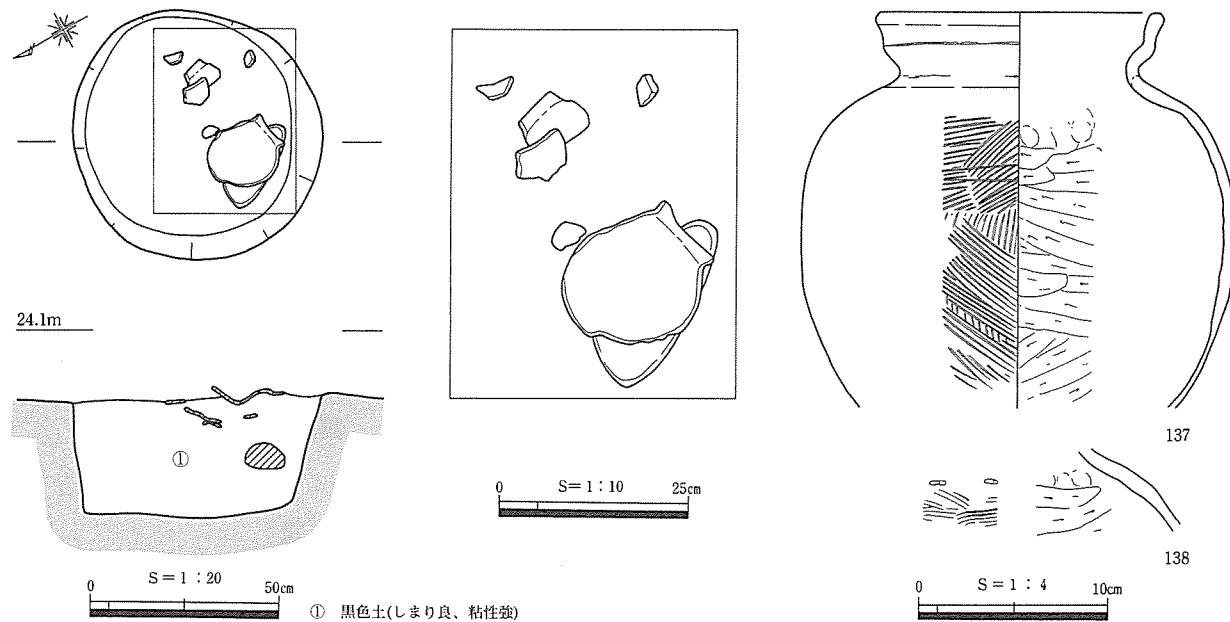
① 黑色土(粘性強)



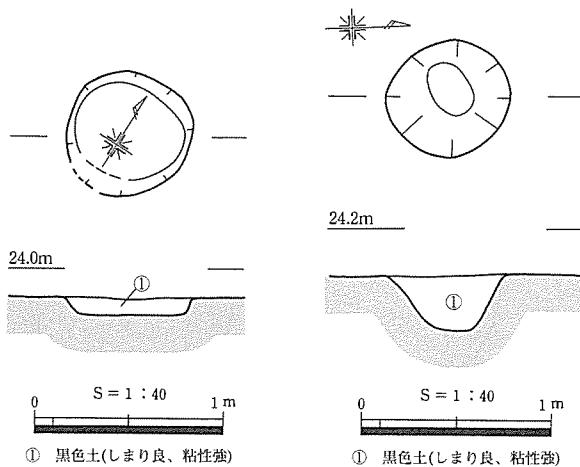
第93図 土坑24・出土遺物



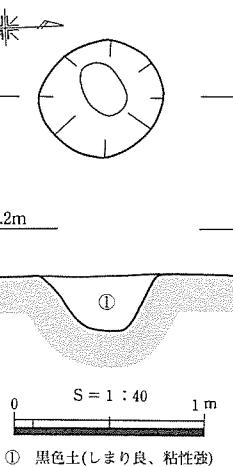
第94図 土坑25



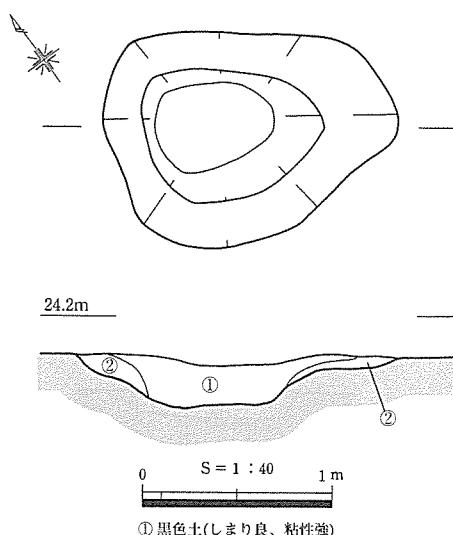
第95図 土坑26・出土遺物



第96図 土坑27



第97図 土坑28



第98図 土坑29

土坑27（第96図）

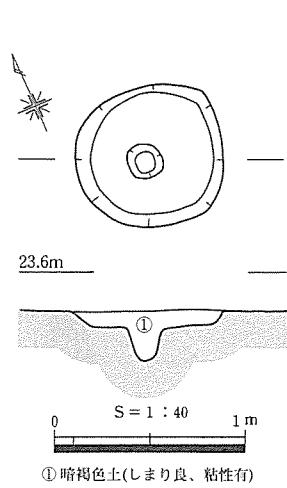
J 6 グリッド、標高23.7mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は直径68cmで円形を呈する。検出面からの深さは10cmを測る。埋土は黒色土が主体をなす。遺物は出土しておらず、時期などの詳細は不明である。
(福井)

土坑28（第97図）

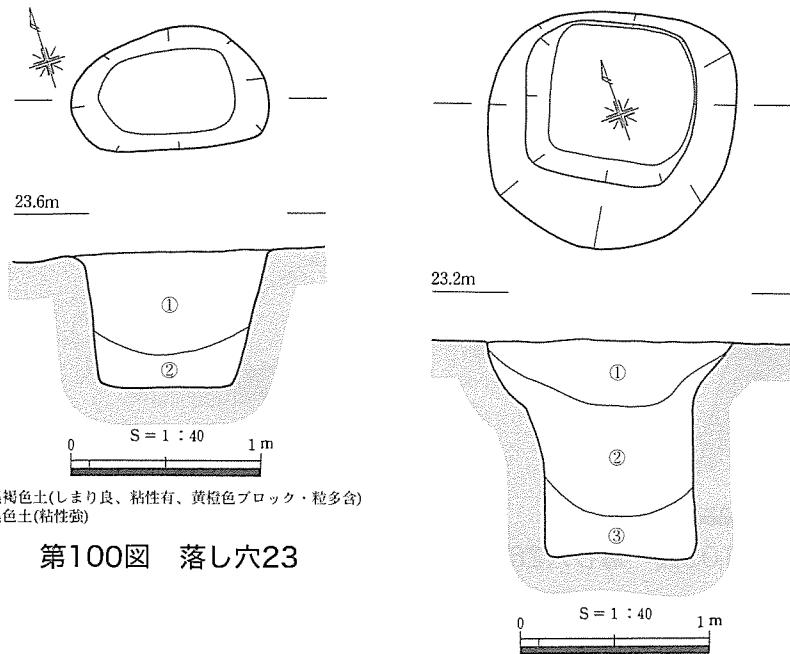
J 7 グリッド、標高23.5mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は直径64cmで円形を呈し、検出面からの深さは28cmを測る。埋土は黒色土が主体をなす。遺物は出土しておらず、時期などの詳細は不明である。
(福井)

土坑29（第98図、P.L.5）

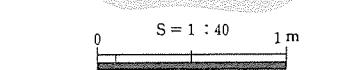
J 6 グリッド、標高24mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は長軸158cm、短軸116cmで不整形な橢円形を呈する。検出面からの深さは24cmを測る。埋土は2層に分層され、1層が黒色土、2層は漸移層に近似した褐色土を主体とする。遺物は出土しておらず、時期などの詳細は不明であるが、遺構形態から風倒木痕の可能性も考えられる。
(福井)



第99図 落し穴22



第100図 落し穴23



第101図 落し穴24

3. 落し穴

落し穴22（第99図）

A 1 グリッド、標高23.5mに位置する。ソフトローム層精査中に検出した。水田造成による削平を受けているため、残存状況は不良であった。

形態・規模は長軸80cm、短軸76cmで円形を呈する。検出面からの深さは14cmを測る。底面中央には直径18cm、深さ18cmのピットをもつ。埋土は褐色土が主体をなす。底面ピットにおいて杭痕は確認されなかった。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。

(福井)

落し穴23（第100図）

A 1・2 グリッド、標高23.4mに位置する。ソフトローム層精査中に検出した。形態・規模は長軸104cm、短軸64cmで隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは72cmを測る。埋土は2層に分層され、黒色土が主体をなす。堆積状況は自然堆積の様相を示す。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。

(福井)

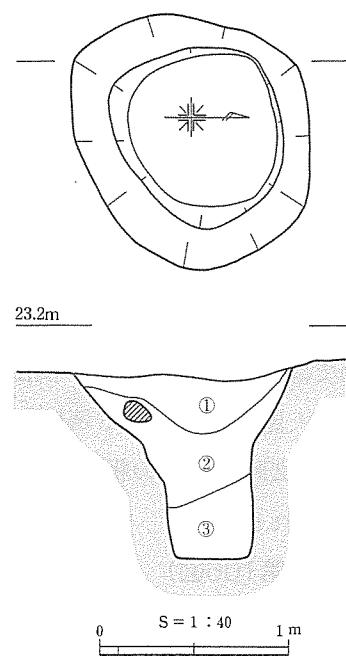
落し穴24（第101図）

A 3 グリッド、標高23mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は長軸130cm、短軸128cmで隅丸方形を呈する。検出面からの深さは110cmを測る。埋土は3層に分層され、黒色土が主体をなすが、壁面崩落による黄橙色粒の混入がみられた。堆積状況は自然堆積の様相を示す。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。

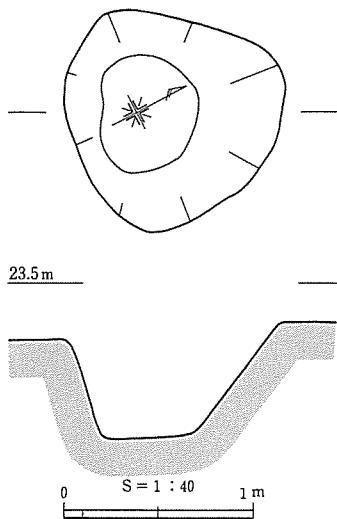
(福井)

落し穴25（第102図）

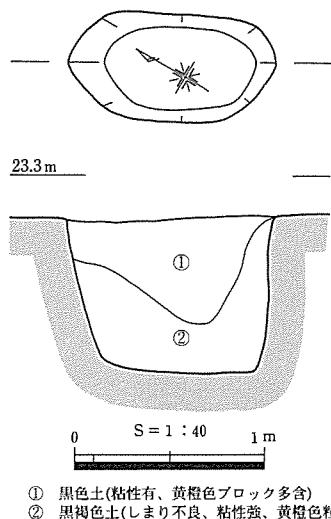
B 2 グリッド、標高23.3mに位置する。搅乱土除去後、漸移層精査中に検出した。形態・規模は長軸144cm、短軸128cmで



第102図 落し穴25



第103図 落し穴26



第104図 落し穴27

橢円形を呈する。検出面からの深さは98cmを測る。埋土は3層に分層され、黒色土が主体をなすが、壁面崩落による黄橙色粒の混入がみられた。堆積状況は自然堆積の様相を示す。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。

(福井)

落し穴26(第103図)

B・C2グリッド、標高23.3mに位置する。搅乱土除去後、ソフトローム精査中に検出した。形態・規模は直径116cmの不整形な橢円形を呈し、検出面からの深さは64cmを測る。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。

第105図 落し穴28・出土遺物

(福井)

落し穴27(第104図)

C2グリッド、標高23.1mに位置する。漸移層精査中に検出した。形態・規模は長軸110cm、短軸48cmで隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは83cmを測る。埋土は2層に分層され、黒色土が主体をなすが、壁面崩落による黄橙色粒の混入が多くみられた。堆積状況は自然堆積の様相を示す。遺物は検出していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。

(福井)

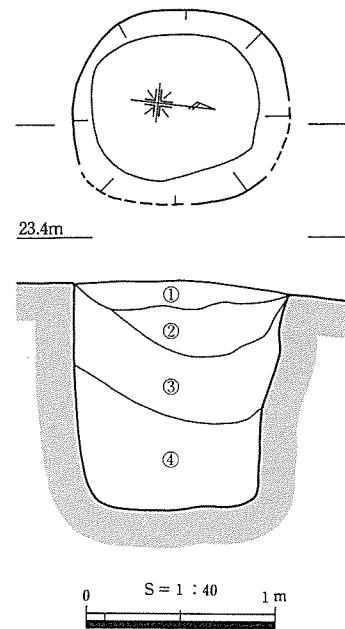
落し穴28(第105図)

C3グリッド、標高23.2mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は長軸130cm、短軸106cmで隅丸方形を呈する。検出面からの深さは122cmを測る。埋土は4層に分層され、黒色土が主体をなすが、壁面崩落による黄橙色粒の混入がみられた。堆積状況は自然堆積の様相を示す。遺物は3層中から縄文時代晚期の粗製土器が1点出土した。遺物出土状況、遺構形態から縄文時代晚期の落し穴と考えられる。

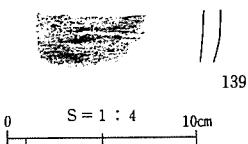
(福井)

落し穴29(第106図)

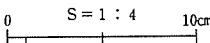
D4グリッド、標高23.2mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は長軸169cm、短軸106cmで壁面上部崩落により橢円形を呈するが、本来の平面形態は隅丸方形だったと推定される。検出面からの深さは123cmを測る。埋土は4層に分層され、黒色土が主体をなすが、壁面崩落による黄橙色粒の混入がみられた。堆積状況は自然堆積の様相を示す。遺物は出土していないが、遺構形態から

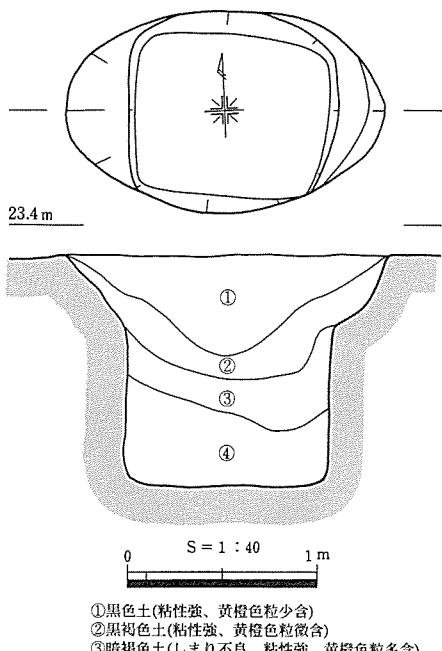


- ①暗褐色土(しまり良、粘性強、黄橙色粒少含)
- ②黒褐色土(粘性有、黄橙色粒少含)
- ③黒色土(粘性強、黄橙色粒少含)
- ④黒色土(粘性強、黄橙色粒多含)

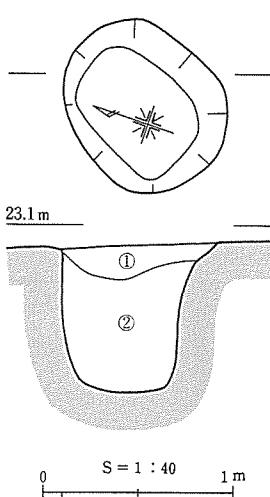


139

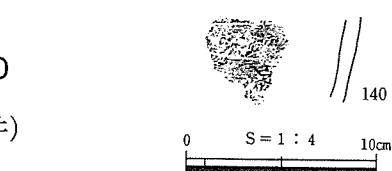
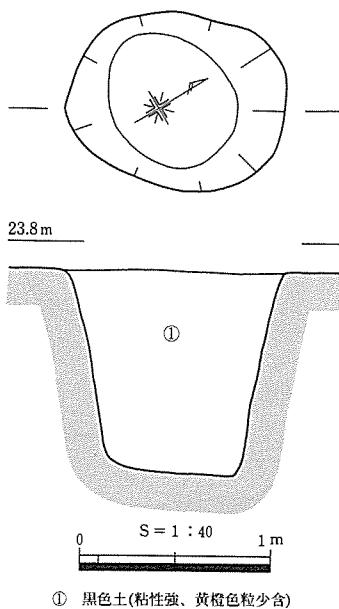




第106図 落し穴29



第107図 落し穴30



(福井)

縄文時代の落し穴と考えられる。

落し穴30 (第107図)

C 4 グリッド、標高23mに位置する。漸移層精査中に検出した。形態・規模は長軸94cm、短軸78cmで、隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは78cmを測る。埋土は2層に分層され、黒色土が主体をなすが、壁面崩落による黄橙色粒の混入がみられた。堆積状況は自然堆積の様相を示す。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。

(福井)

落し穴31 (第108図)

C 5 グリッド、標高23mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は長軸112cm、短軸92cmで楕円形を呈する。検出面からの深さは109cmを測る。埋土は黒色土が主体をなす。遺物は埋土中位より縄文時代晚期の粗製土器が1点出土している。遺物出土状況、遺構形態から縄文時代晚期の落し穴と考えられる。

(福井)

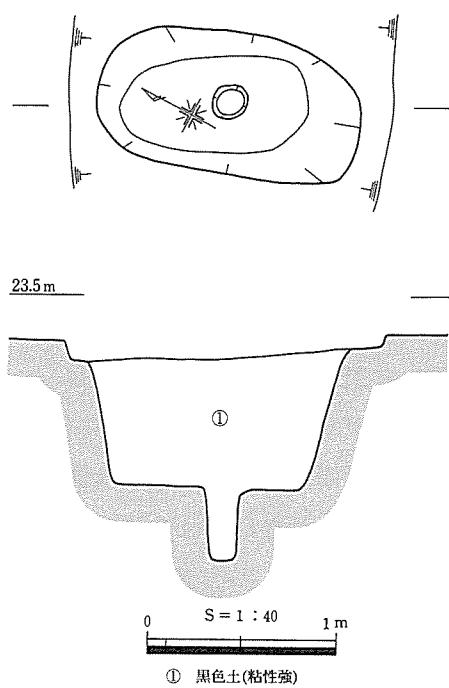
落し穴32 (第109図)

E・F 5 グリッド、標高23.3mに位置する。搅乱土除去後、漸移層精査中に検出した。形態・規模は長軸141cm、短軸78cmで隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは124cmを測る。底面中央に直径18cm、深さ40cmのピットをもつ。埋土は黒色土が主体をなす。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。

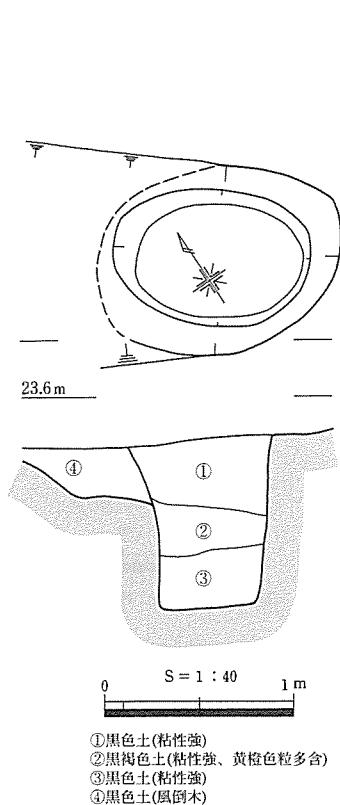
(福井)

落し穴33 (第110図)

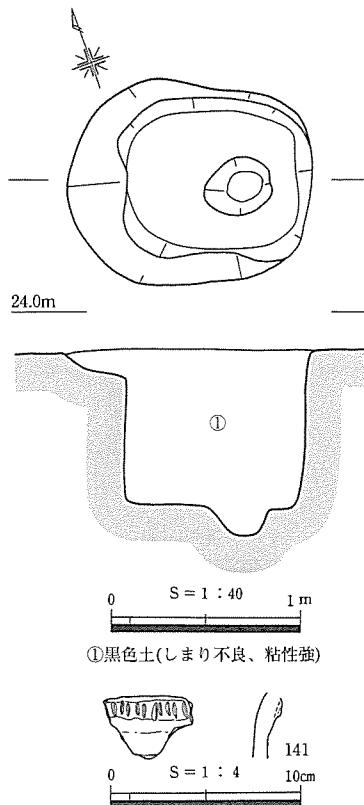
F 5 グリッド、標高23.3mに位置する。漸移層精査中に検出



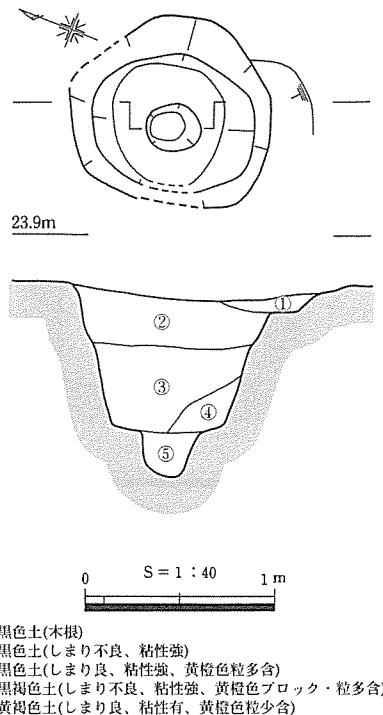
第109図 落し穴32



第110図 落し穴33



第111図 落し穴34・出土遺物



第112図 落し穴35

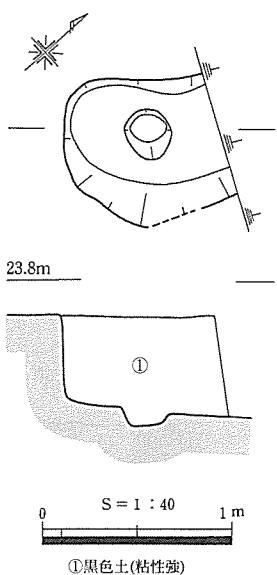
した。形態・規模は長軸126cm、短軸102cmで壁面上部崩落により楕円形を呈するが、本来は隅丸長方形を呈していたと思われる。検出面からの深さは118cmを測る。埋土は3層に分層され、黒色土が主体をなすが、壁面崩落による多量の黄橙色粒の混入がみられた。堆積状況は自然堆積の様相を示す。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。
(福井)

落し穴34（第111図）

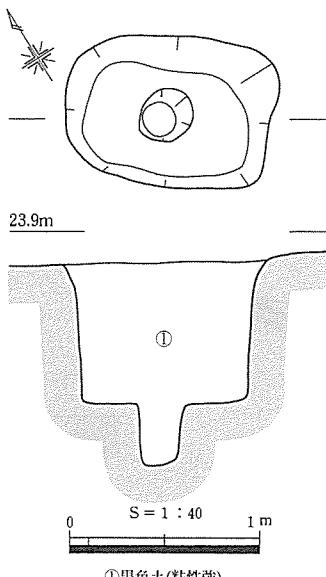
I 5グリッド、標高23.8mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は長軸128cm、短軸104cmで壁面崩落により不整形な楕円形を呈するが、本来は隅丸方形を呈していたと思われる。検出面の深さは80cmを測る。底面やや東側には長軸36cm、短軸30cm、深さ14cmのピットをもつ。埋土は黒色土が主体をなす。底面ピットにおいて杭痕は確認できなかった。遺物は埋土中位より縄文時代晩期の粗製土器が2点出土し、そのうち1点を図示した。141は深鉢の胴部で刻目突帯文が付される。刻目形態はD字状で粗雑に施文される。遺物出土状況、遺構形態から縄文時代晩期の落し穴と考えられる。
(福井)

落し穴35（第112図、P L.5）

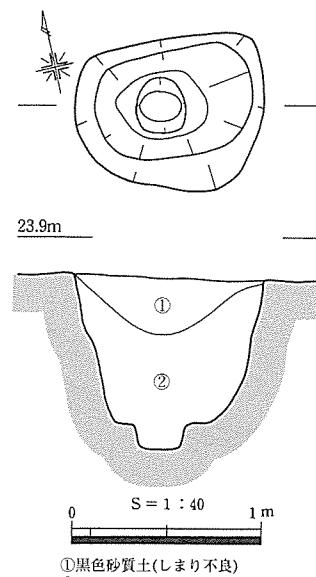
H 6グリッド、標高23.6mに位置する。漸移層精査中に検出した。形態・規模は長軸104cm、短軸98cmで壁面崩落により不整形な楕円形を呈するが、本来の平面形態は隅丸方形だったと推定される。検出面からの深さは76cmを測る。底面中央に長軸28cm、短軸24cm、深さ26cmのピットをもつ。埋土は4層に分層され、黒色土が主体をなすが、壁面崩落による黄橙色粒の混入がみられた。堆積状況は自然堆積の様相を示す。底面ピットにおいて杭痕は確認できなかった。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。
(福井)



第113図 落し穴36



第114図 落し穴37



第115図 落し穴38

落し穴36 (第113図)

H 5 グリッド標高23.9mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は長軸100cm、短軸80cmで隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは78cmを測る。底面中央に長軸32cm、短軸24cm、深さ16cmのピットをもつ。埋土は2層に分層され、黒色土が主体をなす。底面ピットにおいて杭痕は確認できなかった。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。
(福井)

落し穴37 (第114図)

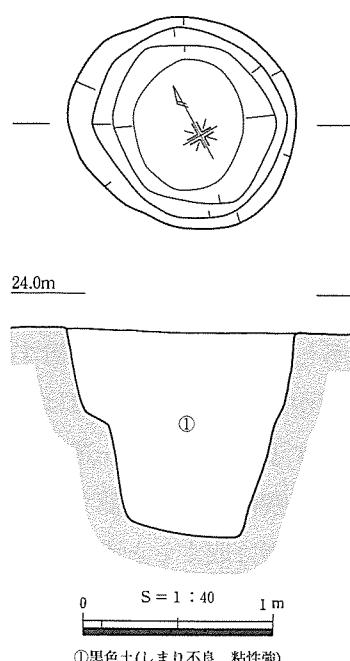
H 7 グリッド、標高23.6mに位置する。漸移層上面精査中に検出したが北東部は搅乱により削平されていた。残存する規模は長軸82cm、短軸69cmで検出面からの深さは52cmを測る。推定される形態は隅丸長方形である。底面中央には長軸28cm、短軸24cm、深さ8cmのピットをもつ。埋土は黒色土で底面ピットにおいて杭痕は確認できなかった。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。
(福井)

落し穴38 (第115図)

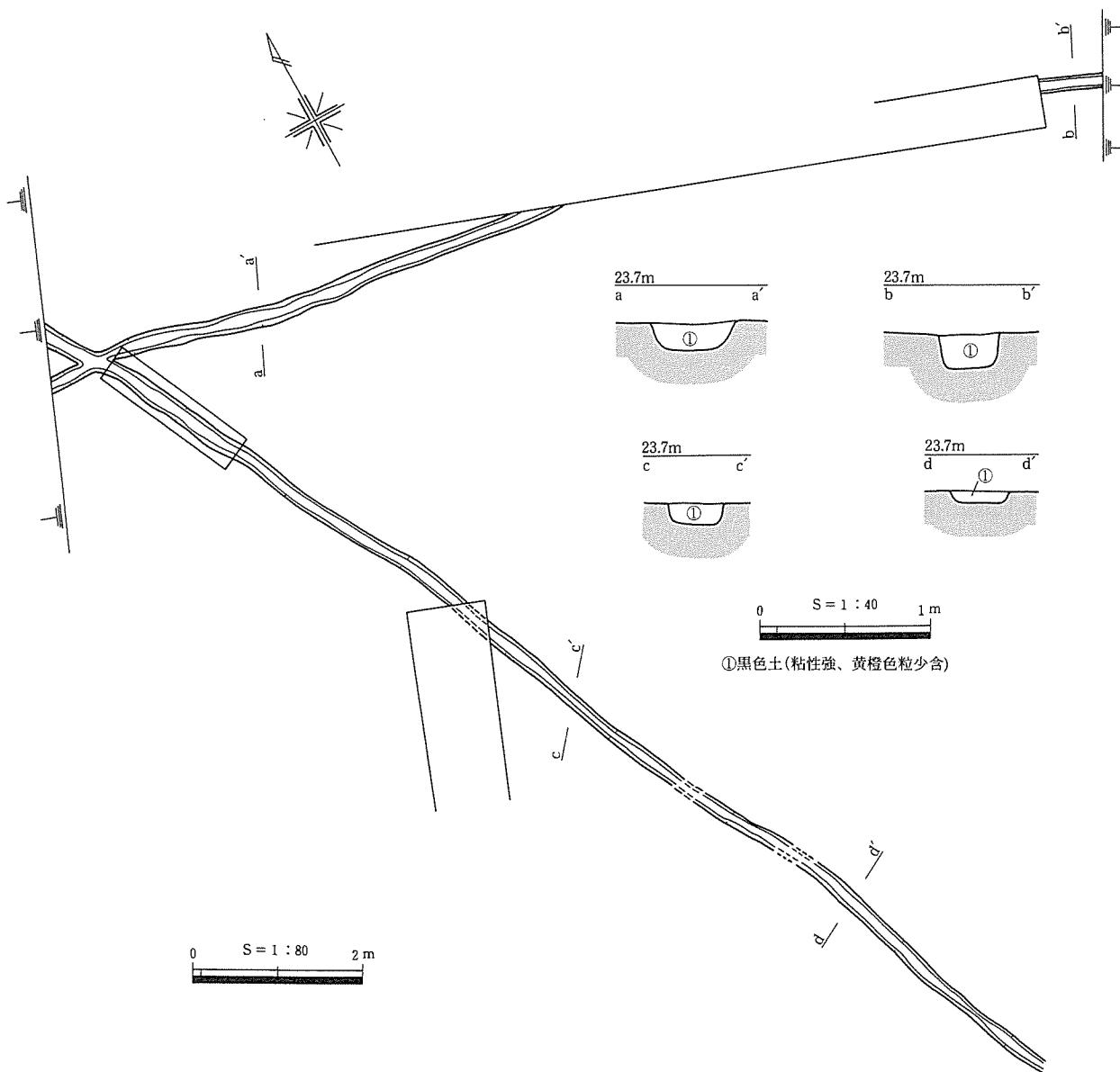
I 7 グリッド、標高23.7mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は長軸108cm、短軸80cmで隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは76cmを測る。底面中央には直径28cm、深さ36cmのピットをもつ。埋土は黒色土が主体をなす。堆積状況は自然堆積の様相を示す。底面ピットにおいて杭痕は確認されなかった。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。
(福井)

落し穴39 (第116図、P L 5)

I 7 グリッド標高23.8mに位置する。漸移層上面精査中に検出した。形態・規模は長軸122cm、短軸112cmで楕円形を呈し、検出面からの深さは108cmを測る。埋土は黒色土が主体をなす。遺物は出土していないが、遺構形態から縄文時代の落し穴と考えられる。
(福井)



第116図 落し穴39

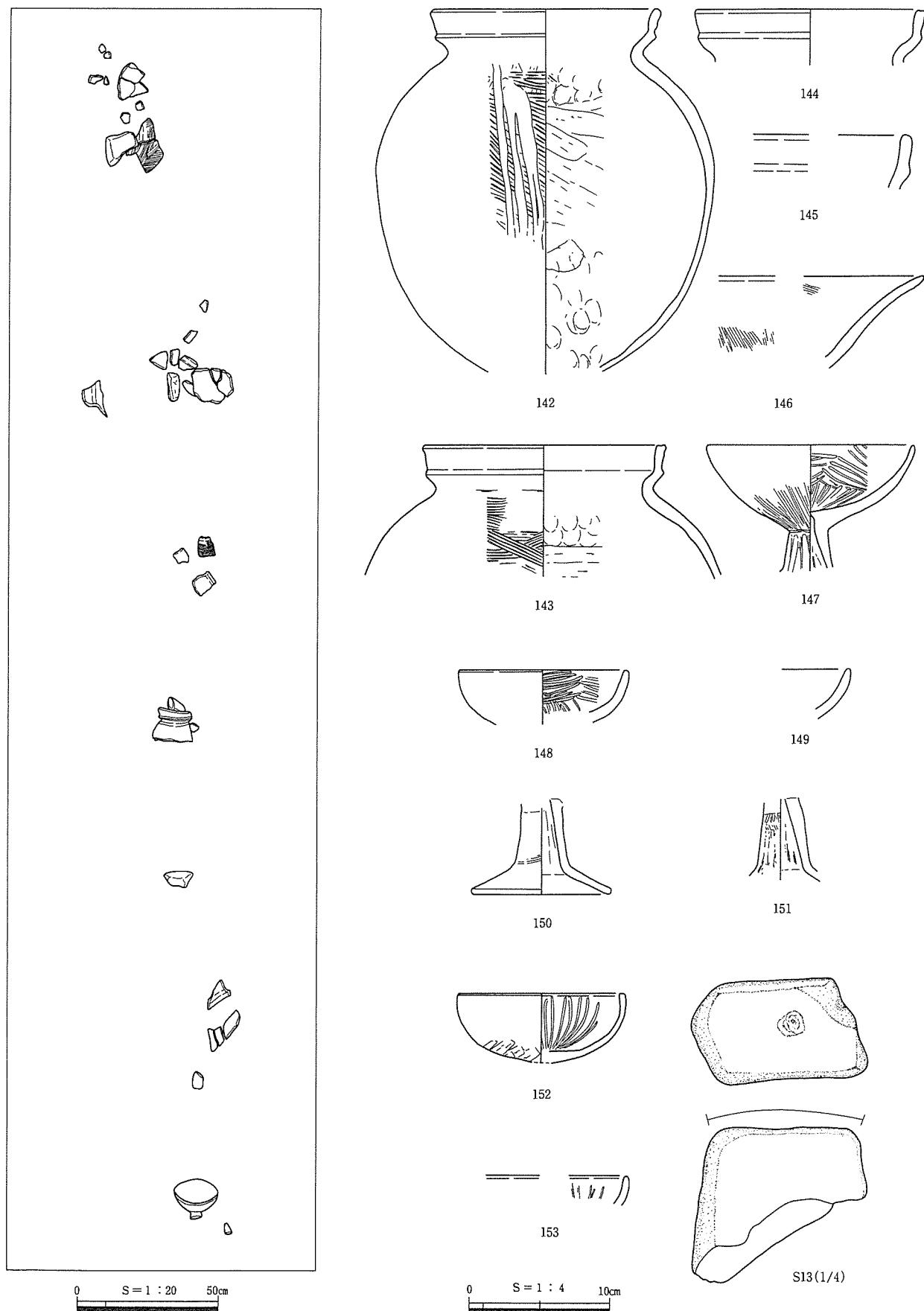


第117図 溝30・31

4. 溝

溝30・31（第117図、PL.5・9）

D5～G4グリッドに位置する。幅42～57cm、深さ7～26cmで断面形態は逆台形を呈する。埋土は黒色土が主体をなす。溝31はC3・4グリッドで削平を受け消失していたが、両縁の遺構形態、埋土が類似することから同一遺構と判断した。溝30、31はD5・6グリッドにおいて重複する。新旧関係は土層観察において確認できなかったが、両遺構に時期差があるにせよ遺物出土状況から、古墳時代中期の範疇に収まると考えられる。両遺構とも全体形態を調査区内では捉えきれないため、詳細は不明であるが、C2区においてほぼ同時期の竪穴住居跡が検出されており、何らかの関連性が推察される。出土遺物はD5グリッドにおいて集中して出土し、そのうち13点を図示した。いずれも古墳時代中期のものである。当遺構の時期は出土遺物より古墳時代中期に帰属すると考えられる。（福井）



第118図 溝30遺物出土状況・溝30・31出土遺物

5. 遺構に伴わない遺物（第119～121図、P L.9・10）

縄文時代から近世にかけての遺物がコンテナ5箱分出土した。調査の概要で触れたように出土遺物は、縄文時代晚期終末期～弥生時代前期、古墳時代中期のものが主体をなし、出土地点は調査区南側に集中する傾向がみられた。

掲載方法は、時期を特定できるものなど70点を選別し、図示することとした。以下各時期の土器・陶磁器、金属器、土製品、漆器、石器の順に述べる。

縄文時代晚期終末期以前（154～156）

154は深鉢もしくは鉢で胴外反部に波状隆帯文が施される。155は深鉢の底部で縦位に粗雑な隆帯文が貼付けられる。156は壺あるいは鉢の胴部でR L原体の縄文地文が施される。縄文地文は不規則に横位、斜位回転によって施文される。いずれも部位片のため詳細な時期決定は困難である。

縄文時代晚期終末期～弥生時代前期（157～175）

当該期の遺物はすべて粗製土器であり、器面調整は内外面ともにナデ調整が施される。157～159は粗製浅鉢で157は内傾しながら立ち上がり緩やかに外反する。158・159は直線的に立ち上がる。160～175は突帯文土器で、160～170は突帯部に刻目をもち、171～175は突帯に刻目をもたない。刻目形態はV字状、D字状のものがみられる。160～167は口縁部下方に刻目突帯文をもつもので、刻目形態はV字状のものが大半を占める。168～170は口縁部に刻目突帯文を貼付けるもので、168は刻目形態がV字状、169・170はD字状である。171～175は突帯部に刻目をもたないもので、いずれも口縁部下方に突帯文が付され、171は口縁部が直立気味に立ち上がり、172～175は外反して立ち上がる。

弥生時代前期（176～186）

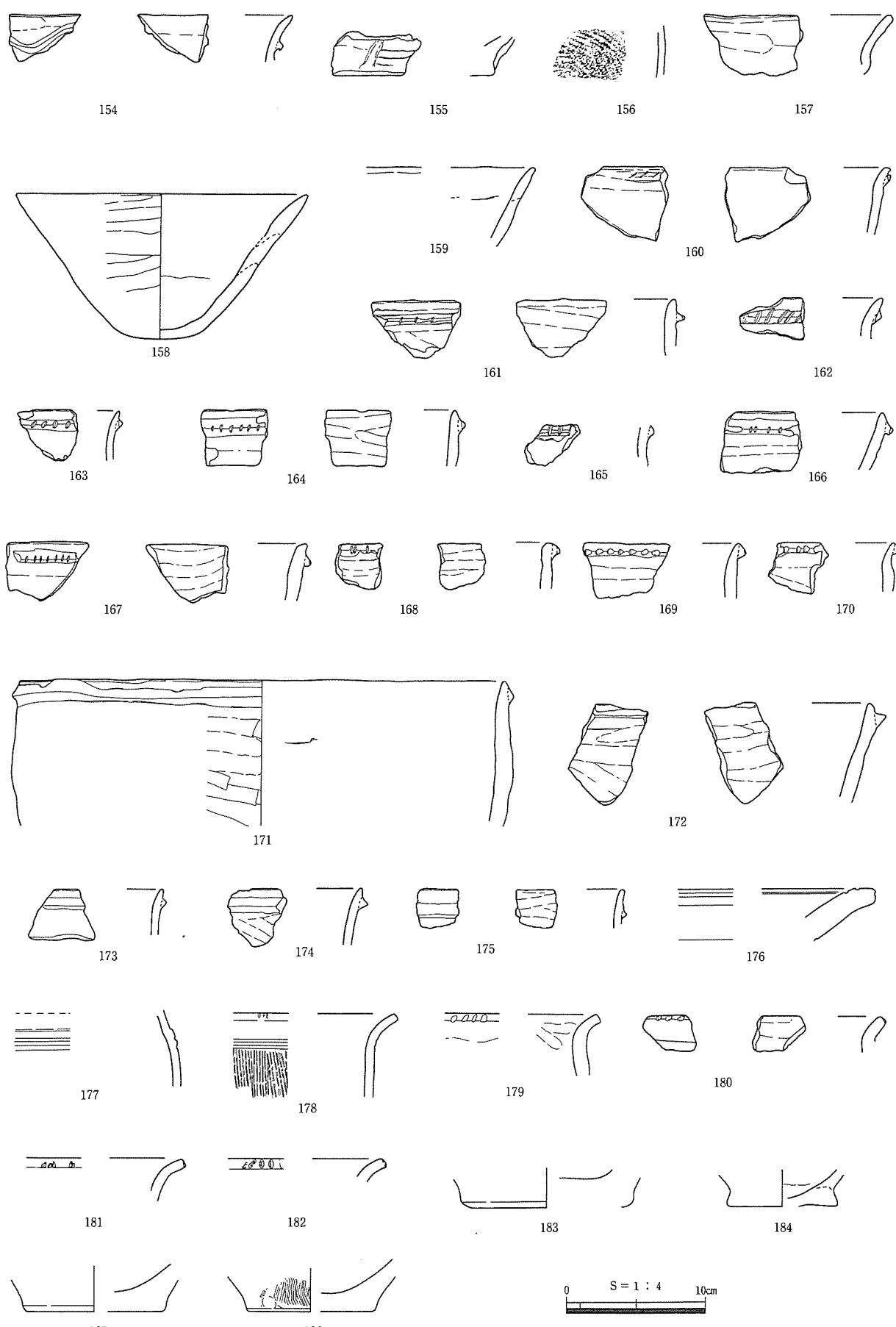
176は壺の口縁部で横走沈線を2条めぐらす。177～182は甕で177は胴部に段をもち、外面はミガキ調整、内面はナデ調整を施す。178～182はいずれもくの字状に外反する口縁部で、浅い刻目を施文する。181は口縁部1/2程度の範囲に刻目が施文され、他は口縁部全面に刻目が施される。183～186は壺もしくは甕の底部で、ナデ調整またはハケメ調整が施され、立ち上がりが内傾するもの、直線的に立ち上がるものがある。184の底部には植物纖維痕がみられる。

古墳時代中期（187～194）

187～192は甕である。187は口縁部立ち上がりが低く、やや外反する。口縁端部はやや内傾するが平坦である。188は口縁部立ち上がりが低く、外反し、口縁端部は丸みを帯びる。189は口縁部立ち上がりが低く、やや外反する。190は口縁部が直立して立ち上がる。191は口縁部が外反して立ち上がり、端部は平坦である。192は口縁部がやや外反し、口縁端部は平坦である。193・194は高坏の脚部で裾部が八の字状に外反する。

古代・中世（195～212）

195・196は須恵器の蓋、瓶で8世紀のものと思われる。197～200は土師器小皿で、197・199・200は底部調整が回転糸切り、198はヘラ切りである。201～204は須恵器の甕、205は常滑焼の甕、206は備前焼の擂鉢である。207・208は瓦器の羽釜、釜で207は口縁部が内湾する。209・210は14世紀頃の土師器鍋で209は口縁部が外反し、210は受け口を持つ。211・212は貿易陶磁器の青磁碗で、212の内面には線刻による劃花文が施される。いずれも12世紀後半のものと思われる。



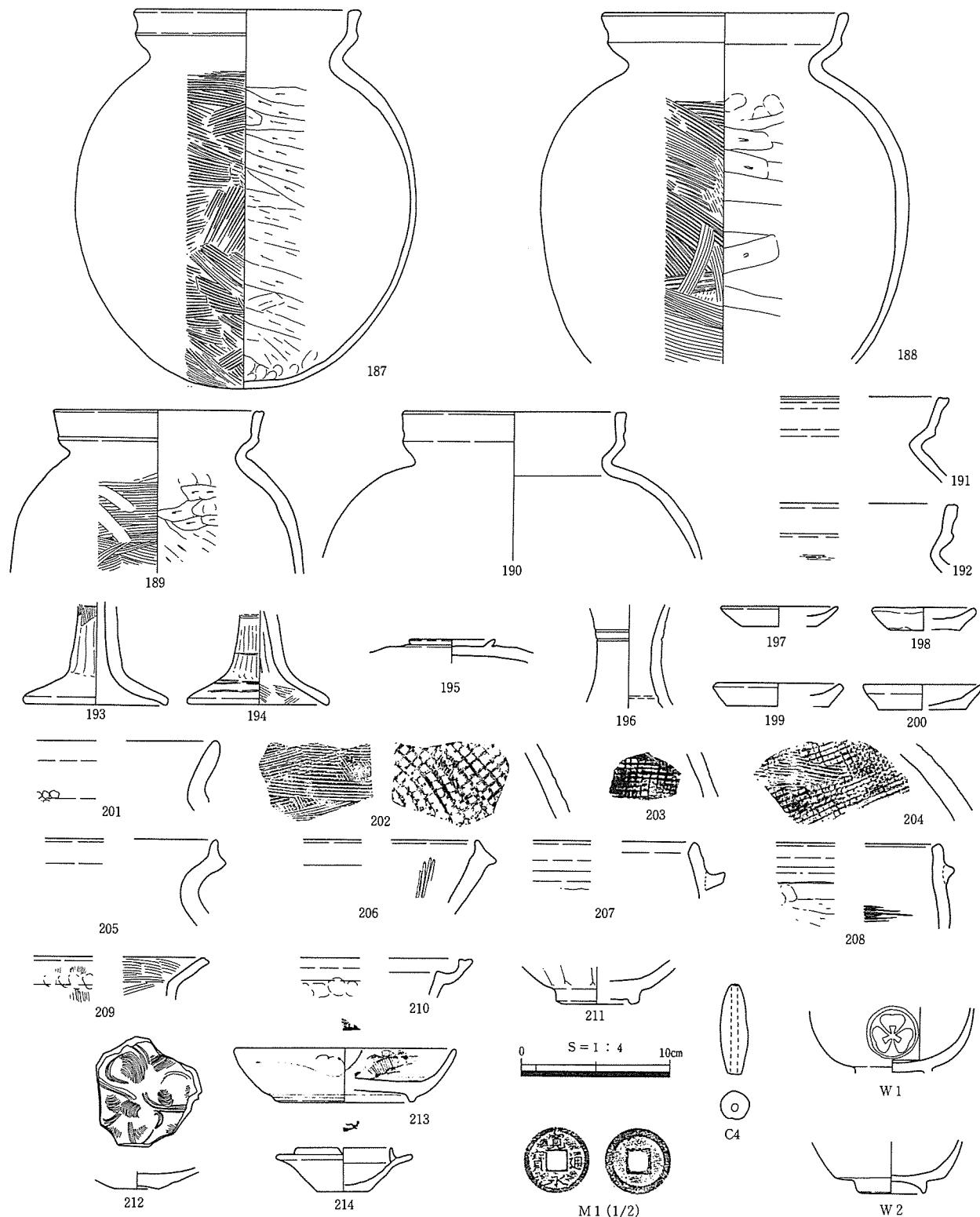
第119図 遺構に伴わない遺物①

近世以降 (219・220)

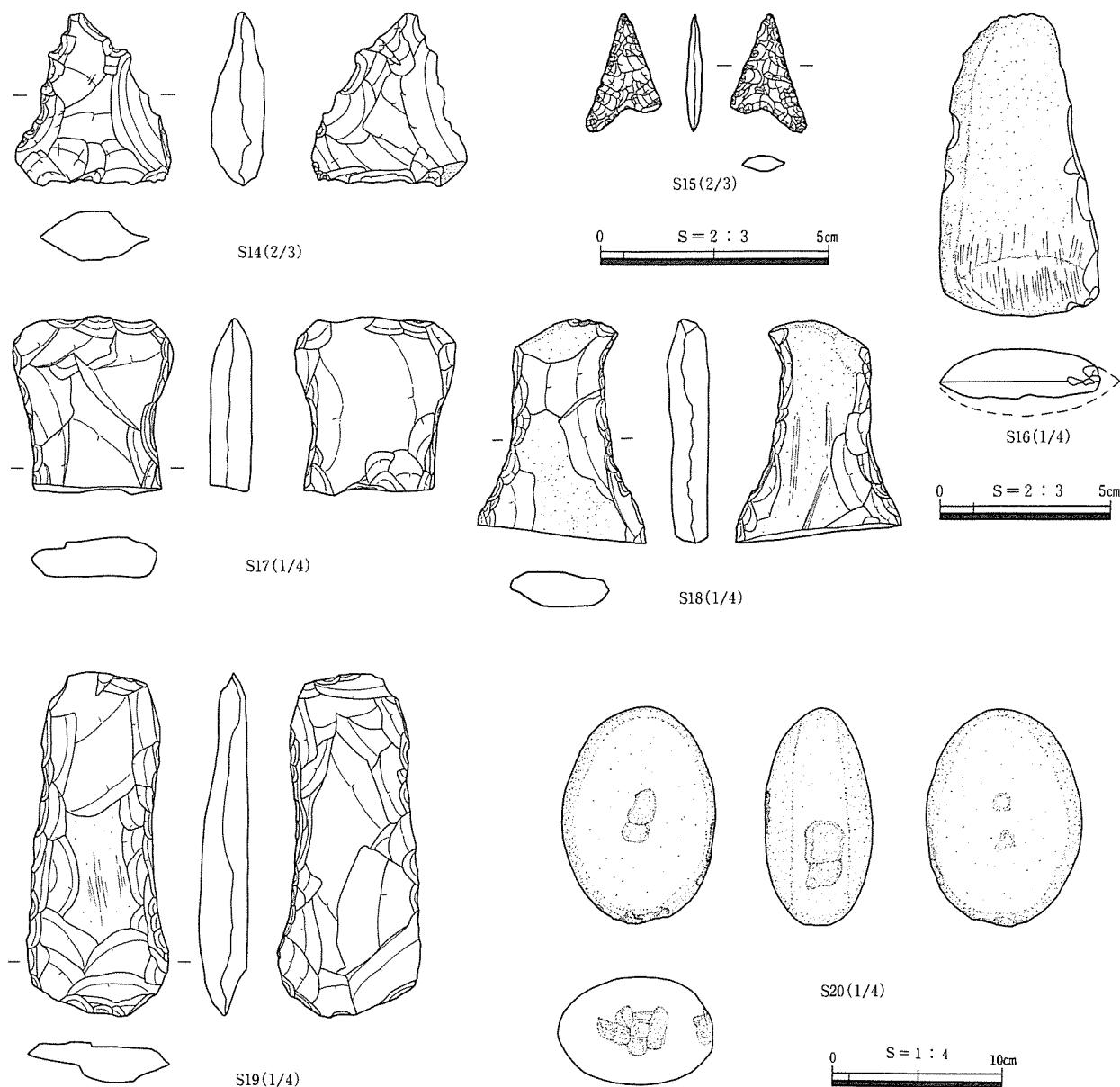
2点図示した。219は肥前系染付け皿、220は灯明受皿で底部に糸切り痕がみられる。

金属器 (M1)

寛永通宝（無背）が1点出土した。



第120図 遺構に伴わない遺物②



第121図 遺構に伴わない遺物③

土製品 (C 4)

土錐が1点出土した。形態は胴部が膨らむもので時期は不明である。

漆製品 (W 1・2)

椀が2点出土した。W 1は内外面とも黒色に塗られ、W 2は外面が黒色、内面は赤色に塗られる。W 2は体部に3単位の家紋が施文される。形態はいずれも身高・高台が低く、高台脇から腰部にかけ緩く屈曲し、口縁が外側に直線状にのびる。時期は18世紀以降のものと思われる。

石器 (S14~20)

S 14は石鏃未製品、S 15は凹基式無茎鏃で石材はそれぞれ石英脈石、黒曜石がもちいられる。S 16は閃緑玢岩製磨製石斧で刃部は両刃加工である。S 17~S 19は分胴形、撥形、短冊形石鋸で刃部周辺には擦痕がみられる。S 20の敲石は扁平な楕円礫を素材とし平坦面に凹痕、側縁および長軸端部に敲打痕が観察される。
(福井)

第8章 C2区の調査

第1節 調査の概要

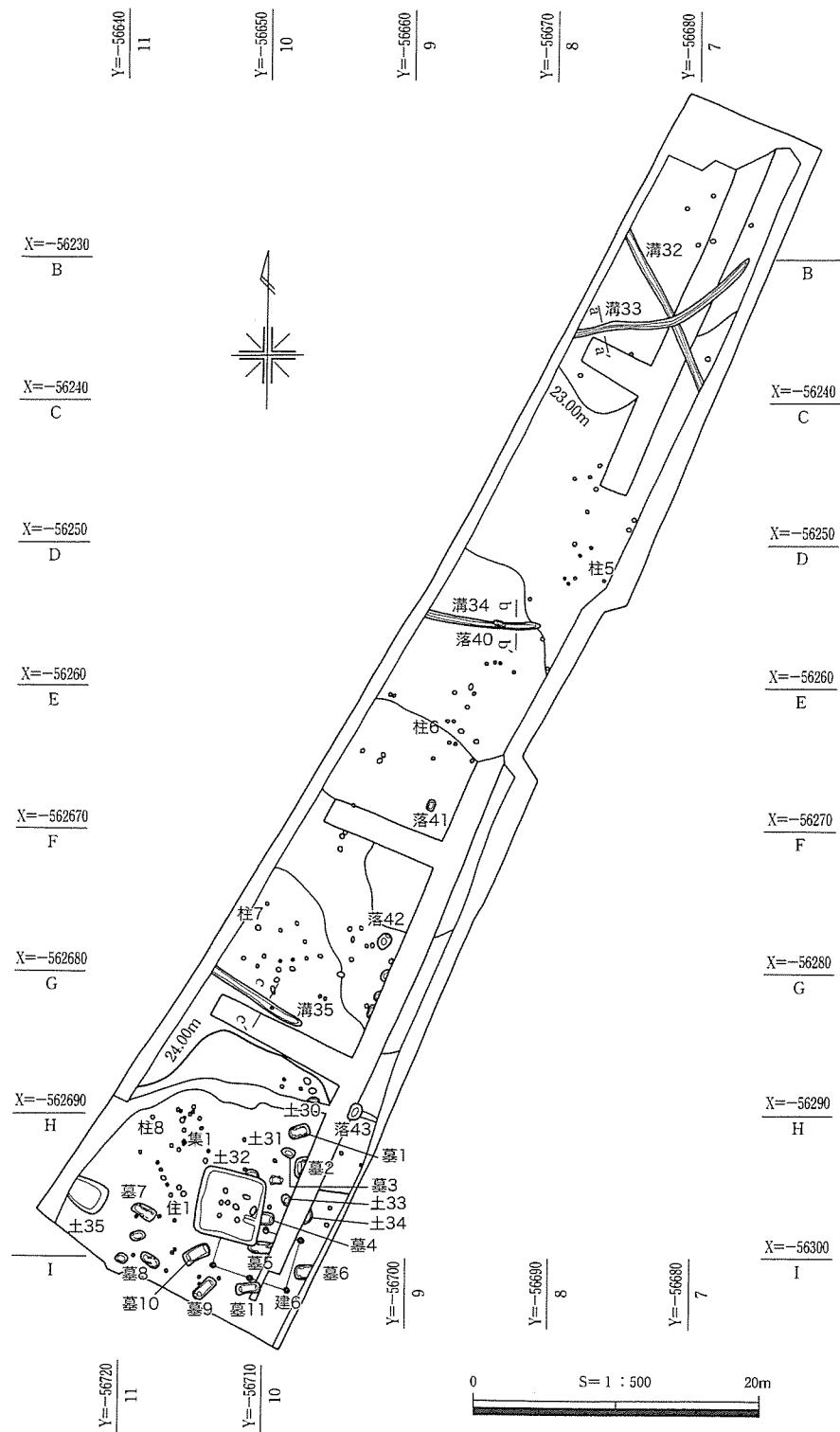
C2区は南側がA区から続く丘陵の縁辺部にあたる。調査区は北東へ向けて傾斜をしており、北東側では浅い谷部となっている。調査区は圃場整備や近世の耕作による削平を受けており、特に南側では顕著であった。

南側における埋土の堆積状況は圃場整備による造成土、近世の耕作土、クロボク、漸移層、ソフトローム層となっている。近世の耕作土やクロボクからは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器が出土している。なお、遺構の検出は漸移層で行った。

遺構は調査区南側に集中し、北側は希薄となる。ここでは縄文時代の落し穴4基、晩期の土坑1基、弥生時代前期の土坑1基、土坑墓11基、古墳時代中期の堅穴住居1棟、土坑1基、溝3条、中世の掘立柱建物1棟、近世の溝1条などが確認された。

確認された遺構のうち、弥生時代の土坑墓群には墓壙の内部に石を配するもの、上面に石を配するものなどが確認されており注目される。

(玉木)



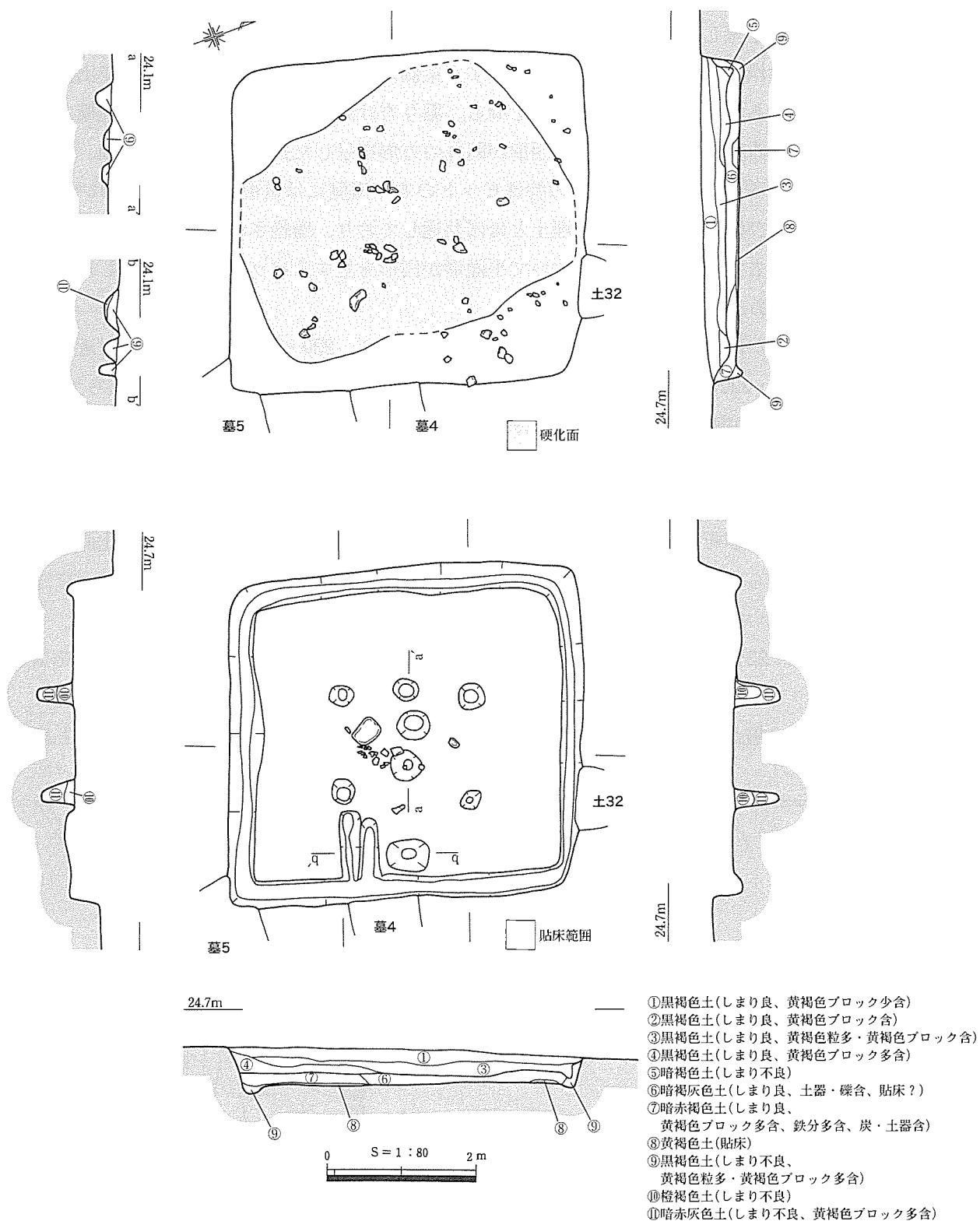
第122図 C2区遺構配置図

第2節 遺構と遺物

1. 竪穴住居

竪穴住居2（第123図、P.L.6・9）

調査区南側、H10グリッド中に位置している。後述する弥生時代前期の土坑墓を破壊して造られて



第123図 竪穴住居2

おり、掘立柱建物6の一部と重複する。また、検出面の東側では土器溜りを確認している。

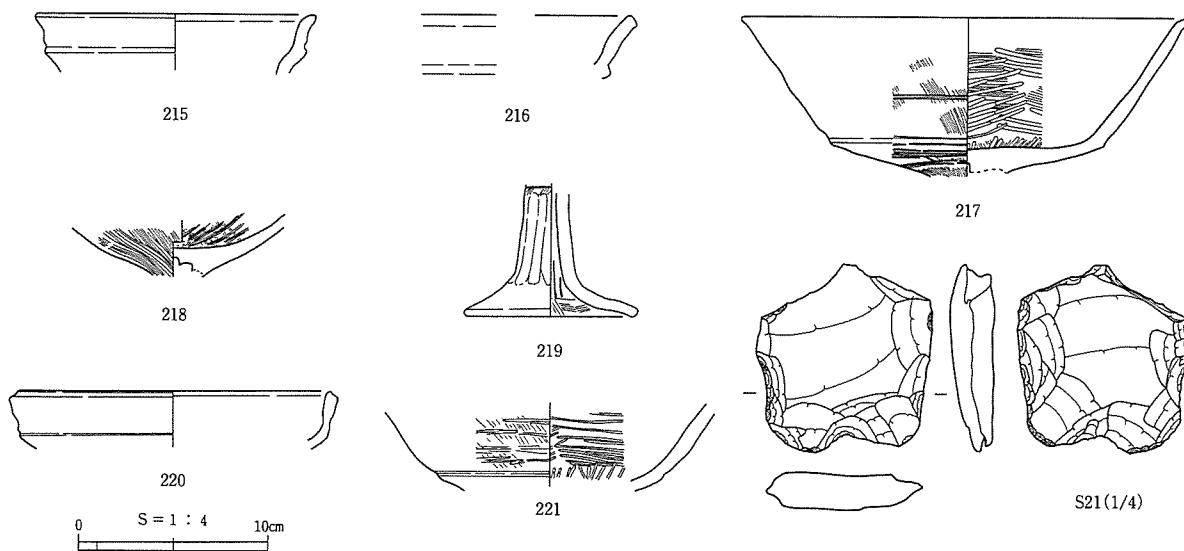
埋土を掘り下げるにあたり、堅く硬化した第6層にあたり、図中では硬化面として示している。この硬化面は不整形な長方形を呈しており、規模は長軸4.5m、短軸3.2mを測る。柱穴などの施設は確認されていないが、この硬化面はほぼ水平に堆積しており、入子状に造られた住居の床面であった可能性が考えられる。さらに掘り下げるにあたり、床面にはほぼ全域にわたり黄褐色ブロックによる貼床が確認された。なお、この床面はホーキ層まで掘り込まれている。

住居の平面形は方形を呈しており、規模は東西4.5m、南北4.8m、検出面からの深さは最大で50cmを測る。床面中央には作業台が置かれており、そのすぐ東側には高壙の壙部が潰れた状況で出土している。主柱穴は4本であり、柱間は140~170cmを測る。堀り方は円形を呈しており、その規模は径30~40cm、深さ60cmを測る。東側の壁際には平面形が隅丸の方形を呈した長軸60cm、短軸30cm、深さ15cmを測る、いわゆる特殊ピットをもつ。この特殊ピットのすぐ南側には重複した溝が掘られている。特殊ピットの上層および溝の埋土は壁溝の埋土とほぼ共通しており、廃絶されるまで機能していた可能性がある。貼床を除去すると、中央部において平面形が円形を呈するピット3基を確認した。このピットの性格は不明である。

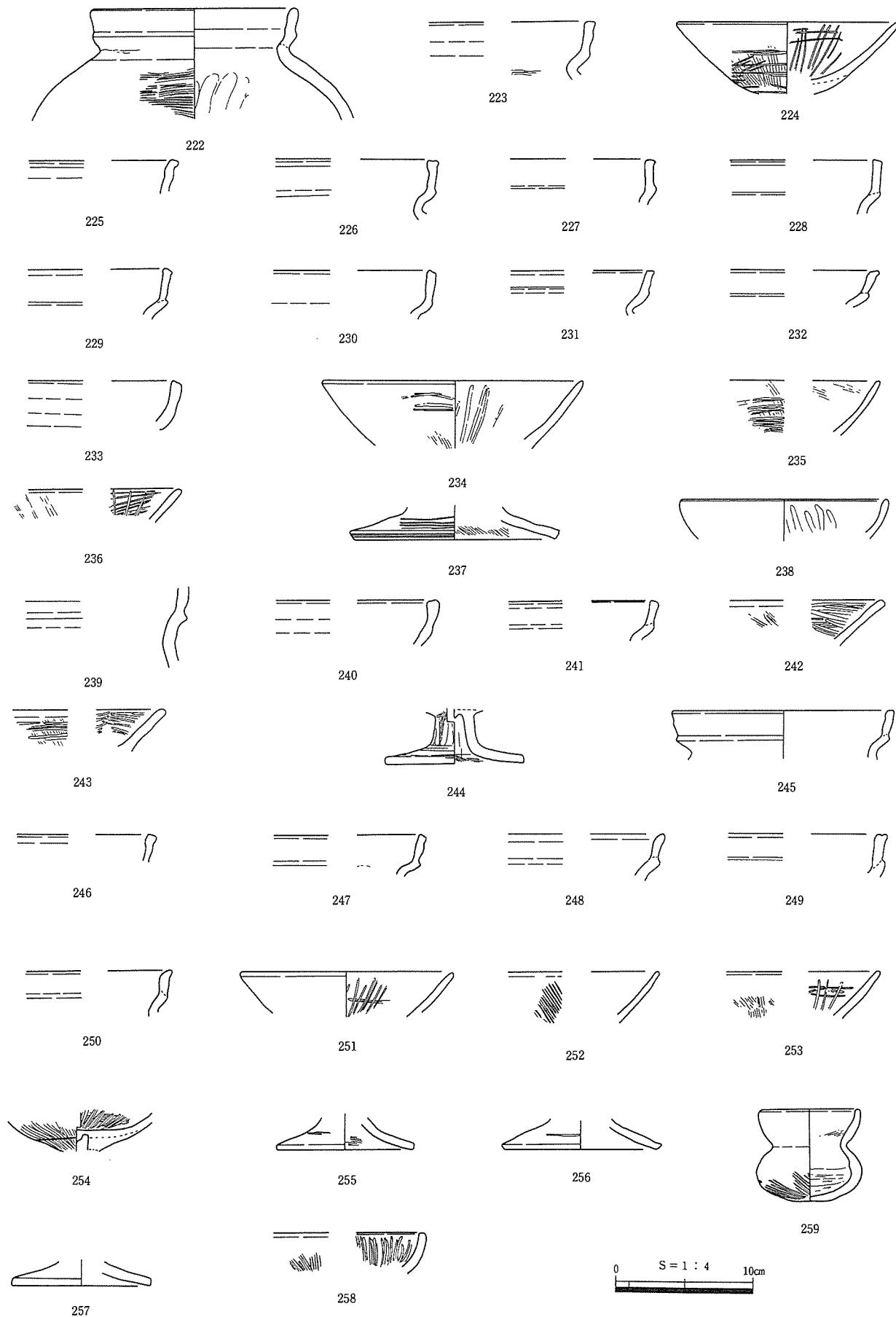
遺物は土師器や石器が出土している。215~219は床面直上から、220・221・S21は床面付近からの出土である。215・216・220は甕である。215・216は複合口縁もち、口縁部はやや外湾して立ち上がり、口縁部下端には鈍い突出が認められる。217~219、221は高壙である。217・221は有段のある大型の壙部、218は皿状を呈する壙部、219は脚部である。S21は打製石鋤であり、埋没過程において混入したものと思われる。

222~224は硬化面およびその下の層である第6・7層からの出土であり、225~238は硬化面の上層にあたる第3・4層からの出土である。222・223、225~233は甕である。222・223は口縁部がほぼ直立し、口縁部下端に鈍い突出が認められるものである。225~227は口縁部端部が肥厚しており、平坦面をもつものである。224・234~236は高壙であり、このうち224・234~236は皿状、238は椀状を呈した壙部である。

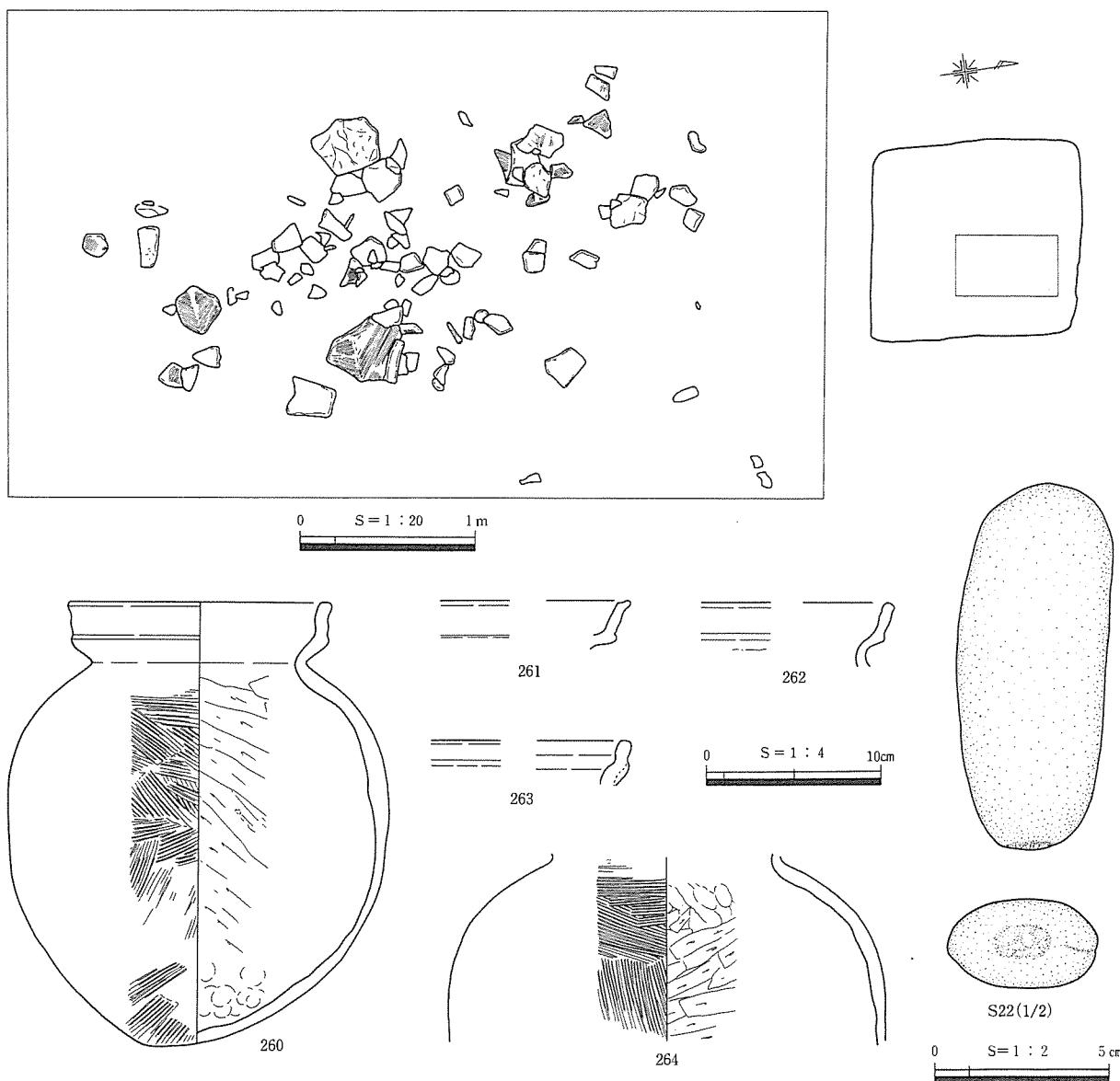
239~244は第1・2層からの出土であり、後述する土器溜りの土器が若干含まれているものと思われる。



第124図 積穴住居2・出土遺物①



第125図 積穴住居2出土遺物②



第126図 土器溜り・出土遺物

れる。239は壺、240・241は甕、242～244は高坏である。245～259は埋土中からの出土であり、出土した層位は不明である。245～250は甕、251～258は高坏である。259は小型丸底壺であり、底部の外面には粗いハケメ、内面には横方向のヘラケズリを施す。

出土した遺物にはわずかながら形態差が認められる。これは時間差とも考えられ、先に述べた重複する住居の可能性、次に述べる土器溜りに起因するものと考えられる。時期は古墳時代中期中葉と考えられる。
(玉木)

土器溜り（第126図）

竪穴住居2の検出面の東側で確認された。1×2mの範囲で土器が集中して出土している。平面および土層観察からは掘り方を確認することができず、住居の埋没過程で窪地となった部分に土器が廃棄され、本遺構が形成されたものと考えられる。

遺物は土師器、石器が出土している。260～264は甕である。260は口縁部が直立し、口縁部下端には鈍い突出が認められる。外面には横～斜方向にハケメが施され、内面底部には指頭圧痕が認められる。S22は敲石である。時期は古墳時代中期中葉と考えられる。
(玉木)

2. 掘立柱建物

掘立柱建物6(第127図、PL. 6)

竪穴住居2の東側に位置しており、北西側の一部が重複している。当初、掘立柱建物と認識しておらず竪穴住居2の調査を先に行つたため、北西側の柱穴の有無を確認することができなかつた。2間×1間の掘立柱建物であり、桁行550cm、梁間356cmを測る。柱の堀り方は円形であり、径20~30cm、深20~40cmを測る。このうちP4では柱痕が確認されており、その規模は径24cmを測る。主軸方向はN-71°-Wを向き、A2区やB1区で確認した掘立柱建物の主軸方向とほぼ直交する。遺物は出土しておらず時期を特定し難いが、中世に属するものと考えられる。(玉木)

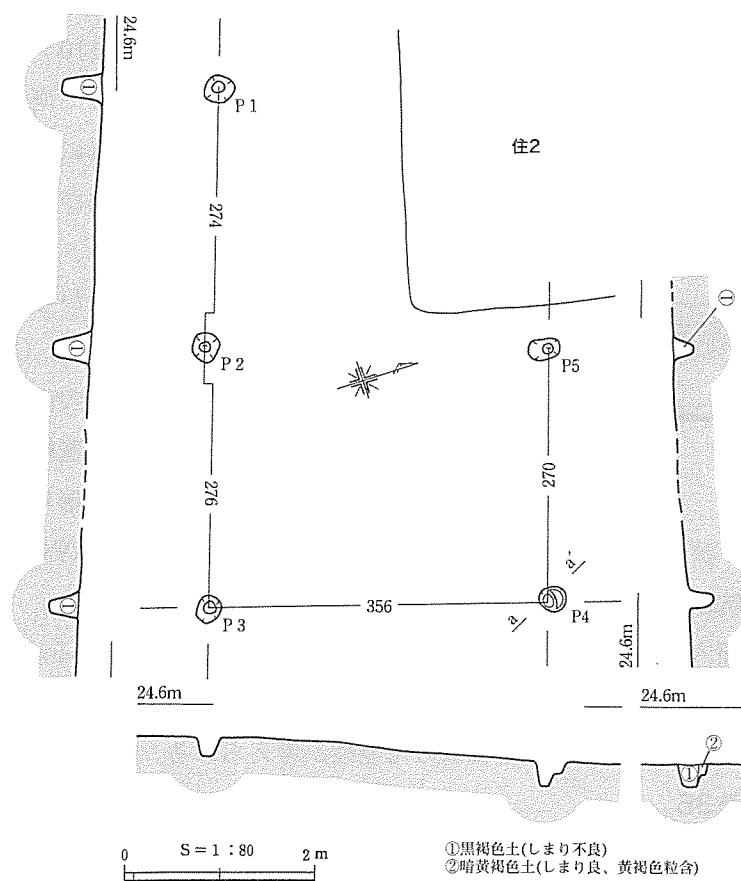
3. 土坑

土坑30(第128図)

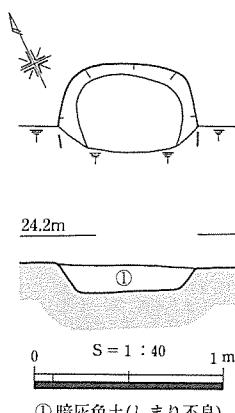
竪穴住居2の北東側に位置しており、南側は暗渠によって消失していた。平面形は隅丸の長方形を呈しており、規模は幅74cm、深さ13cmを測る。遺物は出土していない。(玉木)

土坑31(第129図)

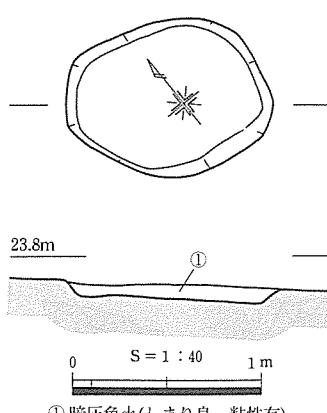
竪穴住居2の南東側に位置しており、土坑墓1・2に近接している。平面形は不整形な円形を呈しており、規模は長軸104cm、短軸長83cm、検出面からの深さ8cmを測る。遺物は上層から礫とともに土師器片が出土している。時期は古墳時代中期と考えられる。(玉木)



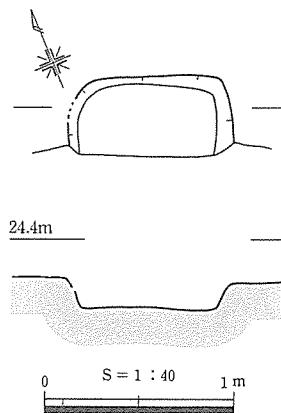
第127図 掘立柱建物6



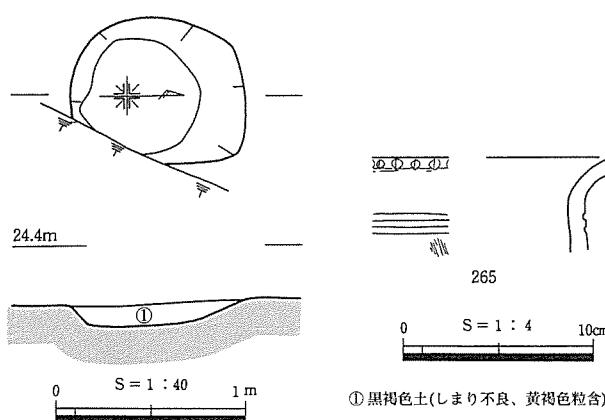
第128図 土坑30



第129図 土坑31



第130図 土坑32



第131図 土坑33・出土遺物

cm、深さ10cmを測る。遺物は265が出土している。時期は弥生時代前期後半と考えられる。(玉木)

土坑34 (第132図)

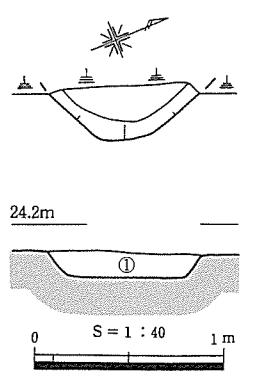
豊穴住居2の東側、掘立柱建物6の北側に位置している。トレンチにより遺構の大半が消失していた。規模は幅80cm、検出面からの深さ12cmを測る。底面は平坦となっており、壁面は傾斜をもって立ち上がる。形状から土坑墓の可能性が考えられる。遺物は出土していない。(玉木)

土坑35

(第133・134図、PL.6・9)

調査区南西端、H11グリッド中に位置している。西側は暗渠により消失していた。平面形は不整形な円形を呈しており、規模は幅233cm、深さ13cmを測る。底面はほぼ平坦となっており、ピットが6基確認された。

遺物は底面からやや浮いた状態で縄文時代晩期の土器266～



第132図 土坑34

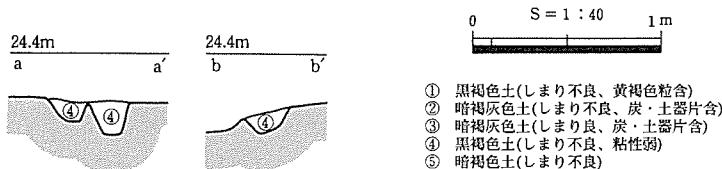
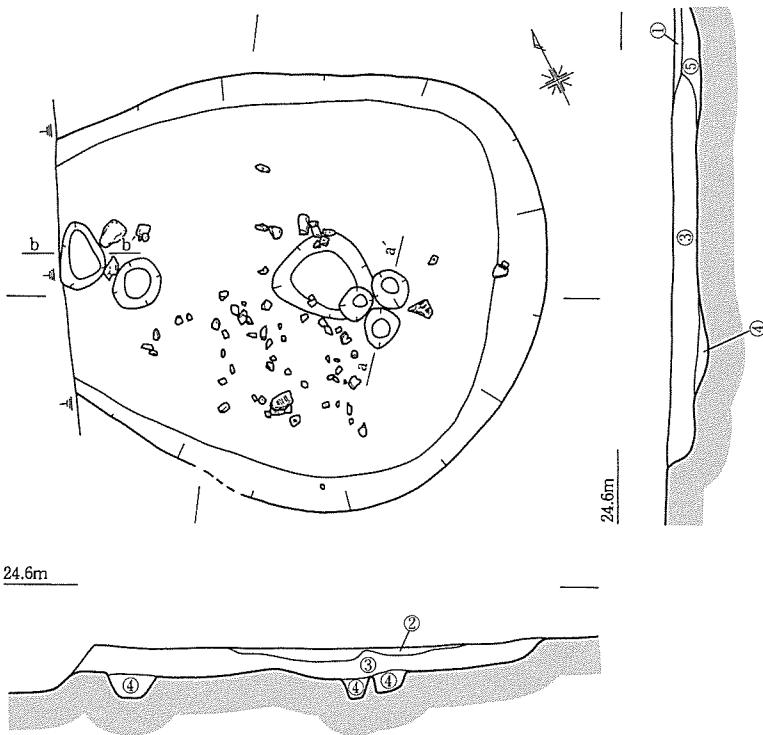
土坑32 (第130図)

H10グリッド中に位置している。豊穴住居2によって南側が消失していた。切り合い関係から、住居に先行するものといえる。規模は幅88cm、検出面からの深さ16cmを測る。底面は平坦となっており、壁面はほぼ直立する。形状から土坑墓の可能性が考えられる。遺物は出土していない。(玉木)

土坑33 (第131図)

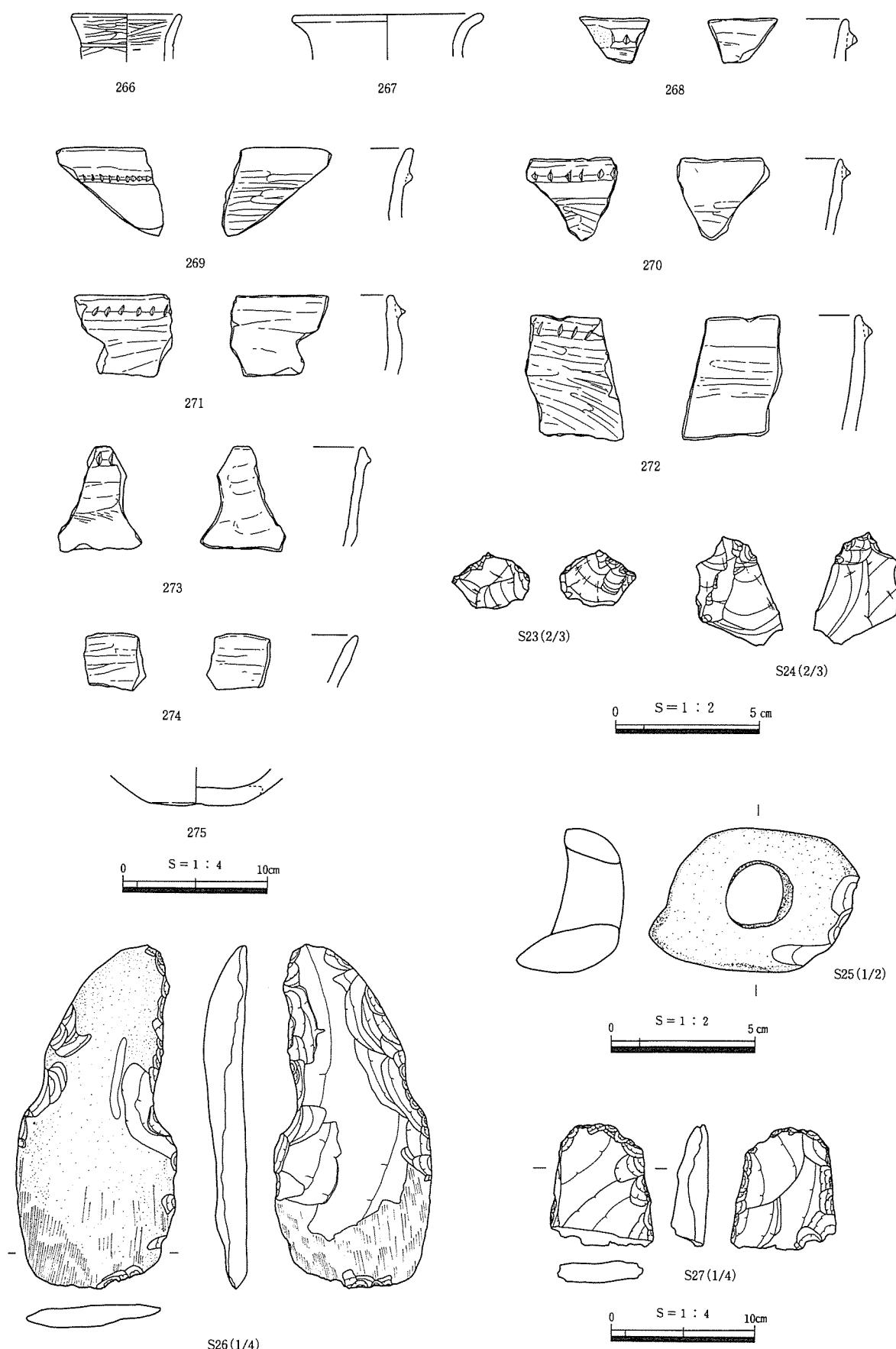
豊穴住居2の東側へ約1.5mの場所に位置している。遺構の東側がトレンチによって消失していた。平面形は不整形な円形を呈しており、規模は径93

cm、深さ10cmを測る。遺物は265が出土している。時期は弥生時代前期後半と考えられる。(玉木)

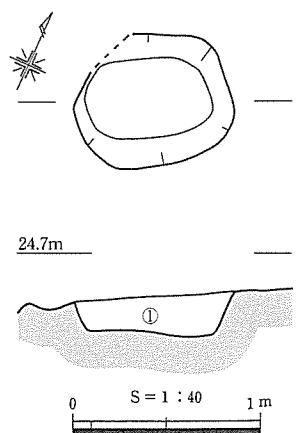


- ① 黒褐色土(しまり不良、黄褐色粒含)
- ② 暗褐色灰土(しまり不良、炭・土器片含)
- ③ 暗褐色灰土(しまり良、炭・土器片含)
- ④ 黑褐色土(しまり不良、粘性弱)
- ⑤ 暗褐色土(しまり不良)

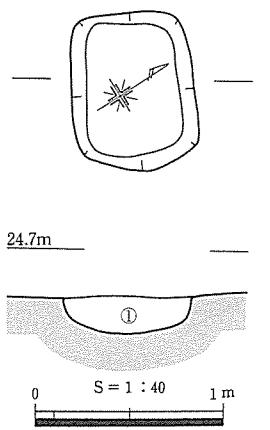
第133図 土坑35



第134図 土坑35出土遺物



第135図 土坑36



①青黒色土(しまり不良、黄褐色粒含)

第136図 土坑37

275、黒曜石の剥片 S 23・24、貝による穿孔のある自然石 S 25、石鍬 S 26・27が出土している。 (玉木)

土坑36 (第135図)

H10グリッド中に位置している。遺構の北側は現代の搅乱によって消失していた。平面形は隅丸の長方形を呈しており、規模は長軸84cm、短軸70cm、検出面からの深さ22cmを測る。底面は平坦であり、壁面は傾斜をもって立ち上がる。遺物は出土していない。 (玉木)

土坑37 (第136図)

土坑36の南西側に位置している。平面形は隅丸の長方形を呈しており、規模は長軸84cm、短軸64cm、検出面からの深さ22cmを測る。底面は皿状を呈しており、壁面はやや傾斜をもって立ち上がる。遺物は出土していない。 (玉木)

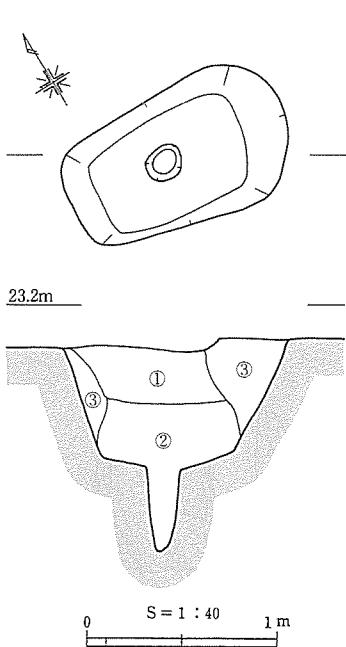
4. 落し穴

落し穴40 (第137図)

D 8 グリッド中に位置している。上面は溝34によって切られてしまい、東側は風倒木により形状が変化している。平面形は隅丸の長方形であり、規模は長軸124cm、短軸68cm、検出面からの深さ16cmを測る。底面はほぼ平坦となっており、中央には径20cm、深さ45cmを測る底面ピットをもつ。遺物は出土していない。 (玉木)

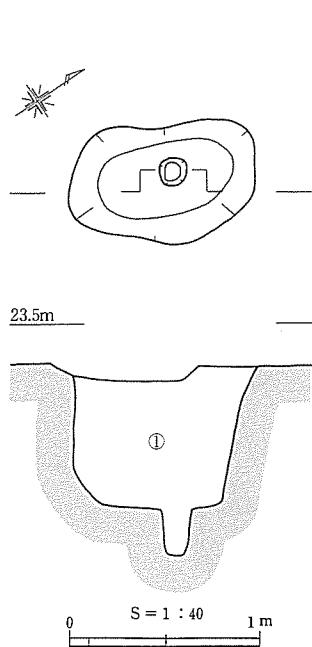
落し穴41 (第138図)

E 8 グリッド中に位置している。平面形は不整形な隅丸の長方形を呈しており、規模は長軸98cm、短軸61cmを測る。底面は平坦となってお



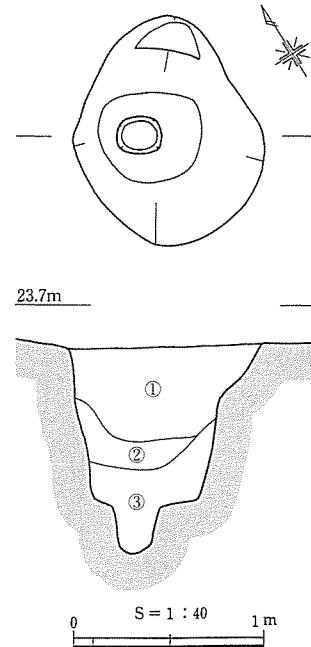
①暗褐色土(しまり不良、黄褐色含)
②黒褐色土(しまり不良、粘性有)
③暗褐色土(しまり不良、黄褐色ブロック含)

第137図 土坑40



①黒褐色土(しまり不良)

第138図 土坑41



①黒褐色土(しまり不良、黄褐色少含)
②赤黒色土(しまり不良、黄褐色少含)
③暗黄褐色土(しまり不良、崩落土)

第139図 土坑42

り、ほぼ中央には径24cm、深さ26cmを測る底面ピットをもつ。遺物は出土していない。(玉木)

落し穴42(第139図)

F9グリッド中に位置している。平面形は不整形な円形を呈しており、規模は径100cm、検出面からの深さ85cmを測る。底面はほぼ平坦となっており、ほぼ中央には径24cm、深さ26cmを測る底面ピットをもつ。遺物は出土していない。(玉木)

落し穴43(第140図)

H9グリッド中に位置している。平面形は不整形な隅丸の長方形を呈しており、規模は長軸130cm、短軸90cm、検出面からの深さ118cmを測る。底面は凹凸が認められ、壁面は崩落のため不整形となっていた。遺物は器面に条痕の認められる土器片が出土している。時期は縄文時代晩期と考える。(玉木)

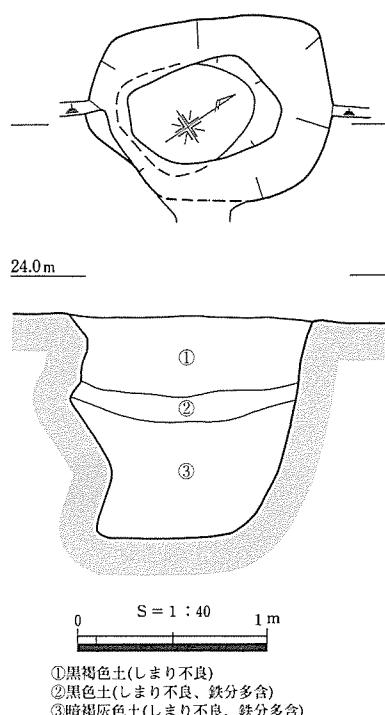
5. 土坑墓

土坑墓1(第141図、PL.6)

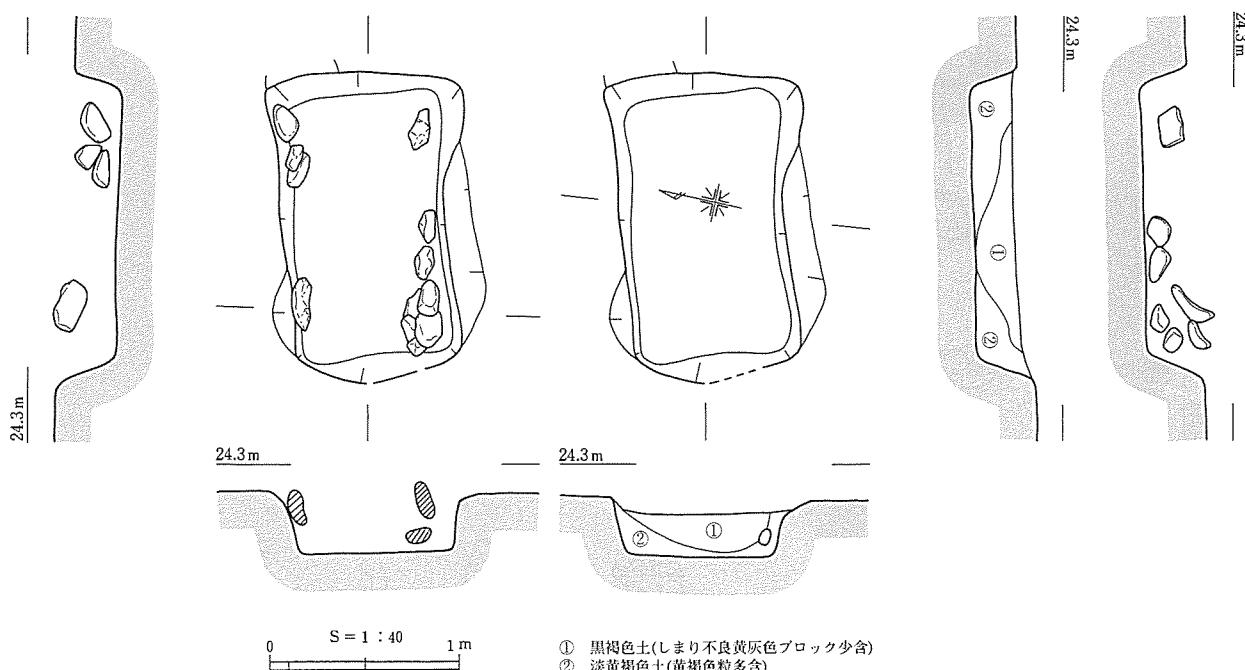
H9グリッド中に位置している。掘り方は長方形を呈しており、規模は長軸164cm、短軸96cm、検出面からの深さ23cmを測る。主軸方向はN-75°-Eを向く。底面は平坦であり、水平となっている。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、側面には10~25cmを測る石が配されている。遺物は出土していない。(玉木)

土坑墓2(第142図、PL.6)

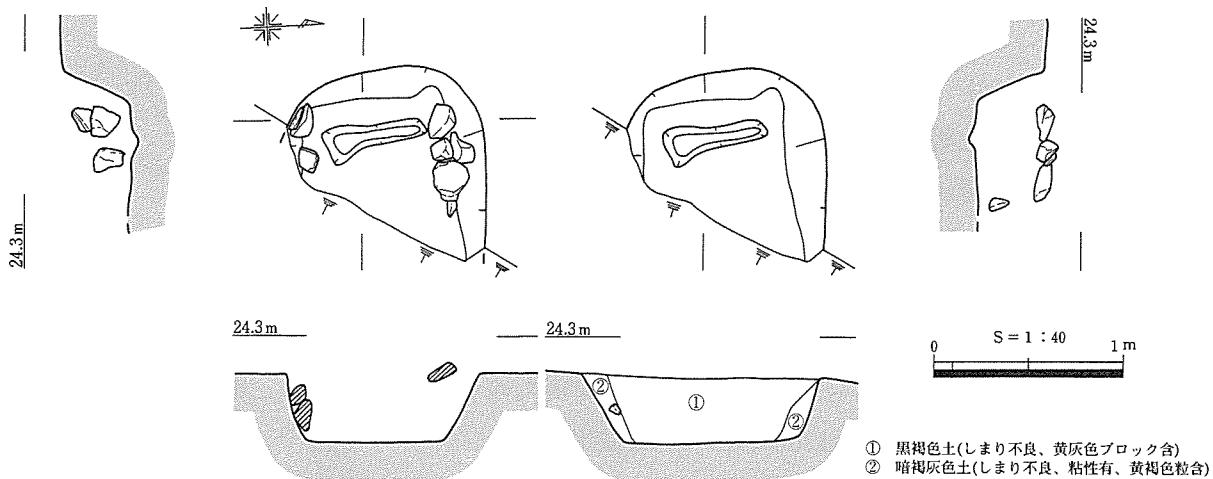
土坑墓1から南側へ約1.5mの場所に位置している。遺構の大半はトレーナによって消失していた。



第140図 落し穴43



第141図 土坑墓1



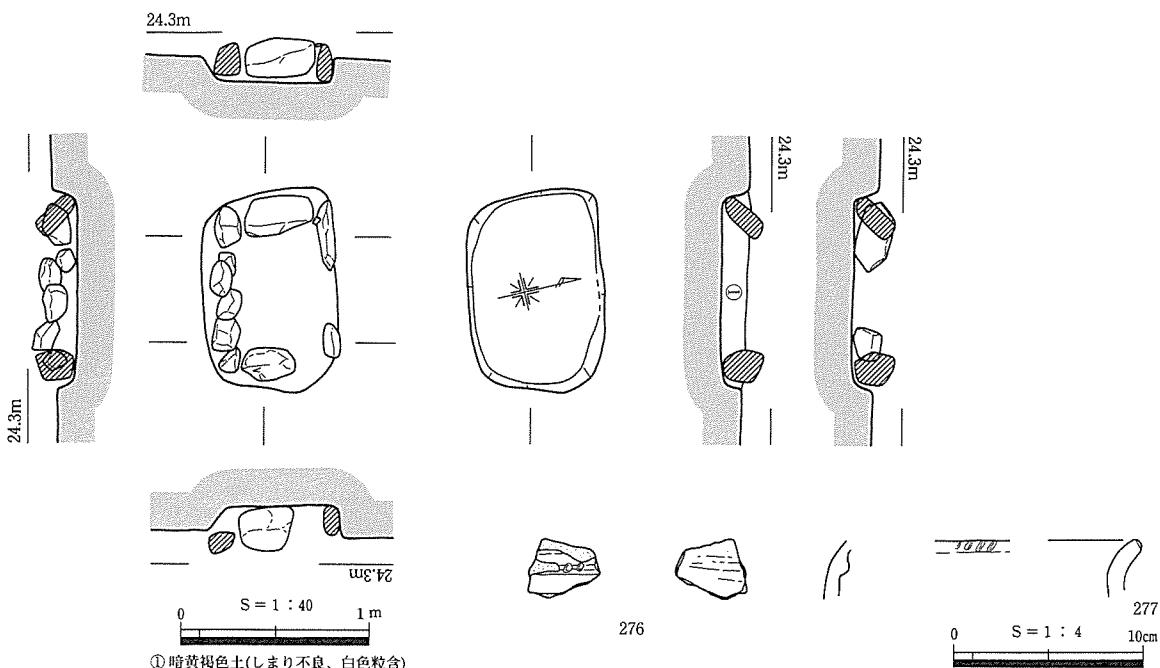
第142図 土坑墓2

規模は幅107cm、検出面からの深さ35cmを測り、主軸方向はN—85°—Wを向く。底面は平坦であり、西側には長軸55cm、短軸10cm、深さ5cmを測る浅い小口穴をもつ。また、底面の北西端が突出しており、木棺を固定する際の切込みと思われる。壁面はやや傾斜をもって立ち上がり、側面には約10cmを測る石が配されている。埋土は2層に分層でき、第2層は木棺の裏込め土と思われる。遺物は出土していない。

(玉木)

土坑墓3（第143図、PL.6）

土坑墓2から東側へ約1mの場所に位置している。平面形は長方形を呈しており、規模は長軸105cm、短軸71cm、検出面からの深さ14cmを測る。主軸方向はN—72°—Wを向く。底面は平坦であり、ほぼ水平となっている。壁面は垂直に立ち上がり、壁の内側を石で囲む。掘り方の小口部には30～40cmを測る比較的大きな石が、側面には15cmほどの石が配されている。また、北西側には35cmを測る扁平な石が配されており、頭位との関連性が窺われる。



第143図 土坑墓3・出土遺物

遺物は276・277が出土している。276は鉢であり、口縁部の下に刻目突帯がつく。277は甕であり、口縁部をくの字状に折り曲げ、端部に刻目を施す。時期は弥生時代前期後半と考えられる。

(玉木)

土坑墓4 (第144図、PL.6)

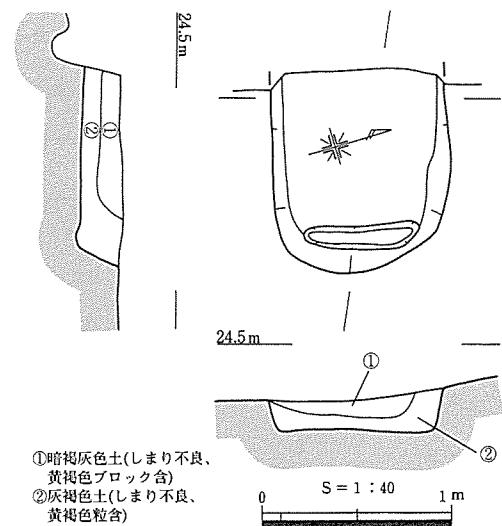
土坑墓3の南側に位置しており、西側半分が竪穴住居2によって消失していた。掘り方は東側がやや張り出した隅丸の長方形を呈しており、規模は幅94cm、検出面からの深さ20cmを測る。主軸方向はN-72°-Wを向く。底面はほぼ平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。底面の東側には長軸60cm、短軸13cm、深さ3cmを測る浅い小口穴をもつ。埋土中から遺物は出土していない。

(玉木)

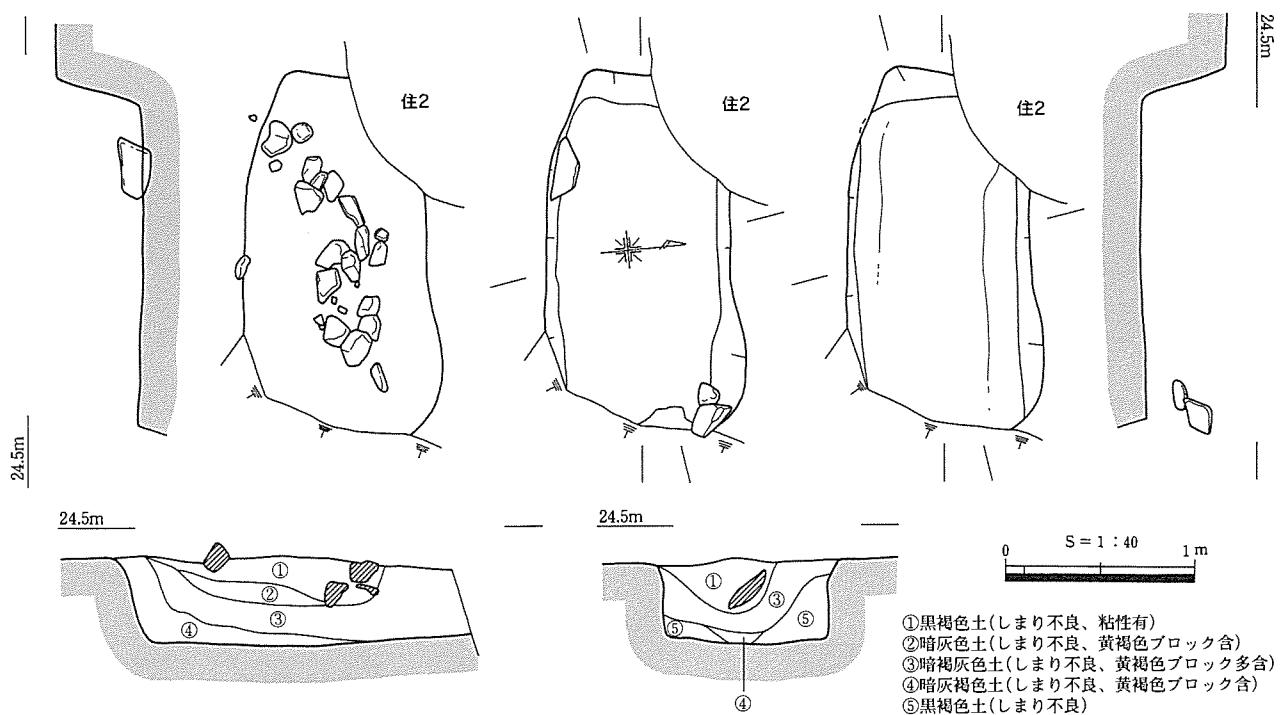
土坑墓5 (第145・146図、PL.7・9)

土坑墓4から南側へ約1.5mの場所に位置している。北西端は竪穴住居2によって、南東端はトレンチによって消失していた。上面ではS28を含む10~20cmを測る石がまとまって検出された。これらの石は土坑墓の上面を覆っていたものと考えられるが、近世の耕作および圃場整備によって大半が消失しているものと考えられ、その構造は不明である。

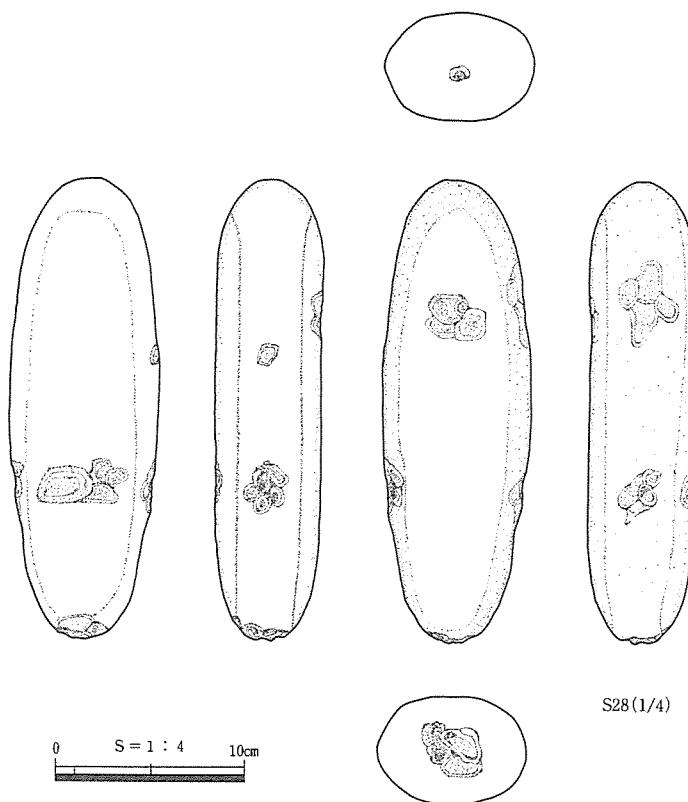
掘り方は長方形を呈しており、規模は長軸185cm、幅97cm、検出面からの深さ45cmを測る。主軸方向はN-85°-Wを向く。底面は両側面から20~30cmの範囲において平坦となっており、そこから中心に向かって緩やかに窪んでいる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、側面の北東端と南西端において10~20cmを測る石が配されている。埋土は5層に分層でき、いずれもクロボク起源のものであった。第1



第144図 土坑墓4



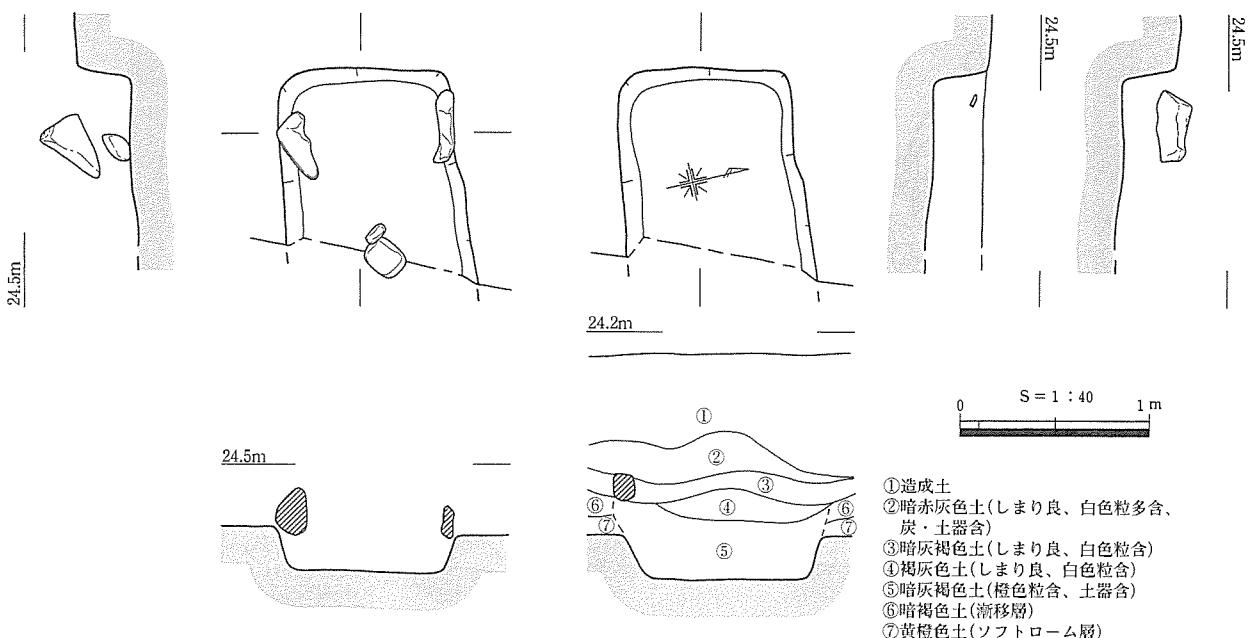
第145図 土坑墓5



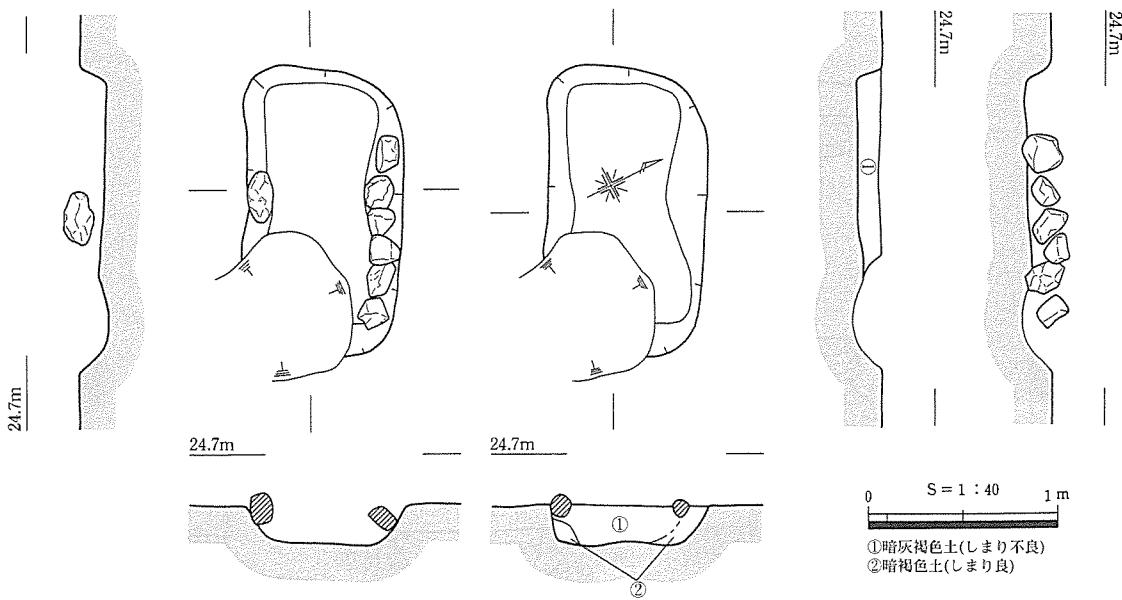
第146図 土坑墓5出土遺物

耕作などによって散失したためか確認した数は少なく、その構造は不明である。

平面形は長方形を呈しており、規模は幅95cm、検出面からの深さ20cmを測る。主軸方向はN—60°—Wを向く。底面はほぼ平坦となっており、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。土坑墓の両側には40cmを測る石が配されている。埋土は7層表記しているが、第4・5層が本遺構に伴うものである。第5層からは弥生土器の細片がわずかに出土している。遺物から時期の特定はし難いが、弥生時代前期の範



第147図 土坑墓6



第148図 土坑墓7

(玉木)

疇に収まるものと考えられる。

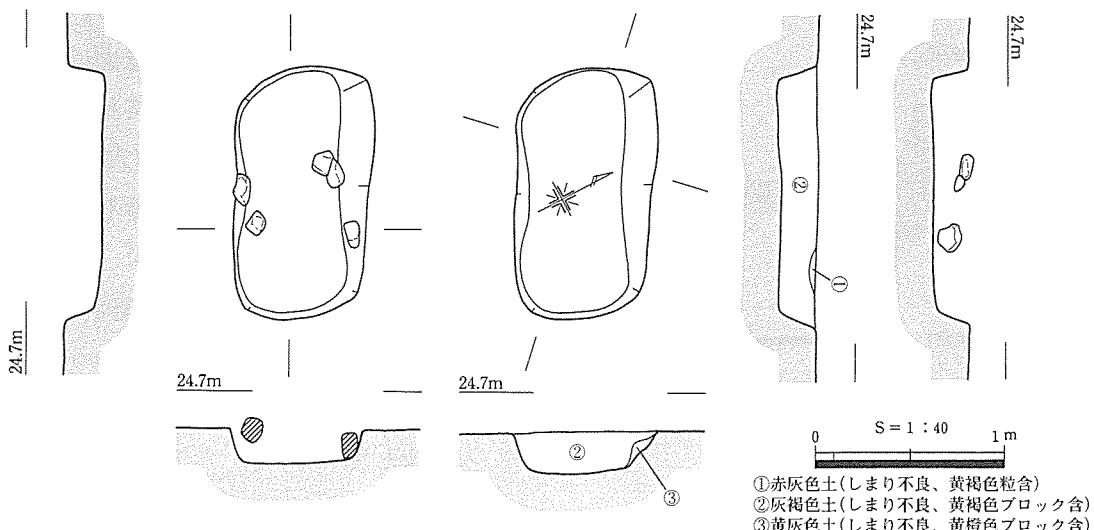
土坑墓7 (第148図、P L.7)

豊穴住居2の西側、H10グリッド中に位置している。東側は現代の搅乱によって消失しており、上面も近世の耕作や圃場整備によって削平されている。平面形は長方形を呈しており、規模は長軸153cm、短軸84cm、検出面からの深さ20cmを測る。主軸方向はN-60°-Wを向く。底面は平坦であり、壁面はやや傾斜をもって立ち上がる。両側面には15cmを測る石が配されており、特に北側では整然と一列に並べられている。埋土は2層に分層でき、第2層は木棺の裏込め土であったと考えられる。遺物は出土していない。

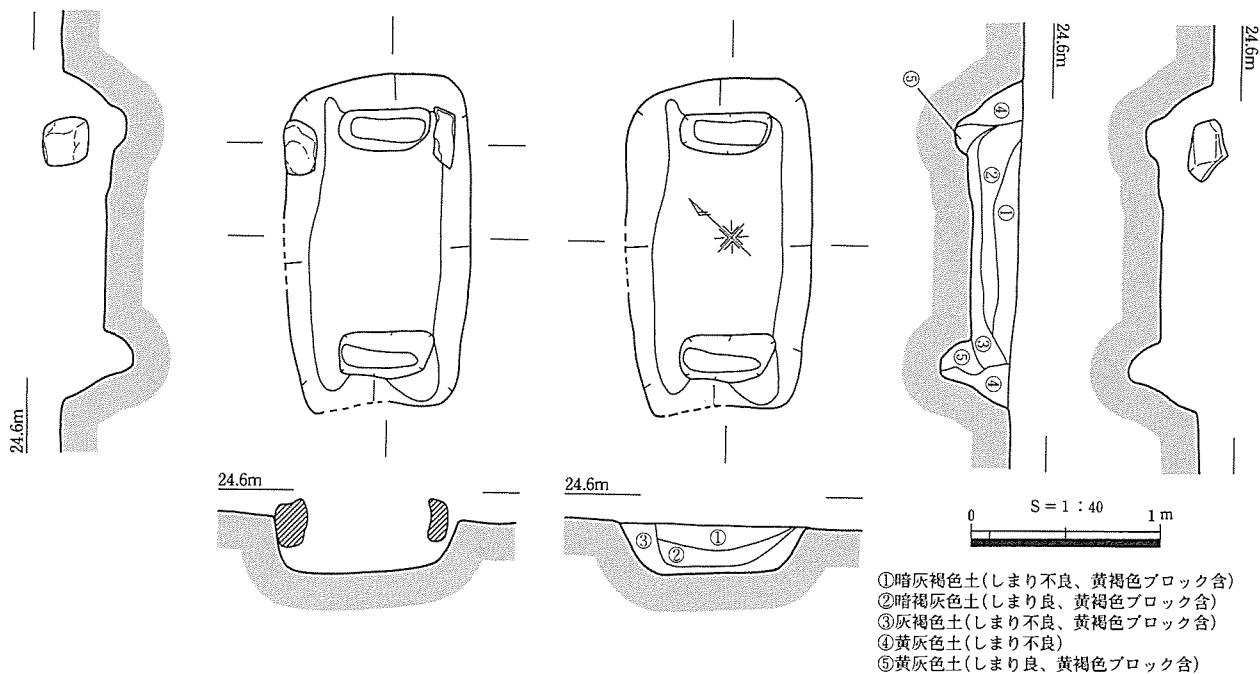
(玉木)

土坑墓8 (第149図、P L.7)

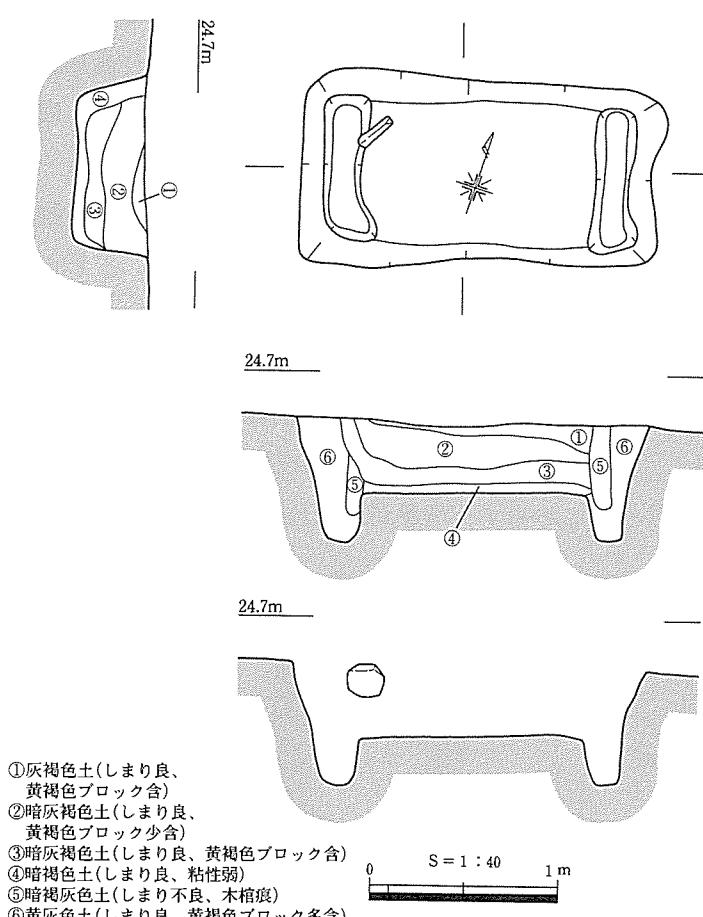
土坑墓7の南側に位置している。上面は近世の耕作や圃場整備等によって削平されている。平面形はやや北西隅が張り出した隅丸の長方形を呈しており、規模は長軸132cm、短軸70cm、検出面からの深さ22cmを測る。主軸方向はN-65°-Eを向く。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。側面には10cmを測る石が配されている。石は整然としておらず、埋葬時の原位置を保っていない可能



第149図 土坑墓8



第150図 土坑墓9



第151図 土坑墓10

土坑墓10 (第151図、P L.7)

土坑墓9の北側に位置している。平面形は長方形を呈しており、規模は長軸185cm、短軸95cm、検出

性がある。埋土は3層に分層でき、第3層は木棺の裏込め土であったと考えられる。

形状・規模は土坑墓7と類似しており、ほぼ同時期の所産と思われる。遺物は出土していない。
(玉木)

土坑墓9 (第150図、P L.7)

土坑墓8の東側、竪穴住居2の南側に位置している。平面形は長方形を呈しており、底面の隅には側板の切込みが認められる。規模は長軸172cm、短軸97cm、検出面からの深さ25cmを測る。主軸方向はN-47°-Eを向く。底面は平坦であり、小口部の両側において長さ50cm、幅25cm、深さ22cmを測る小口穴が認められ、この心々距離は115cmを測る。壁面はやや傾斜をもって立ち上がり、北側には一辺30cmを測る石が両側に配されている。埋土は5層に分層でき、このうち第5層は木棺の裏込め土と考えられる。遺物は出土していない。
(玉木)

面からの深さ22cmを測る。主軸方向はN-75°-Eを向く。底面は平坦であり、小口部の両側に長さ75cm、幅18cm、深さ22cmを測る小口穴をもち、この心々距離は120cmを測る。壁面はやや傾斜をもって立ち上がり、北西端において一辺20cmを測る扁平な石が配されている。埋土は6層に分層でき、第5層は小口板の痕跡を示しており、幅10cmを測る。遺物は出土していない。

(玉木)

土坑墓11

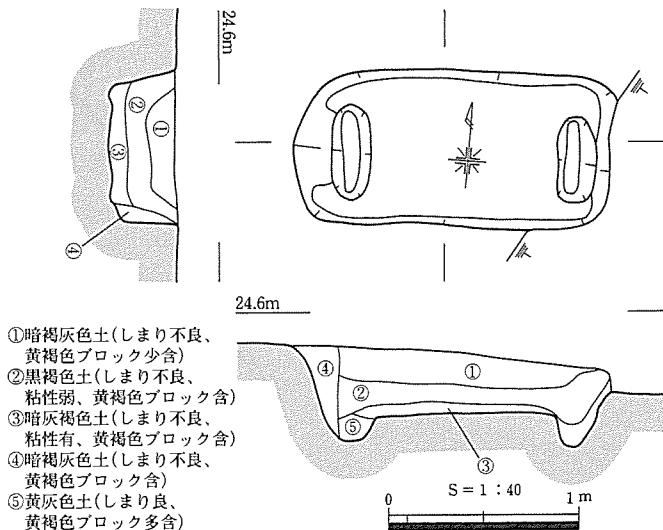
(第152図、P.L.7)

土坑墓10の東側に位置している。遺構の東側はトレーナによって削平されている。平面形は西側が弧の字状を描く長方形を呈しており、底面の西側には側壁の切込みが認められる。規模は長さ167cm、幅83cm、検出面からの深さ34cmを測る。底面は平坦となっており、側面付近では浅く窪む。墓壙の小口部には長さ50cm、幅20cm、深さ15cmを測る小口穴をもち、心々距離は115cmを測る。埋土は5層に分層でき、第5層は木棺の裏込め土である。遺物は出土していない。

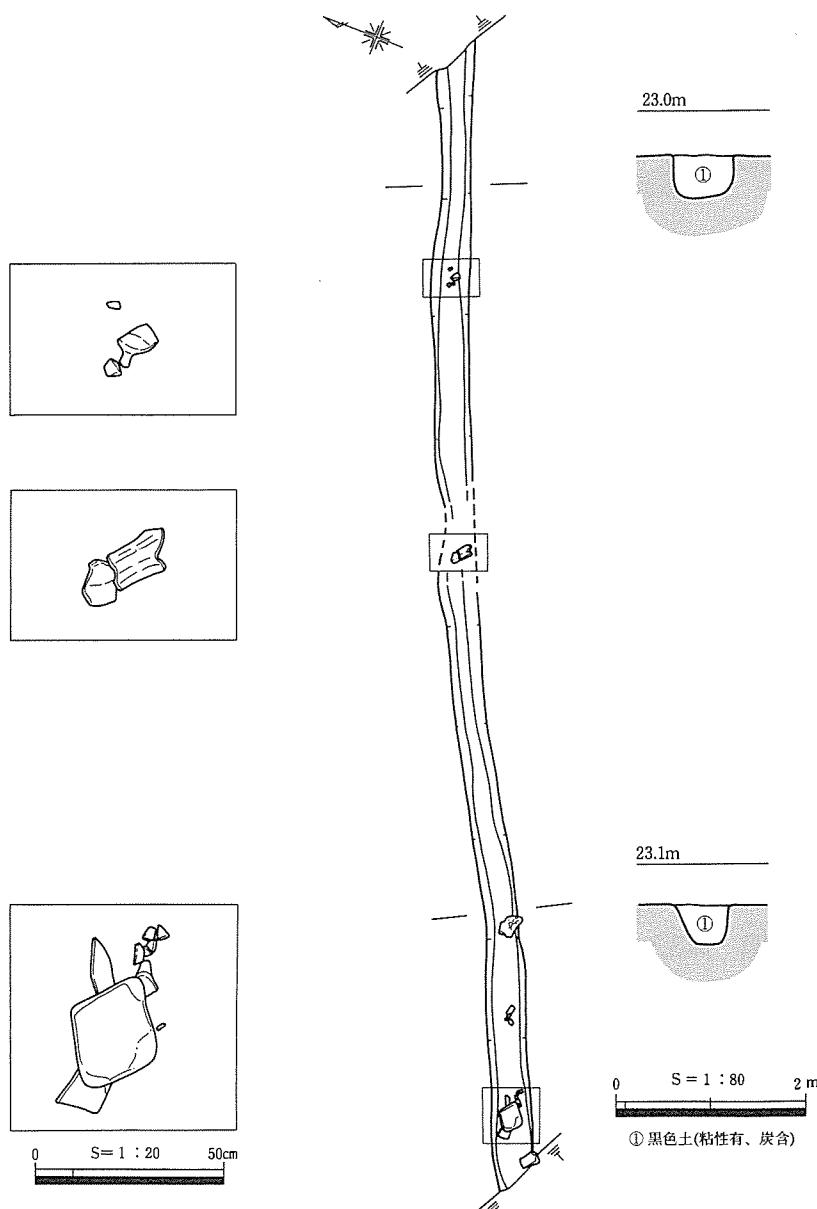
(玉木)

6. 溝**溝32 (第153図)**

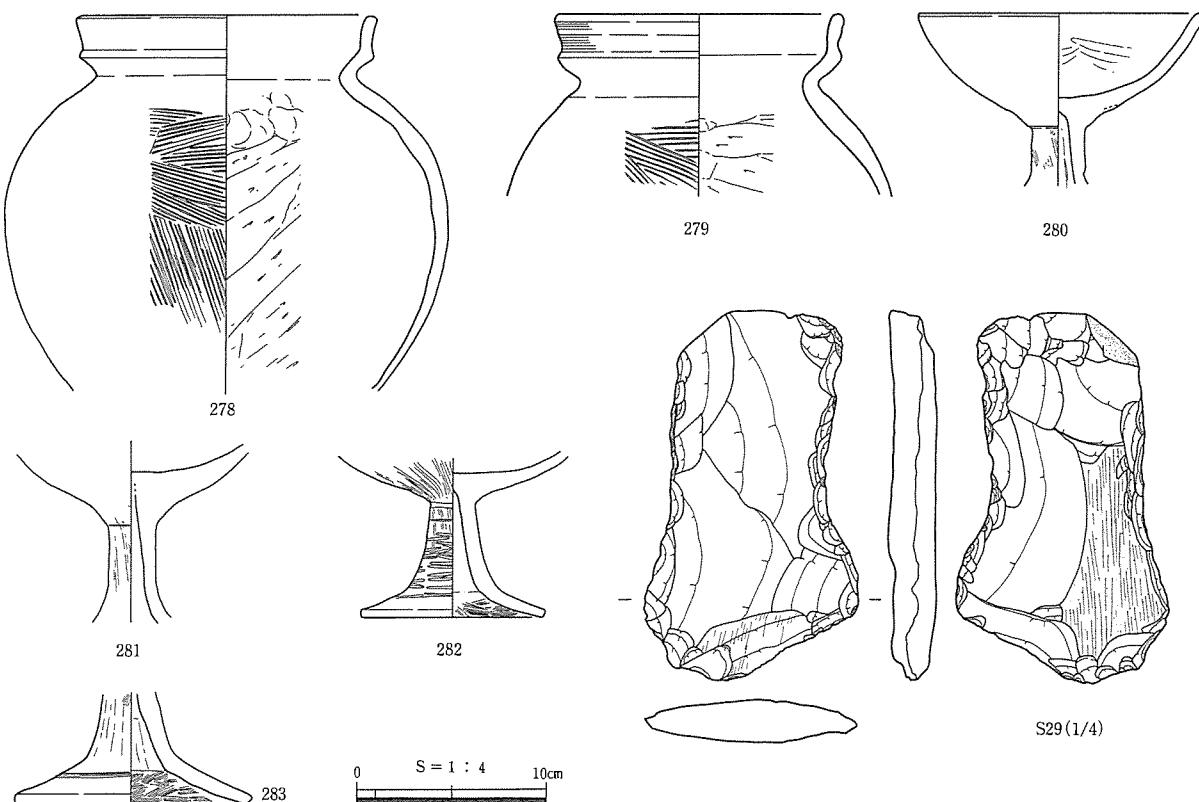
調査区の北側、B7グリッド中に位置している。北西-南東方向に向かって延びており、前章で述べた溝30と同一のものと考えられる。ほぼ直線的に延びており、断面形は逆台形を呈



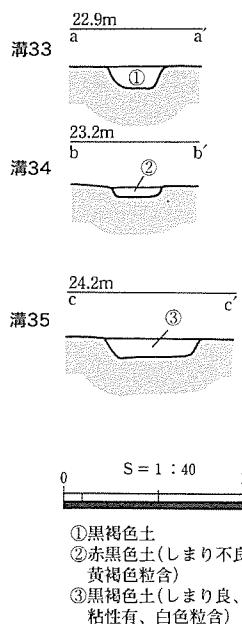
第152図 土坑墓11



第153図 溝32



第154図 溝32出土遺物



第155図 溝33～35 溝33（第155図）

B 7 グリッド中に位置しており、溝32と重複している。北東一南西方向へ弧の字状に延びており、蛇行していたと考えられる。規模は幅30cm、検出面からの深さ12cmを測り、全長13mを検出した。底面は皿状を呈しており、壁面は傾斜をもって立ち上がる。埋土は黒褐色土1層となっており、そこからは染付けの細片が出土している。時期は近世の範疇に収まるものと考える。

(玉木)

溝34（第155図）

D 8 グリッド中に位置している。東西方向へ直線的に延びており、前章で述べた溝31と続くもので

ある。東側は耕作による削平のために消失しており、規模は幅28cm、検出面からの深さ5cmを測り、全長7.9mを検出している。底面は平坦であり、壁面がやや傾斜をもって立ち上がる。埋土は赤黒色土となっており、溝31の埋土と若干異なるが、後世の耕作による影響と考えられる。

(玉木)

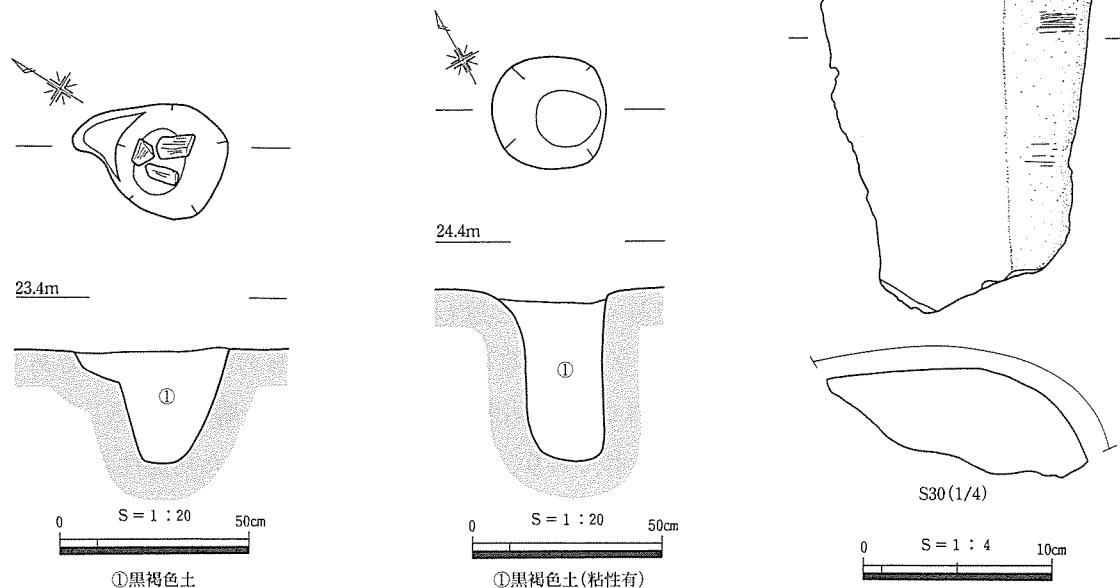
溝35（第155図）

G 9・10グリッド中に位置している。北西—南東方向へ直線的に延びており、規模は幅50cm、検出面からの深さ10cmを測り、全長7.4mを検出している。底面は平坦であり、壁面がほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土の1層であり、ここから遺物は出土していない。埋土の状況から溝32・34とほぼ同時期のものと考えられる。（玉木）

7. 柱穴

柱穴5（第156図）

D 8グリッド中に位置している。掘り方は円形を呈しており、北側には段を有する。規模は径28cm、検出面からの深さ42cmを



第156図 柱穴5

第157図 柱穴6・出土遺物

測る。底面には一片10cmを測る角材が3点出土しており、柱穴と判断した。ただ、掘立柱建物としてまとまっておらず、調査区外へ延びる可能性がある。時期は近世と考えられる。

(玉木)

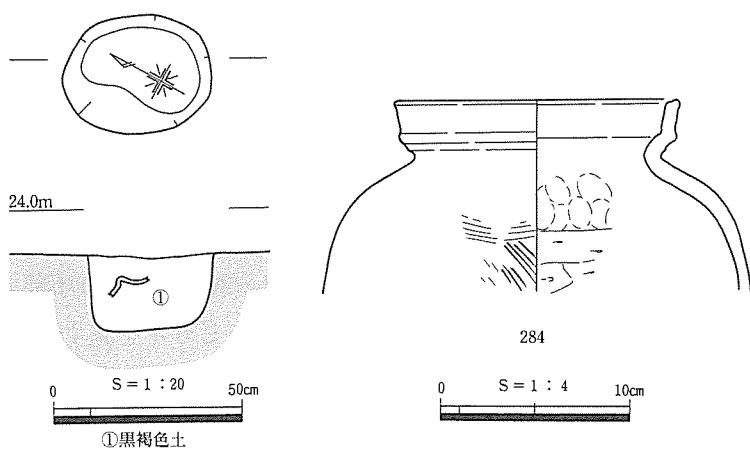
柱穴6（第157図）

E 8グリッド中に位置している。平面形は円形を呈しており、規模は径28cm、深さ42cmを測る。遺物はS 30が壁に密着した状態で出土しており、柱抜き取り後、これを埋めたものと考えられる。

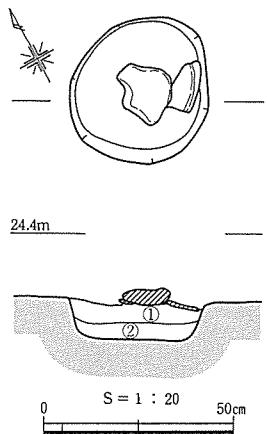
(玉木)

柱穴7（第158図）

F 10グリッド中に位置している。掘り方は上面が円形を呈して



第158図 柱穴7・出土遺物



いるが、底面では不整形となっている。規模は径33cmを測り、検出面からの深さ20cmを測る。

遺物は埋土中から284が出土している。284は複合口縁をもつ甕であり、口縁部はほぼ直立し、口縁部下端には鈍い突出をもつ。外面には横～斜方向の粗いハケメ、内面肩部には指頭圧痕、胴部には横方向のヘラケズリが施される。時期は古墳時代中期後半と考える。
(玉木)

柱穴8（第159図）

H10グリッド中に位置している。平面形は円形を呈しており、規模は径36cm、深さ10cmを測る。上面には12cmを測る石が置かれており、その下側から285が出土している。

285は鉢である。口縁部が緩やかに外反して立ち上がり、口縁端部が

細く尖る。口縁部からやや下がった位置には無刻目突帯がつき、外面にはナデが施される。時期は弥生時代前期後半と考える。
(玉木)

8. 集石

集石1（第160図）

柱穴8の南西側に位置している。明瞭な掘り方を確認することができず、石を配しただけの構造であったものと思われる。6～14cmの石8個で構成されており、このうち西側に離れて位置するものは閃緑玢岩である。閃緑玢岩はC1区の包含層中から出土した磨製石斧S16の石材として利用されており、石材として持ち込まれた可能性が考えられる。

(玉木)

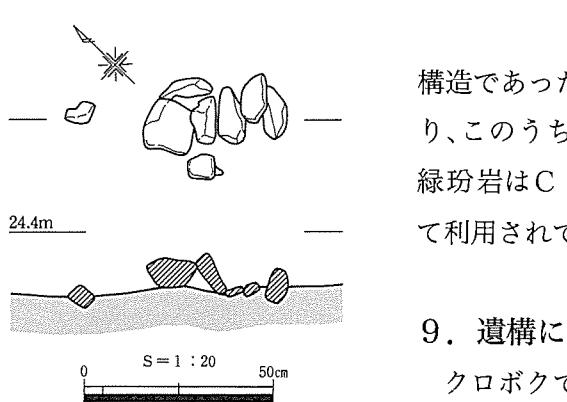
9. 遺構に伴わない遺物（第161図、PL.10）

クロボクである黒褐色土や近世の耕作土中から縄文時代から近世までの遺物が出土している。286～300、S31～33は縄文時代から弥生時代にかけての遺物である。286～293は深鉢であり、

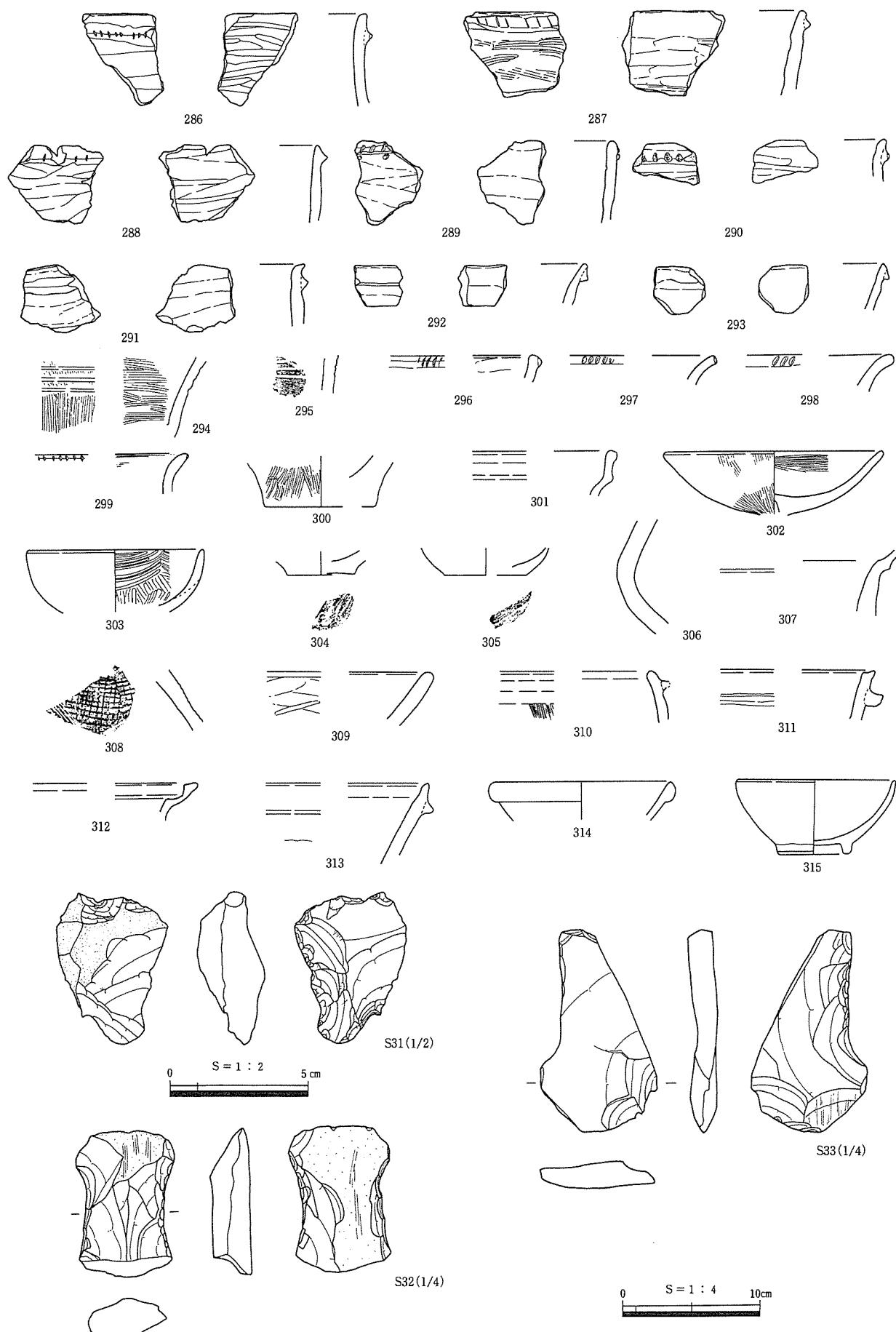
286～290は口縁部からやや下がった位置に刻目突帯がつき、291～293には無刻目突帯がつく。294・300は壺であり、294は外面に縦方向のハケメ後凹線文をめぐらせていている。295・297～299は甕であり、295は横方向のハケメ後沈線文をめぐらせてている。297～299は口縁部をくの字状に折り曲げ、口縁端部に刻目を施している。296は口縁端部に刻目突帯がつく鉢である。S31は未製品であり、石材に玉髓が使用されている。S32・33は打製石鋤であり撥形を呈している。

301～303は古墳時代の遺物である。301は複合口縁をもつ甕であり、口縁部が垂直に立ち上がり、口縁端部は外側へ肥厚し平坦面をもつ。302・303は高坏の坏部であり、302は浅い皿状を呈している。303は椀状を呈しており、内面に多角形のヘラミガキを施す。

304～315は中世から近世にかけての遺物である。304・305は皿であり、底面に糸切りの痕跡が認められる。306～308は甕、309は鉢、310・311は釜、312・313は鍋である。314は白磁碗であり、口縁部が玉縁となる。315は碗であり、内外面には鉄釉が掛かる。
(玉木)



第160図 集石1



第161図 遺構に伴わない遺物